九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

佐世保市宇久町平方言の記述的研究

門屋, 飛央

https://doi.org/10.15017/4059956

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

令和元年度博士学位申請論文

佐世保市宇久町平方言の記述的研究

門屋　飛央

まえがき

日本語史は、中央語を歴史的に考察していくことで研究が進められてきた。しかし、日本語とは、日本列島全体で話されている言語である。中央語だけではなく、各地の方言を記述し、それぞれの方言での日本語のあり方をみることで、日本語史をより重層的に明らかにすることができると考える。

そのためには、まず方言において、中央語と同じくらいの包括的な記述が必要である。これまでの方言研究は、自分の興味がある現象だけを扱うため、その方言における他の現象は扱われなかった。また、先行研究で調査がされている地域の方言を、再調査することで現象の記述を深めていく研究が多いことは、複数の研究者がひとつの現象ばかりを研究することになり、その方言での他の現象は扱われないことになる。これまでの方言研究の成果では、中央語ほどに、ひとつの方言の体系を描き出すことはできていない。

したがって筆者は、九州地方の五島列島最北端に位置する、長崎県佐世保市宇久町の方言を包括的に記述することで、中央語とは異なる日本語をみる。有元光彦(2007)は、五島列島と天草、鹿児島県の甑島という、それぞれの方言が、ひとつの音韻現象で結びついていることを述べている。広く九州方言全体を考察するうえでも、五島列島の方言は重要な位置を占めていると考えられるにもかかわらず、この地域の方言はこれまであまり研究がなされてこなかった。さらに、宇久町は五島列島に位置しながらも、行政区画では上五島市ではなく、佐世保市に区別される。このような区別は、住民の言語生活にも何らかの影響が考えられ、興味深い地域である。

また、琉球方言などはユネスコから「危機言語」と認定され、各方面で言葉を後世に残す試みが行われている。しかし、「危機言語」と言われていない方言であっても、五島列島などの離島では、方言が消滅しつつあるのが現状である。五島列島の方言自体には、これまで先行研究がほとんどないため、このままでは人知れずなくなってしまう恐れがある。この宇久町平の方言を記述し保存しておくことは、方言研究だけでなく、社会に対しても資するものが大きいと考えている。

この宇久町のなかで、経済的な中心である平（たいら）の方言を平方言と呼ぶ。この平方言を通して、重層的に日本語史を描き出すことを目的とする。

以下、論文の構成について、簡単に述べる。

まず、「第 1 部　宇久町平方言の文法記述」では、佐世保市宇久町平方言を包括的に記述する。この記述をもって、平方言の文法体系を明らかにする。各章では、それぞれの面から平方言を記述することを行う。「1.　はじめに」において平方言に関する概要を述べる。「2.　音韻論」では、音声・音韻の考察を行う。音素目録や音節構造を考察したうえで、平方言ではモーラ音素に/H/を設定すべきであることを述べる。「3.　形態論」では、言語形式の単位を考察し、それぞれの品詞を定義する。そして、動詞や形容詞の活用体系を考察する。「4.　格」では、格助詞を取り上げ、それぞれの格助詞の用法をまとめる。「5.　単文」では、ヴォイス、アスペクト、モダリティを記述していく。「6.　複文」では、従属節を分類し、それぞれの用法を記述していく。

次に、「第 2 部　平方言にみられる文法現象」では、共通語と異なる文法体系をもつ平方言を、いくつかのトピックから、さらに深く考察する。「7.　宇久町平方言の「ゴト（如）」の用法」では、「様態」を表す「ゴト」が「希望」にも用いられていることについて考察を行う。また、福岡市方言と鹿児島方言と比較を行い、形態と意味の対応も考察する。「8.　宇久町平方言の可能形式」では、「可能」の条件スケールを用いて、当該方言の可能形式の意味を考察する。そして、条件による形式の区別を考察する。

最後に「結語」で本論文についてまとめ、今後の課題を述べる。付録に、「小値賀町藪路木島方言の/(-a)-Ns-/を用いた行為指示」をつける。小値賀町藪路路木島方言には、平方言で用いられない行為指示の形式がみられる。同じ五島列島方言に属するなかで、このような違いがみられることは大変興味深い。付録は、この形式の用法と由来を考察するものである。

目次

第 1 部　宇久町平方言の文法記述

1. はじめに 1

1.1. 地理 1

1.2. 平方言の系統 2

1.3. 話者数 3

1.4. 先行研究 3

1.5. インフォーマント情報 3

2. 音韻論 5

2.1. 用語と記号について 5

2.2. 音素目録 5

2.2.1. 母音（V） 5

2.2.2. 子音（C） 6

2.2.3. 半母音（G） 7

2.2.4. モーラ音素（M） 7

2.3. 音節構造 8

2.3.1. 基本の音節 8

2.3.2. 音素配列 8

2.3.3. 例外の音節 8

2.3.4. 長母音の単音化 9

2.3.5. 母音連続 9

2.4. モーラ 10

2.5. 音韻規則 12

2.5.1. 連濁 12

2.5.2. 半濁音化 13

2.5.3. 狭母音の脱落 13

2.5.4. 連母音の融合 15

2.5.5. 主題の//=wa//の同化 16

2.5.6. 与格助詞/=ni/の/n/の削除と代償延長 17
2.5.7. 動詞のテ形現象 19
2.6. モーラ音素/H/の解釈 23
2.6.1. 問題の所在 23
2.6.2. 先行研究 23
2.6.3. [ç]がみられる語 25
2.6.4. [ç]がみられない語 27
2.6.5. モーラ音素/H/の設定 27
2.6.6. モーラ音素 H の利点 30
2.6.7. まとめ 32
2.7. アクセント 32
2.7.1. 五島列島方言のアクセントについて 32
2.7.2. 宇久町方言のアクセントについて 34
3. 形態論 36
3.1. 言語形式の単位 36
3.1.1. 語・接語・接辞の区別 36
3.1.2. 形態統語的自立 36
3.1.3. 音韻的自立 37
3.1.4. 品詞 38
3.2. 名詞 40
3.2.1. 普通名詞・固有名詞 40
3.2.2. 代名詞 41
3.2.3. 形式名詞 42
3.3. 動詞 43
3.3.1. 活用形 43
3.3.2. 動詞語幹 43
3.3.3. 活用表 44
3.3.4. 屈折接尾辞 46
3.3.5. 派生接尾辞 53

3.3.6. 複合動詞 60
3.3.7. コピュラ動詞/=zjar-/ 61
3.4. 形容詞 62
3.4.1. 形容詞語幹と活用形 62
3.4.2. 活用表 63
3.4.3. 語幹に接続する屈折接尾辞 64
3.4.4. 動詞派生接尾辞//-r-//に接続する屈折接尾辞 65
3.4.5. 形容動詞 66
3.4.6. 「形容詞連用形＋ニ」による副詞的用法 69
3.5. その他の品詞 73
3.5.1. 助詞 73
3.5.2. 連体詞 76
3.5.3. 接続詞 76
3.5.4. 副詞 77
3.6. 指示詞と疑問詞 78
3.6.1. コソアド体系 78
3.6.2. 指示詞 78
3.6.3. 疑問詞 79
4. 格 82
4.1. 一覧 82
4.2. 主格/=ga/、/=no/ 82
4.3. 属格/=ga/、/=no/ 83
4.4. 対格/=ba/ 84
4.5. 与格/=ni/ 84
4.6. 所格/=de/ 85
4.7. 奪格/=kara/ 86
4.8. 共格/=to/ 88
4.9. 比較格/=jori/ 88
4.10. 限界格/=made/ 88

5. 単文 90
5.1. ヴォイス 90
5.1.1. 受身 90
5.1.2. 可能 94
5.1.3. 自発 96
5.1.4. 尊敬 96
5.1.5. 使役 97
5.2. アスペクト 97
5.2.1. 進行 97
5.2.2. 結果継続 98
5.3. モダリティ 99
5.3.1. モダリティの分類 99
5.3.2. 認識的モダリティ 100
5.3.3. 義務的モダリティ 104
5.3.4. 対人的モダリティ 106
6. 複文 118
6.1. 従属節の分類 118
6.2. 補足節 118
6.2.1. 引用節 118
6.2.2. 疑問節 119
6.3. 名詞修飾節 119
6.4. 副詞節 120
6.4.1. 条件節 120
6.4.2. 時間節 125
6.4.3. 目的節 125
6.4.4. 様態節 125
6.5. 等位節 127

第 2 部　平方言にみられる文法現象

7. 宇久町平方言の「ゴト（如）」の用法 128

7.1. はじめに 128

7.2. 平方言の「ゴト」 128

7.2.1. 「様態」の「ゴト」 128

7.2.2. 「希望」の「ゴト」 130

7.3. 形態と意味の対応 134

7.4. まとめと今後の課題 136

8. 宇久町平方言の可能形式 138

8.1. はじめに 138

8.2. 「可能」の接尾辞 139

8.2.1. 可能の接尾辞の接続 139

8.2.2. 動詞派生接尾辞からの類推 140

8.3. 平方言の可能形式 142

8.3.1. 「可能」の条件スケール 142

8.3.2. 「ヤユル」「ラルル」 143

8.3.3. 条件による形式の区別 147

8.4. 平方言の「キル」 149

8.5. まとめ 151

結語

9. まとめと今後の課題 153

【付録】小値賀町藪路木島方言の/(-a)-Ns-/を用いた行為指示 155

1. はじめに 155

1.1. 藪路木島方言にみられる/(-a)-Ns-/ 155

1.2. 大分県方言にみられる/(-a)-Ns-/ 155

1.3. 問題の所在 156

2. 藪路木島方言について 156

2.1 藪路木島の位置 156

2.2. 調査資料 157

2.3. 藪路木島方言の動詞活用 157

3. /(-a)-Ns-/を使用する環境 158

3.1. 使用する相手 158

3.2. A 場面の人物への命令文でのみの使用 160

3.3. 引用文での使用制限 161

4. /(-a)-Ns-/の用法 162

4.1. 行為指示表現の分類 162

4.2. 「命令的指示」 162

4.3. 「依頼」 163

4.4. 「勧め」と「聞き手利益命令」 164

5. 接辞/(-a)-Ns-/の由来 164

5.1. 近世期にみられる「んす」 164

5.2. 子音語幹活用動詞否定形からの類推 165

6. まとめ 166

参考文献 168

第 1 部　宇久町平方言の文法記述

1.　はじめに

1.1. 地理

本稿で扱う長崎県佐世保市（旧北松浦郡）宇久町は、長崎県五島列島の最北端に位置する島であり、宇久島とその属島となる寺島の二島からなっている。図 1 に宇久町の位置を示す[1]。

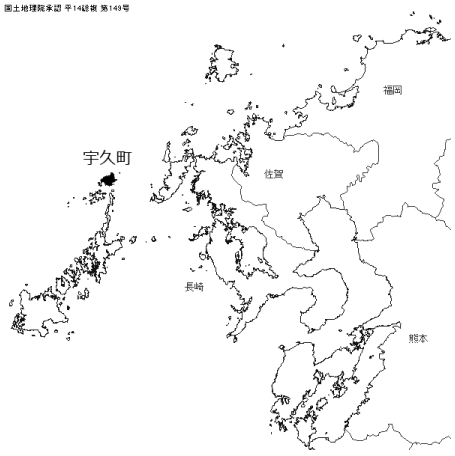


図 1　宇久町の位置

宇久町の面積は本島が 25.0km^2、寺島が 1.4km^2 である。本島の中央には、城ヶ岳（標高 258.6m）がそびえ、四方に緩やかな傾斜をもっている。『宇久町郷土誌』の記述では、宇久町は長崎市からは直線距離 90km、佐世保市から航程 58km 離れたところにある。

『宇久町郷土誌』によると、近世期の宇久町は、福江藩と富江藩の二藩によって治められていたとのことである。明治以降、福江藩の地域は平町、富江藩の地域は神浦村となった。そして、1955（昭和 30）年に両町村合併で宇久町となっている。宇久町は、近隣の小値賀島とともに北松浦郡に属していたが、2006（平成 18）年に佐世保市に編入されている。宇久町は十郷に分かれ、郷内でさらにいくつかの集落に分かれている。以下に、宇久町の十郷を示し、図 2 の宇久町全体図にその位置を示す。



図 2　宇久町全体図

(1)　旧平町：大久保、太田江、木場、平、寺島、野方、本飯良
　　旧神浦村：飯良、小浜、神浦

本稿で扱う平には、平、山本、針木（はりぎ）、堀川（ほりこ）、船倉（ふなぐら）、佐賀里（さがり）、旦の上（だんのえ）[2]など、多くの集落がある。この平は、宇久島の町部にあたる。九州本土からのフェリー・高速船は、この平の港から出入りをしている。本稿では、平の平集落で話されている方言を平方言と呼ぶ。

1.2. 平方言の系統

長崎県の方言区画は、図 3 に示す通り、大きく「南部方言」、「北部方言」、「壱岐対馬方言」の 3 区画に分けられる[3]。

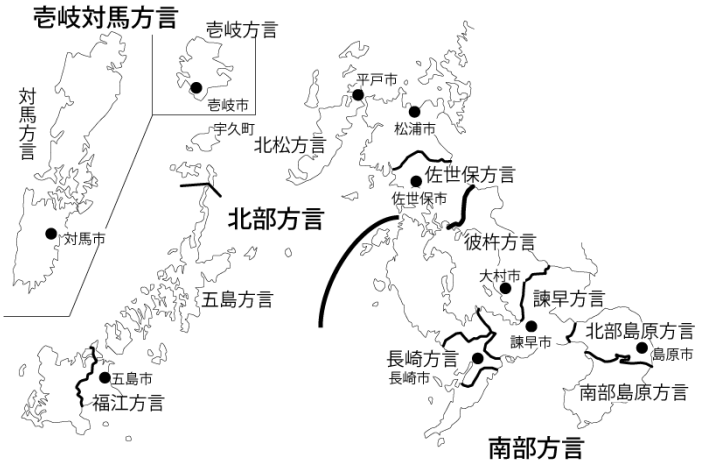


図 3　長崎県方言区画図

この 3 区画の方言は、さらに細かく分けられる。原田(1983a)の分類を参考に、その細かい区画を示す。「南部方言」は、長崎市の中でも長崎港周辺旧市街地の「長崎方言」、大村市や東彼杵郡、西彼杵郡を含む「彼杵方言」、諫早市、北高来郡の「諫早方言」、島原半島を南北に分けて「北部島原方言」と「南部島原方言」があり、5 つの区画に分けられる。

「北部方言」は、平戸市や松浦市、北松浦郡を含む「北松方言」、佐世保市の「佐世保方言」、五島列島の「五島方言」、五島列島の中でも五島市福江の「福江方言」があり、4 つの区画に分けられる。

「壱岐対馬方言」は、「壱岐方言」と「対馬方言」の 2 つの区画に分けられる。

長崎県は近世期、大村藩、平戸藩、島原藩、佐賀藩、五島藩、対馬藩と多くの藩があった。このような細かい区画は、近世期の藩領による影響もあると考えられる。

愛宕(1983)は、この「南部方言」と「北部方言」の語彙的な違いを述べている。例えば、「かまきり」は、南部で「オガミダロー」、北部で「チョーランミャー」ということを述べている。南部でも違いがあり、「かわはぎ」を、彼杵で「ボップ」、島原で「コ（ー）ムキ」といい、北部では「キューロッポ」ということを述べている。

宇久町の平方言は、旧郡域からは北松方言に属することになるが、原田(1983b)で、語彙が五島方言に近いことが述べられている。また、九州西部方言のテ形現象を記述した有元(2007)で、宇久町方言も五島方言と同様に、「書いてきた」が「カッキタ」になるようなテ形現象がみられることが述べられている。これらのことから、平方言は五島方言に系統づけられると考える。

1.3. 話者数

佐世保市のホームページによると[4]、2019 年 10 月現在で人口は 1,136 世帯 1,954 人である。このうち、本論文で扱う平には、677 世帯 1,179 人が住んでいる。年齢別の人口は 2015（平成 27）年度のものが公開されている。その資料によると、2015 年 10 月 1 日時点で、宇久町の人口 2,187 人のうち、70 歳以上の人口が 857 人である。平だけに限ると、人口 1,319 人のうち、70 歳以上の人口が 478 人である。

宇久町の人口は年々減少し、高齢化も進んでいる。島内の若年層は共通語化が進んでいる。宇久町の伝統的な方言話者は、上記の人数よりもさらに少なくなると考えられる。

1.4. 先行研究

宇久町平方言に関する先行研究は、門屋(2009,2015,2017,2018)がある。これらは、平方言の文法現象について考察したものである。また、同じ宇久町の野方方言に関して、中村(2017,2018,2019)がある。中村(2017)は、主格のガとノの主格表示について考察している。中村(2018)は、音節末の無声摩擦音について、音響分析による音韻解釈を行っている。中村(2019)は、野方方言の文法概説である。中村氏の一連の研究は、平方言と共通するところも多く、当該方言の記述文法書にとって、大変参考となるものである。

宇久町方言の語彙集は、宇久町郷土誌編纂委員会編(1967,2003)『宇久町郷土誌』にみられる。また、『日本言語地図』では、宇久町平の佐賀里が調査地点になっている。宇久町方言の談話がわかるものに、広報うく編集委員会(1999)『宇久じまんむかし話』がある。本書は、共通語と当該方言を交えた形で、宇久町の昔話が掲載されている。

宇久町を含む五島列島方言の先行研究は、数多くのものがみられる。包括的な記述を行ったものには、平山・大島(1969)、上村(1970)、古瀬(1983)がある。語彙に関して、原田(1982,1983a,1983b)、森脇(2007,2011,2012)のほか、郡家(1976)に語彙集が収録されている。郡家(1976)には、五島列島方言で書かれた「五島いろはがるた」と題した昔話集が収録されている。音声音韻やアクセントについての考察は、平山(1938)、下村(1968)、上村(1969)、古瀬(1969)がある。有元(2007)は、五島列島方言の動詞テ形をもとに、五島列島方言の音韻について考察している。

1.5. インフォーマント情報

本稿で用いるデータは、2009 年から 2019 年までに臨地調査によって得たものである。

調査に協力いただいた方は、15 名（男性 1 名、女性 14 名）である。そのうちの 6 名を、本稿の主要なインフォーマントとしている。6 名のインフォーマントの居住歴等は、以下の通りである。

(2) 話者 A：1928（昭和 3）年生、女性。0-13 歳のとき平、14-17 歳のとき長崎市、18-86 歳のとき平、87 歳以降は長崎市で生活。

話者 B：1928（昭和 3）年生まれ、女性。生まれてから現在まで平で生活。

話者 C：1930（昭和 5）年生まれ、女性。0-16 歳のとき平、17 歳のとき佐世保市（本土）、18-19 歳のとき長崎県佐世保市（旧北松浦郡）鹿町町、19 歳以降は平で生活。

話者 D：1930（昭和 5）年生まれ、女性。生まれてから現在まで平で生活。

話者 E：1933（昭和 8）年生まれ、女性。0-19 歳のとき平、19-22 歳のとき大分県別府市、23 歳以降は平で生活。

話者 F：1939（昭和 14）年生まれ、女性。0-19 歳のとき平、20-21 歳のとき石川県、21-22 歳のとき愛知県名古屋市、23-25 歳のとき大阪府、26 歳以降は平で生活。

調査は、面接調査を行い、共通語で示した文を方言での言い方に直してもらった。また、上記のインフォーマント同士で話してもらい、自然談話収録も行った。本文で示す用例は、面接調査と談話テキストのどちらからも採用している。

---

[1] 地図は KenMap Ver.9.2（http://www5b.biglobe.ne.jp/~t-kamada/CBuilder/kenmap.htm）を用いて作成したものである。さらに、発表者が作成した地図の宇久町の位置に、黒色を付した。

[2] 堀川，船倉，佐賀里，旦の上の四集落を合わせて，「浜方（四町）」と呼ばれており，古くは漁師の町として漁業が栄えていた。他の郷や集落は農業によって生計を立てており，現在でも続いている。

[3] 図 3 は門屋(2018)において、小西いずみ氏（広島大学大学院）に作成していただいたものである。

[4] http://www.city.sasebo.lg.jp/kikaku/seisak/toukei-jinkou.html（2019 年 10 月 29 日検索）

2. 音韻論

2.1. 用語と記号について

本稿では音韻論、形態論の記述に際し、[ ]を用いて音声レベル、/ /を用いて表層音素レベル、////を用いて基底音素レベルを区別して記す。例えば、//usi//「牛」は、表層では/uH/であり、その発音は[ɯɕ]である。

2.2. 音素目録

2.2.1. 母音（V）

母音音素は、基底音素のレベルでは//a,i,u,e,o//の 5 つである。これらの母音は、口の広狭と舌の前後で以下のように区別される。

(3) 表 1 平方言の母音音素

	前舌	後舌
＋狭	i	u
－狭、－広	e	o
＋広		a

前舌の狭母音/i/と後舌の半狭母音/o/は、それぞれ[i]、[o]と発音する。広母音/a/は、[a]と[ɑ]の間で発音している。これ以降は簡略的に[a]を用いる。後舌の狭母音/u/は、円唇の[u]よりは唇の丸めがなく発音しており、非円唇の[ɯ]を用いて表す。

前舌の半狭母音/e/は、単独での発音の場合、[e]も口蓋化した[ʲe]も、どちらも頻繁に発音されている。この口蓋化した発音は、子音/s,z/と組み合わさった音節でもみられる。/se/、/ze/では、[e] 、[se]、 [ze]のほかに、口蓋化した[je]、[ɕe]、[ʑe]が聞かれる。サ行変格活用動詞の否定形の/seN/'しない'が[seN]や[ɕeN]と発話されたり、/zeN/'銭'が[zeN]や[ʒeN]と発話されたりすることが挙げられる。ただし、これらの音声的な違いは、平方言では弁別的な特徴として認識されていないため、同じ//e//、//se//、//ze//と考える。この[ʲe]は自由異音であると考え、これ以降は[e]を用いて表す。

長母音は、V_1V_1 という短母音の連続と捉える。

(4)　　/suQk**aa**ka/'軽い'、/s**ii**ka/'酸っぱい'、/kem**uu**/'煙'、/n**ee**saN/'姉さん'、
/ot**oo**to/'弟'、/**oo**/'私'、

2.2.2.　子音（C）

子音音素は、調音方法と調音の場所によって区別される。調音方法は、大きく阻害音と共鳴音がある。阻害音には有声と無声の区別があり、共鳴音にはその区別がない。調音の場所は、両唇、歯茎、軟口蓋、声門がある。これらから、以下のように区別される。

(5)　表 2 平方言の子音音素

			両唇	歯茎	軟口蓋	声門
阻害音	破裂音	無声	p	t	k	
		有声	b	d	g	
	摩擦音	無声		s		(h)
		有声		z		
共鳴音	鼻音		m	n		
	はじき音			r		

上記の表のうち/h/は、音節を作る母音によって音声が変わるため括弧で示している。具体的には、/a,e,o/と組み合わさるとき声門摩擦音の[h]、/i/と組み合わさるとき硬口蓋摩擦音[ç]、/u/と組み合わさるとき両唇摩擦音[ɸ]になる。後述するように、当該方言において、これらの音声的な違いは、形態的に同じ音素として扱われている。そのため、/h/を代表させて、これを用いて表す。

それぞれの子音が母音/i/と組み合わさるとき、口蓋化がみられる。特に、歯茎摩擦音/si/、/zi/は、それぞれ無声と有声の歯茎硬口蓋摩擦音[ɕi][ʑi]になる。無声歯茎破裂音/ti/は、無声歯茎摩擦音[t]と無声歯茎硬口蓋摩擦音[ɕ]と組み合わせた[tɕi]になる。

無声歯茎破裂音/t/は母音/u/と組み合わさるとき、音声が変わる。/tu/は、無声歯茎破裂音[t]と無声歯茎摩擦音[s]と組み合わせた[tsɯ]になる。

有声両唇破裂音/b/と有声軟口蓋破裂音/g/は、語中において摩擦音によって発音される。具体的には/b/は有声両唇摩擦音[β]、/g/は有声軟口蓋摩擦音[ɣ]になる。

歯茎はじき音/r/は、[ɾ]と発音する。

2.2.3. 半母音（G）

半母音音素は/j/と/w/の 2 つである。/j/は硬口蓋接近音[j]で表し、/w/は有声両唇軟口蓋接近音[w]で表す。この/j,w/は、母音と組み合わさって、音節を作る。/j/は母音/a,u,o/と組み合わさり、/w/は/a/とのみ組み合わさる。さらに、/j/は、すべての子音音素と組み合わさって拗音を含む音節を作る。/w/は/kw/の組み合わせでのみ、拗音を含む音節を作る。この/j,w/を子音音素と母音音素の渡り音（G）と考え、半母音音素と考える。

2.2.4. モーラ音素（M）

後述するように、子音音素は単独で 1 モーラと数えられることはない。しかし、子音音素で取り上げたもののなかには、単独で 1 モーラと数えられるものがある。それらを、子音音素とは別にモーラ音素と考える。モーラ音素には/Q,N.H/がある。

/Q/は閉鎖音であり、「促音」と呼ぶ。後続の子音があれば、それに同化する。ただし、その子音が鼻音であれば、/Q/は声門閉鎖音[ʔ]になる。後続の子音がなければ声門閉鎖音[ʔ]になる。

(6) 鼻音以外の後続子音があるとき：/kuQbaH/[kɯbbaç]'くちばし'
鼻音の後続子音があるとき：/kuQnawa/[kɯʔnawa]'蛇'
後続子音がないとき：/kuQ/[kɯʔ]'口'

/N/は鼻音であり、「撥音」と呼ぶ。後続の子音があれば、その子音と同じ調音場所の鼻音になる。子音がなければ、口蓋垂鼻音[N]になる。母音や接近音が続くときは、鼻母音になる。

(7) 後続の子音があるとき：/kaNge/[kaŋŋe]'髪'、/teNma/[temma]'船'、
/biNtaN/[bintaN]'頬'
後続の子音がないとき：/kimoN/[kimoN]'着物'
母音や接近音が続くとき：/koNja/[koõja]'今夜'

/H/は、硬口蓋摩擦音[ç]である。平方言では、語中や語尾の//si//、//su//、//zi//、//zu//といった歯茎摩擦音と狭母音からなる音節は、[ç]になる。[aːç]'足'、[waçɾuː]'忘れる'、[onaç]'同じ'、[ʑoç]'上手’などが挙げられる。これは、語頭においては起こらず、また/hi/[çi]とも区別されているため、/H/を別の音素と考え、モーラ音素とする。

2.3. 音節構造

2.3.1. 基本の音節

それ単独で音節（シラブル）を作ることができるのは母音（V）だけである。この母音に同じ母音が続いて長母音（V_1V_1）となるときも、ひとつの音節と考える。この母音の前に来る音素は、子音（C）と半母音（G）である。これは CV、GV、CGV のいずれの組み合わせもみられる。母音の後に来る音素はモーラ音素（M）である。モーラ音素は VM、V_1V_1M のどちらも組み合わせもみられる。

以上をまとめると、平方言で 1 音節をつくる基本構造は以下のものになる。

(8) (C)(G)V_1(V_1)(M)

2.3.2. 音素配列

上記の基本構造をもとに、平方言の語彙を列挙すると、以下の通りである。該当する箇所に下線を引く。語中のピリオド（.）は、音節の境界を表す。

(9) V_1： /**i**.**e**/'家'、/**u**.**e**/'上'、/do.**a**/'ドア'、/**a**.**o**.ka/'青い'

CV_1： /**hi**/'火'、/**zi**/'字'

CGV_1： /kaQ.**sja**.ku/'引っ掻く'

V_1V_1： /**aa**.zja.na.ka.ne/'あるのではないかね'

CV_1V_1： /**sii**/'尻'、

CGV_1V_1： /**hjaa**/'灰'、/**mjaa**.baN/'毎晩'

V_1M： /**uQ**/'売る'、/**iN**/'犬'、/**uH**.ka/'薄い'、/**oQ**.ta/'折った'、/o.**eN**/'泳ぐ'

CV_1M： /**haH**/'橋'、/**miN**/'水'、

CGV_1M： /**zjuN**.baN/'順番'、/ku.**sjaN**/'くしゃみ'

V_1V_1M： /**aaH**/'足'、

CV_1V_1M： /**naaN**.ka/'長い'、

CGV_1V_1M： /**kwaaH**/'菓子'

2.3.3. 例外の音節

平方言のなかには、少数だが基本音節とは異なる音節がみられる。以下のような語である。

(10) a. /NN/'海'、/NN/'お前'

b. /Nmaruru/'生まれる'、/Nmaka/'旨い'

(10a)に示した語は、モーラ音素が 2 つ続いた/MM/という構造と解釈されうるものである。これらは、歴史的に/*umi/'海'、/*unu/'お前'という語であったと考えられる。狭母音の弱化や消失により、両語とも/*uN/が/NN/という音節になったと考えられる。この/NN/という音節に関しては、基本音節の例外となる。

(10b)に示した語は、語頭にモーラ音素が来て、/M.CV/という 2 音節を作っていると解釈できる。これらの語は、歴史的に/*umaruru/'生まれる'、/*umaka/'旨い'という語であり、後続する子音音素/m/によって撥音化したと考えられる。この語頭の/Nm/という音節に関しても、基本音節の例外となる。

2.3.4. 長母音の単音化

平方言では、[nomo:ja]'飲もうよ'が[nomoja]となるように、V_1V_1 という長母音のあとに何かの形式がある場合、1 音節が母音ひとつ分（V_1）に感じるほど短く発話されることがある。

2.3.5. 母音連続

長母音（V_1V_1）ではなく、V_1V_2 という母音音素が連続する場合を以下に示す。

(11) ai： /t**a.i.**ka.ku/'体格'、/k**a.i**/'（助数詞の）回'、/**a.i.**na.ka/'間'、/ku.s**a.i.**ro/'緑'、
/d**a.i.**i.ti/'第一'、

ae： /na.m**a.e**/'名前'、/ko.t**a.e.**ru/'答える'、/ka.k**a.e.**a.guu/'抱え上げる'、
/too.k**a.e.**ta/'取り替えた'

ao： /j**a.o.**ka/'柔らかい'、/**a.o.**ka/'青い'、

ie： /**i.e**/'家'、/o.s**i.e.**ru/'教える'、

io： /s**i.o**/'塩'、/n**i.o.**wu/'匂う'、

ui： /s**u.i.**joo.bi/'水曜日'、/kii.no.t**u.i.**ta/'気が付いた'、/sju.r**u.i**/'種類'、

ue： /tu.k**u.e**/'机'、/h**u.e**/'笛'、/h**u.e.**ta/'増えた'、

ea： /m**e.a.**ge/'眉毛'

ei： /zj**e.i.**ki.N/'税金'、/m**e.i**/'姪'

eo： /s**e.o.**wu/'背負う'

oa： /d**o.a**/'ドア'、

oi： /**o.i**/'甥'、/o.to.t**o.i**/'一昨日'、

oe： /k**o.e**/'声'、/k**o.e.**tjoo/'太っている'、/ni.baN.z**o.e**/'継母'、

長母音（V_1V_1）を 1 音節と捉えるのに対し、母音連続（V_1V_2）は、2 音節と捉えるところに、両者の違いがある。

2.4. モーラ

平方言の音節構造に対して、モーラの計測は以下のように行う。モーラを μ で表す。

(12) (C) (G) V_1 (V_1) (M)

μ μ μ

母音（V）とモーラ音素（M）は、それ単独で 1 モーラとなる。子音（C）と半母音（G）は母音と組み合わさることで 1 モーラとなる。上記のように計測したとき、平方言でのモーラ構造は、/V, CV, GV, CGV, M/である。

以下に、基本音節のモーラの計測の例を挙げる。

(13)	(C)	(G)	V_1	(V_1)	(M)
/i/'胃'（1 モーラ）			i		
/ke/'毛'（1 モーラ）	k		e		
/wa/'輪'（1 モーラ）		w	a		
/kuQ/'口'（2 モーラ）	k		u		Q
/kjaa/'貝'（2 モーラ）	k	j	a	a	
/kwaaH/'菓子'（3 モーラ）	k	w	a	a	H

以下に、平方言のモーラ体系を示す。上段は音韻表記、中段が簡略音声表記、下段が仮名表記である。

(14)　平方言のモーラ体系

/a	i	u	e	o	ja	ju	jo/
[a	i	ɯ	e~je	o	ja	jɯ	jo]
ア	イ	ウ	エ	オ	ヤ	ユ	ヨ
/ka	ki	ku	ke	ko	kja	kju	kjo/
[ka	kʲi	kɯ	ke	ko	kʲa	kʲɯ	kʲo]
カ	キ	ク	ケ	コ	キャ	キュ	キョ
/ga	gi	gu	ge	go	gja	gju	gjo/
[ga	gʲi	gɯ	ge	go	gʲa	gʲu	gʲo]
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギャ	ギュ	ギョ
/sa	si	su	se	so	sja	sju	sjo/
[sa	ɕi	sɯ	se~ɕe	so	ɕa	ɕɯ	ɕo]
サ	シ	ス	セ	ソ	シャ	シュ	ショ
/za	zi	zu	ze	zo	zja	zju	zjo/
[za	ʑi	zɯ	ze~ʑe	zo	ʑa	ʑɯ	ʑo]
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ	ジョ
/ta	ti	tu	te	to	tja	tju	tjo/
[ta	tɕi	tsɯ	te	to	tɕa	tɕɯ	tɕo]
タ	チ	ツ	テ	ト	チャ	チュ	チョ
/da	di	du	de	do/			
[da	(di)	(dɯ)	de	do]			
ダ	ディ	ドゥ	デ	ド			
/na	ni	nu	ne	no	nja	nju	njo/
[na	ɲi	nɯ	ne	no	ɲa	ɲɯ	ɲo]
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニャ	ニュ	ニョ
/ha	hi	hu	he	ho	hja	hju	hyo/
[ha	çi	ɸɯ	he	ho	ça	çɯ	ço]
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒャ	ヒュ	ヒョ
/ba	bi	bu	be	bo	bja	bju	bjo/
[ba	bʲi	bɯ	be	bo	bʲa	bʲɯ	bʲo]

バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビャ	ビュ	ビョ
/pa	pi	pu	pe	po	pja	pju	pjo/
[pa	pʲi	pɯ	pe	po	pʲa	pʲɯ	pʲo]
パ	ピ	プ	ペ	ポ	ピャ	ピュ	ピョ
/ma	mi	mu	me	mo	mja	mju	mjo/
[ma	mʲi	mɯ	me	mo	mʲa	mʲɯ	mʲo]
マ	ミ	ム	メ	モ	ミャ	ミュ	ミョ
/ra	ri	ru	re	ro	rja	rju	rjo/
[ɾa	ɾʲi	ɾɯ	ɾe	ɾo	ɾʲa	ɾʲɯ	ɾʲo]
ラ	リ	ル	レ	ロ	リャ	リュ	リョ
/wa	wo	kwa/		/N	Q	H/	
[wa	(o)	kwa]					
ワ	(オ)	クヮ		ン	ッ	ヒ	

上記の/wo/は、音声は/o/[o]と同様である。したがって、音韻表記では区別するが、仮名表記は「オ」で統一する。

2.5. 音韻規則

2.5.1. 連濁

平方言では複合語を作るとき、日本語共通語と同様に、連濁が起こる。これは、後部要素の語頭音素が子音の無声阻害音であれば、その子音が同じ調音場所の有声阻害音に交替するというものである。ただし、/h/は有声両唇破裂音/b/と交替する。以下に、用例を挙げる。

(15) /k/：/kusuri/'薬'→/g/：/kizu+gusuri/'傷薬'（傷+薬）
/s/：/soe/'添え'→/z/：/niban+zoe/'後妻'（二番+添え）
/t/：/tokoro/'所'→/d/：/tokoro+dokoro/'所々'（所+所）
/h/：/haH/'嘴'→/b/：/kuQ+baH/'嘴'（口+嘴）

連濁には、日本語共通語と同様、ライマンの法則が適用される。後部要素の語中や語尾に有声阻害音がある場合には、連濁を起こさない。

(16) /k/：/kagi/'鉤'→/k/：/iso+kagi/'磯鉤'（磯+鉤）

/s/：/sode/'袖'→/s/：/naga+sode/'長+袖'（長+袖）

/t/：/tubu/'粒'→/t/：/kome+tubu/'米粒'（米+粒）

/h/：/hige/'髭'→/h/：/ago+hige/'顎鬚'（顎+髭）

2.5.2. 半濁音化

複合語を作るとき、後部要素の子音音素の/h/は、無声両唇破裂音/p/にも交替する。これも日本語共通語と同様である。前部要素の音節末が/Q/のとき、/p/と交替する。

(17) /h/：/hadaka/'裸'→/p/：/maQ+padaka/'真っ裸'（真+裸）

/h/：/haru/'張る'→/p/：/hiQ+paru/'引っ張る'（引き+張る）

ただし、平方言では、前述の(15)/kuQbaH/'嘴'のように、前部要素の音節末が/Q/のときに連濁する例もみられる。

2.5.3. 狭母音の脱落

平方言では語中や語尾に狭母音/i,u/があったとき、その母音が脱落することが多い。この脱落は品詞に関係なくみられる。「多い」と述べたのは、調査時に必ずしも起こるわけではないためである。同じ語であっても、脱落がみられるときと、みられないときがあり、その語の異形態であると考えられる。

母音が脱落した際は、その音節の子音の音声的特徴にしたがって、モーラ音素で言い切る。/k, t, w/は促音/Q/になる。

(18) //iki//→/iQ/'息'

//hjaku//→/hjaQ/'百'

//kuti//→/kuQ/'口'

//matigata//→/maQgata/'町方'

//hitotu//→/hitoQ/'ひとつ'

//ituka//→/iQka/'いつか'

//warawu//→/waraQ/'笑う'

/m, n, g, d/は撥音/N/になる[1]。

(19) //namida//→/naNda/'涙'

//tutumu//→/tutuN/'包む'

//gani//→/gaN/'蟹'

//inu//→/iN/'犬'

//komugi//→/komuN/'小麦'

//tamanegi//→/tamaneN/'玉葱'

//maQsuguka//→/maQsuNka/'まっすぐである'

//waradi//→/waraN/'草鞋'

//midu//→/miN/'水'

//hadukasika//→/haNkaHka/'恥ずかしい'

//mudukasika//→/muNkaHka/'難しい'

狭母音に限らず/e,o/のときにも、撥音/N/がみられることがある。

(20) //kimono//→/kimoN/'着物'

//tumetaka//→/tiNtaka/'冷たい'

//kodomo//→/kodoN/'子ども'

/r/でも撥音/N/になるものがみられるが、これは後続の子音/n/に順行同化しているものと考えられる。

(21) //turenamu//→/tuNnamu/'連れ並む'

また、/b/は促音/Q/になるものと撥音/N/になるものがみられる。

(22) 促音/Q/：//jubi//→/juQ/'指'、//kabusuru//→/kaQsuu/'被せる'、//tabo//→/taQ/'たも網'

撥音/N/：//jobu//→/joN/'呼ぶ'、//tobu//→/toN/'飛ぶ'、//abunaka//→/aNnaka/'危ない'

/s,z/は、無声硬口蓋摩擦音/H/になる。この音素は共通語にはみられない音素であるため、詳しい考察は別に行う。ここでは、以下に例を示すのみとする。

(23) //asi//→/aaH/'足'

//usi//→/uH/'牛'

//karasu//→/karaH/'烏'

//tasukuru//→/ta<u>H</u>kuu/'助ける'

//mizikaka//→/mi<u>H</u>kaka /'短い'

//joozu//→/jo<u>H</u>/'上手'

/zi/のなかには、/i/になるものがみられる。

(24) //kreazi//→/kirea<u>i</u>/'切れ味'

/r/は前の母音が長母音となる。

(25) //siri//→/si<u>i</u>/'尻'

//niwatori//→/niwato<u>o</u>/'鶏'

//joru//→/jo<u>o</u>/'夜'

//waruka//→/waaka/'悪い'

長母音となる語に/so<u>o</u>ka<u>a</u>/'それから'もある。これは/*sorekara/という形式が母音の弱化を起こし、/*sorikaru/となり、長母音の/sookaa/となったと考えられる。

/hi, hu/と/ju/で母音が脱落しているといえる語は、調査時にみられなかった。

(26) /hi/：/mjaahi/'毎日'

/hu/：/hihu/'皮膚'

/ju/：/saju/'白湯'、/huju/'冬'

2.5.4. 連母音の融合

連母音（V_1V_2）の V_2 に狭母音//i//がくるとき、融合が起こる。

(27) //ai//→/jaa/：//k**<u>ai</u>**//'貝'→/kj**<u>aa</u>**/

//ui//→/ii/：//s**<u>ui</u>**ka//'西瓜'→/s**<u>ii</u>**ka/

//ei//→/ee/：//saNs**<u>ei</u>**//'賛成'→/saNs**<u>ee</u>**/

//oi//→/ee/://k**<u>oi</u>**//'来い'→/k**<u>ee</u>**/

//ae//という連母音のときも/jaa/となる。これは/e/と/i/が近い音声であることに起因すると考えらえる。

(28) //ae//→/jaa/：//hae//'蠅'→/hjaa/、//sazae//'栄螺'→/s(j)azja/

狭母音//u//が V_2 にきて融合していると確認できる例は、あまりみられない。月川(1997)に、//au//という連母音が融合している例がみられる。

(29) //au//→/oo/：//kazig**au**ra//'梶が浦（地名）'→/kaig**o**ra/（月川(1997:29)）
//ou//→/uu/：//t**ou**//'かさぶた（痘）'→/t**u**/

本来であれば、モーラの数を保つために/oo/や/uu/という長母音であると考えられる。挙げられている例は、長母音が単音化したものだと考えられる。また、//eo//は、/joo/となることから、//eu//も/joo/となることが予想される。

(30) //eo//→ /joo/：//meoto//'夫婦'→/mjooto/

2.5.5. 主題の//=wa//の同化

主題を表す//=wa//が語に接続するとき、その語末の音素が狭母音//i//であれば、[ʲa]となる。

(31) a. //atari//'辺り'+//=wa//→/atarja/ [atarʲa]
b. //hirakuti//'マムシ'+//=wa//→/hirakutja/ [çiɾakɯtɕa]
c. //watasi//'私'+//=wa//→/watasja/ [wataɕa]

基底形では//i//ではなくとも、表層音素のレベルで/ti/（/Q/）と解釈されるものも、同じく[ʲa]となる。

(32) a. //koto//'こと'+//=wa//→/koQ=wa/→//kotja/ [kotɕa]

語末の音素が狭母音//u//であれば、[a]となる。

(33) a. //unu//'お前'+//=wa//→/una/ [ɯna]
b. //hiru//'昼'+//=wa//→/hira/ [çiɾa]

語末の音素がモーラ音素//N//であれば、[na]となる。

(34) a. //kokoraheN//'ここら辺'+//=wa//→/kokoraheNna/ [kokoɾahenna]
b. //hutoN//'布団'+//=wa//→/hutoNna/ [ɸɯtonna]

それ以外の音素であれば、[wa]で接続する。

(35) a. //taroo//'太郎'+//=wa//→/taroowa/ [taɾoːwa]
b. //soko//'そこ'+//=wa//→/sokowa/ [sokowa]
c. //sake//'酒'+//=wa//→/sakewa/ [sakewa]
d. //kasa//'傘'+//=wa//→/kasawa/ [kasawa]

準体助詞//=to//や与格助詞//=ni//が接続するときにも、同化が起こる。

(36) a. //nomu=to//'飲むの'+//=wa//→/noNta/ [nonta]
b. //watasi=ni//'私に'+//=wa//→/watasina/ [watasɛina]

2.5.6. 与格助詞/=ni/の/n/の削除と代償延長

平方言では、与格助詞に日本語共通語と同様に//=ni//を用いる。

(37) a. //uma=ni//：こんウマニ　乗れよ（この馬に乗れよ）
b. //kaatjaN=ni//：お前わ　カーチャンニ　似ちょんねー
（お前は母さんに似ているね）
c. //tuu=ni//：ツーニ　なった（切り傷がかさぶたになった）

この//=ni//が狭母音//i,u//に接続したとき、以下のような語形がみられることがある。

(38) a. //doku=ni//：あんまー　飲ん過ぎれば　ドーキ　なーとたい
（（お酒も）あんまり飲みすぎれば、（体の）毒になるのだ）
b. //siri=ni//：シーリ　泥ん　つーた（尻に泥がついた）

//doku=ni//'毒に'が[doːki]、//siri=ni//'尻に'が[ɕiːri]になっている。このとき音声は、「ドキ」ではなく、「ドーキ」のように名詞を引き延ばして発話される。これは、モーラ数を保つための代償延長であると考えられる。以下に、用例を挙げる。

(39) a. //miti=ni//：ミーチ　じぇんの　落ちちょった（道にお金が落ちている）
b. //waki=ni//：おーが　ワーキ　すわれ（俺の脇に座れ）
c. //tori=ni//：トーリ　えさば　くれれよ（ニワトリに餌をやる）
d. //nomi=ni//：ノーミ　噛まれた（蚤にかまれる）

e. //aku=ni//：肉ば　たっ時わ　アーキ　きーつけなよ（肉を炊く時は、灰汁に気を付けろよ）

f. //kemuri=ni//：ケムーリ　まかれっ　いっもでけんじゃった（煙にまかれて息もできなかった）

g. //mesi=ni//：メーシ　すーか　パンに　すーか　そーば　俺　決めれち　ゆーおーと（飯にするかパンにするか、それを俺が決めろと（みんなが）言っているのだ）

h. //hizi=ni//：ヒージ　当たった（肘に当たった）

i. //miru=ni//：ミーリ　見かねっ（見るに見かねる）

j. //suki=ni//：たー　スーキ　行っちょー（田を鋤きに行っている）

k. //zjoozu=ni//：今日わ　ジョージ　泳ごーじゃかん
（今日は上手に泳いでいるじゃないか）

l. //kwazi=ni//：クヮーヒ　なった（火事になった）

名詞の最終モーラの母音が狭母音で、かつ2モーラの名詞が多いことがわかる。これらの名詞のとき、「みーち」のように引き延ばす。(39l)は、//kwazi//'火事'が狭母音の脱落を起こし、/kwaH/[kwaç]となり/kwahi/と同様の解釈がされたものと考えられる。

3モーラ以上の名詞で引き延ばしがない文もみられる。

(40) a. //keNbutu=ni//：福岡ケンブチ　いっと（福岡見物にいくのだ）

b. //sigoto=ni//：シゴチ　行ってくって（仕事に行ってくるから）

また、名詞の最終モーラの母音が狭母音であっても「ニ」が用いられる文もある。//jari//'槍'は、最終音節末の母音が脱落し、/jaa/という形式になっている。長母音であるため、//=ni//が接続しない。

(41) a. //jari=ni//：ヤーニ　刺さっちょー（（魚が）槍に刺さっている）

b. //tugari=ni//：ツガーニ　たかられちょー（（お菓子が）蟻にたかられている）

c. //buri=ni//：ブーニ すっや（（今夜の刺身は）ブリにしよう）

d. //hai=ni//：ヒャーニ　なったよ（灰になったよ）

そのほか、狭母音であっても//=ni//のままで接続する例を挙げる。

(42) a. //hikari=ni//：ヒカリニ　だいぶん　めーの　慣れた（光に大分目が慣れた）
b. //sirusi=ni//：お礼の　シルシニ　お菓子どん　持っていかなたい（お礼のしるしに、お菓子でももっていかないとな）

2.5.7. 動詞のテ形現象

2.5.7.1. 有元(2007)に示されているデータ

平方言では、動詞語幹に「単純接続」を表す//-te//が接続したとき、この/-te/が脱落する現象がみられる。有元(2007)は、この現象をテ形現象と呼び、五島列島方言をはじめ熊本県、鹿児島県を含めて考察している。有元(2007)では、宇久町の平、飯良、野方の三地域を調査しており、平と飯良は同じタイプ、野方は平とは異なるタイプであることが述べられている[2]。以下に、有元(2007：33-35,79-80)に挙げられた表のなかから、宇久町方言に関わるタイプのところだけを抜粋して示す。平方言、飯良方言はタイプ Ab 方言、野方方言はタイプ Fd 方言に分類されている。

(43) 表 3 有元(2007)に示された宇久町方言のテ形現象のデータ

	タイプ A 方言データ			タイプ F 方言データ		
語幹	ﾀｲﾌﾟ Ab	意味	テ	ﾀｲﾌﾟ Fd	意味	テ
w	kokkita	買ってきた	Q	ko:tekita *kokkita	買ってきた	te
b	oraŋkita	叫んできた	N	asondekita *asoŋkita	遊んできた	de
m	joŋkita	読んできた	N	jondekita *joŋkita	読んできた	de
s	kakkita	貸してきた	Q	okekkita	起こしてきた	Q
k	kakkita	書いてきた	Q	kaitekita *kakkita	書いてきた	te
g	ojoŋkita	泳いできた	N	ojoidekita *ojoŋkita	泳いできた	de

r	tottekita	取ってきた	te	tottekita *tokkita	取ってきた	te
t	kattekita	勝ってきた	te	kattekita *kakkita	勝ってきた	te
n	ʃindemiro	死んでみろ	de	ʃindekuru *ʃiŋkuru	死んでくる	de
i1	mitekita *mikita *mikkita	見てきた	te	mitekita *mikkita	見てきた	te
i2	okitekita *okikkita	起きてきた	te	okittekita *okikkita	起きてきた	te
e1	detekita *dekita dekkita	出てきた	Q	detekita *dekkita	出てきた	te
e2	ukekkita	受けてきた	Q	sutekkita	捨ててきた	Q
/i/~/it/ '行く'	ittekita *itekita *ikita	行ってきた	te	itekita *ikkita	行ってきた	te
/ki/ '来る'	kitemire *kiʔmire	来てみろ	te	kitemi: *kiʔmi:	来てみろ	te
/s/~/se/ 'する'	sekkita *ʃikkita *sekita	してきた	te/ Q	ʃitekoi *ʃikkoi *sekkoi	してこい	te

2.5.7.2. 筆者の調査結果

筆者の調査で得た、平方言の動詞語幹のテ形の形式を、以下に示す。

(44) /-te/が/Q/となるもの

子音語幹動詞

w 語幹： /kuw-te#simota/→/kuQsimota/'食ってしまった'

/waraw-te#simota/→/waroQsimota/'笑ってしまった'

k 語幹： /kak-te#simota/→/k(j)aa-te#simota/→/kaQsimota/'書いてしまった'

/huk-te#simota/→/hui-te#simota/→/huQsimota/'拭いてしまった'

s 語幹： /kosos-te#simota/→/koroQsimota/'殺してしまった'

母音語幹動詞

e2 語幹： /ake-te#simota/→/akeQsimota/'開けてしまった'

/tabe-te#simota/→/tabeQsimota/'食べてしまった'

/kusare-te#simota/→/kusareQsimota/'腐れてしまった'

/Nmare-te#simota/→/NmareQsimota/'生まれてしまった'

(45) /-te/が/N/となるもの

子音語幹動詞

b 語幹： /ajub-te#simota/→/ajuNsimota/'歩いてしまった'

m 語幹[3]： /nom-te#simota/→/noNsimota/'飲んでしまった'

g 語幹： /oeg-te#simota/→/oeNsimota/'泳いでしまった'

/nug-te#simota/→/nuNsimota/'脱いでしまった'

(46) /-te/（/-de/）のままのもの

子音語幹動詞

r 語幹： /hjar-te#simota/→/hjaQtesimota/'入ってしまった'

t 語幹： /mat-te#simota/→/maQtesimota/'待ってしまった'

n 語幹： /sin-te#simota/→/siNdesimota/'死んでしまった'

i1 語幹： /mi-te#simota/→/mitesimota/'見てしまった'

i2 語幹（r 語幹）： /okir-te#simota/→/oki(Q)tesimota/'起きてしまった'

e1 語幹： /ne-te#simota/→/netesimota/'寝てしまった'

動詞/it-/'行く'： /it-te#simota/→/iQtesimota/'行ってしまった'

カ変動詞/ki/語幹： /ki-te#simota/→/kitesimota/'来てしまった'

サ変動詞/si/語幹： /si-te#simota/→/sitesimota/'してしまった'

調査で得た結果は、有元(2007)で示されたデータとほぼ一致する。筆者の調査では、サ変動詞の/*seQsimota/'してしまった'という形式はみられなかった。しかし、/-te/で接続する点は有元(2007)と同様である。

筆者の調査では、母音語幹動詞の/ne-/'寝る'のときは、/*neQsimota/ではなく/netesimota/'寝てしまった'となるところのみ、有元(2007)と異なる結果が出た。ここに違いを見出すならば、筆者の調査した平方言は、有元(2007)のタイプ A 方言のなかでも、Ad 方言に分類される。タイプ Ad 方言は、五島列島の福江島の旧市街地以外、久賀島島、奈留島、若松島などの地域の方言である。ただし、上記の有元(2007)の表中では「デッキタ」'出てきた'と同じ欄に「デテキタ」もみられるため、齟齬はないとも考えられる。

2.5.7.3. テ形現象の音韻規則

有元(2007：48)では、このタイプ A 方言のテ形現象に、以下の音韻規則が適用されていることを述べている[4]。

(47) a. e 消去ルール：
語幹末分節音が非継続的歯音（/r,t,n/）でない動詞語幹に、テ形接辞/te/が続く場合、テ形接辞/te/の/e/を消去せよ。

b. 逆行同化ルール：
形態素末・単語末の子音を、その直後にある子音に、鼻音性以外の点で同化せよ。

c. 単語末子音群簡略化ルール：
単語末で 2 つの子音が連続するとき、単語末の方の子音を消去せよ。

d. 単語末有声子音鼻音化ルール：
単語末の有声音/g, b, m, n/を鼻音化せよ。

e. 有声性順行同化ルール：
語幹末分節音が有声音であるとき、形態素境界を挟んで直後の子音を有声音にせよ。

この規則にしたがって、平方言のテ形現象をみると、以下のようになる。

(48) a. /kuQsimota/'食ってしまった'
/kuw+te#simota/ → e 消去ルール → /kuw+t #simota/ → 単語末子音群簡略化ルール → /kuw+ #simota/ → 逆行同化ルール → /kus+ #simota/ [kɯʃʃimota]

b. /ajuNsimota/'歩いてしまった'

/ajub+te#simota/ → e 消去ルール → /ajub+t #simota/ → 単語末子音群簡略化ルール → /ajub+ #simota/ → 単語末有声音鼻音化ルール → /ajum+ #simota/ → 逆行同化ルール → /ajun+ #simota/ [ajɯnɕimota]

c. /siɴdesimota/'死んでしまった'

/sin+te#simota/ →有声性順行同化ルール → /sin+de#simota/ → 逆行同化ルール（空に適用される） → /sin+de#simota/[ɕindeɕimota]

2.6. モーラ音素/ʜ/の解釈

2.6.1. 問題の所在

平方言では、基底で//si//、//su//にあたるモーラが語中や語末にあるとき、そのモーラが無声硬口蓋摩擦音の[ç]になる現象がみられる。

(49) a. //usi// '牛' [ɯːç]

b. //musuko// '息子' [mɯçko]

//su//が[ç]になっているこの現象は、無声歯茎摩擦音の[s]の後に続く母音[ɯ]が無声化し、さらに口蓋化を起こしたものだと考えられる。[ɕi]の場合も同様に、母音が無声化し、口蓋化を起こしたものだと考えられる。

2.6.2. 先行研究

2.6.2.1. 鹿児島県諸方言

語中や語末の「サ行子音+狭母音」の無声化について、柴田(1959)に考察がある。鹿児島県揖宿郡頴娃町の方言は「鈴」が[su]sɯ̥]、「西」が[ni]ʃi̥]と無声化している。当該方言では「鈴を」が[su]su]、「西に」が[ni]ʃi]となるため、「鈴」を/susu/、「西」を/nisi/と考えたとき、両者の形態的な区別がつかない。そこで、「鈴」を/sus/、「西」を/nis/と解釈し、/Q/や/N/以外に、/s/の閉音節を考えている。

鹿児島県岡児ケ水方言を記述している九州方言学会編(1991)は、柴田(1959)の解釈に従いながらも、当該方言で「石」が[iʃi̥]~[iʃ]、「椅子」が[isɯ̥]~[is]となることを述べ、どちらも/is/になることを問題にしている。音韻表記では/is/でも、具体的な音声が異なるためである。そこで、前者を/ɨ́/、後者を/s/と解釈し、/si/に/ɨ́/という新たな音素を立てている。

前述の通り、平方言では、/si/も/su/もどちらも[ç]となり、[ɕ]と[s]の違いはなくなってい

る[5]。

2.6.2.2. 五島列島方言

五島列島方言では、平山他(1969)、上村(1969)、古瀬(1983)に考察がある。平山他(1969：24-69)では、五島列島の各地の方言で「シ・ス」にあたる形式が、どのような形式になるかを挙げている。それらをまとめて、表にして示す。

(50) 表 4 五島列島方言の「サ行子音＋狭母音」の様相（平山他(1969：24-69)）

地域	音韻表記	用例の一部
福江（上大津郷）	/hi/ [ç̥i]	/'uhi/[uç̥i]'牛'、/muhi/[muç̥i]'虫'、/hahira/[haç̥ira]'柱'
玉之浦（玉之浦）[6]	/hi/ [ç̥i]	/'uhi/[uç̥i]'牛'、/kohi/[koç̥i]'腰'
富江（浜ノ町、小島）	/hi/ [ç̥i]	/mukahi/[mukaç̥i]'昔'、/'ihi/[iç̥i]'石'、/kahi/[kaç̥i]'貸す'
富江（山下）	/s/ [ʃ]	/'us/ [uʃ]'牛'、/kwas/[kwaʃ]'菓子'、/higas/[çigaʃ]'東'
富江（黒瀬）	/h/[x][ç][F]	/kah/[kax]'菓子'、/'ih/[iç]'石'、/'ah/[ax]'足'、/okoh/[okox]'起こす'、/'uh/[uF]'牛'、/'uh/[uF]'臼'
三井楽町（浜ノ畔）	/hi/ [ç̥i]	/'ihi/[iç̥i]'石'、/'ohi/[oç̥i]'押す'、/ki'jahi/[kijaç̥i]'消す'
樺島（本竈郷）[7]	/hi/ [ç̥i]	/'uhi/[uç̥i]'牛'、/kihi/[kiç̥i]'傷'、/mimihi/[mimiç̥i]'蚯蚓'
奈留（夏井）	/hi/ [ç̥i]	/'uhi/[uç̥i]'牛'、/'ihi/[iç̥i]'石'、/'uhi/[uç̥i]'臼'
若松（若松郷）	/hi/ [ç̥i]	/'uhi/[uç̥i]'牛'、/muhiro/[muç̥iro~muiro]'筵'
魚目（榎津）	/hi/ [ç̥i]	/'uhi/[uç̥i]'臼'、/nahi/[naç̥i~nai]'梨'、/ahi/[aç̥i~ai]'足'
上五島（青方）	/hi/ [ç̥i]	/'asamehi/[asameç̥i]'朝食'、/hahira/[haç̥ira]'柱'

上記の表から、この現象が五島列島方言で、広くみられることがわかる。平山他(1969)では、富江島の山下方言や黒瀬方言以外では、/hi/になると述べている。

古瀬(1983：195)も、福江市をはじめとするほとんどの地域の特徴として、/si, su,so/が[çigaçi]'東'、[mɯçiko]'息子'、[açiko]'あそこ'などを挙げ、ハ行子音の[ç]になることを述べている。さらに、無造作に言うときは[çigakkaᴛ]'東から'、[mɯkkoga]'息子が'、[akkokaᴛ]'あそこから'のように促音化することも述べている。平方言では、この促音化はみられない。

2.6.3. [ç]がみられる語

2.6.3.1. 語末

平方言で//si//、//su//が[ç]になる語をみていく。まず、語末にみられる語をみる。//si//、//su//が[ç]の前のモーラがア段である語を挙げる。[ç]の前の母音が長母音になるものもみられる。どちらの回答もある語は長母音を括弧に入れている。

(51) a. //asi//→/aH/：/kwaaH/'菓子'、/kaH/'貸し'、/naaH/'梨'、/daaH/'出汁'、/jaH/'椰子'、/waH/'鷲'、/ha(a)H/'橋、箸、端'、/muka(a)H/'昔'、/hada(a)H/'裸足'、/higaH/'東'、/juwaH/'鰯'、/hizaH/'日差し'、/kuQbaH/'嘴'、/hajaaH/'早足'、/toogaraH/'唐辛子'

b. //asu//→/aH/：/maH/'枡'、/kamaH/カマス'、/hiraH/'ヒラス'、/kara(a)H/'烏'、/garaH/'ガラス'

前のモーラがイ段であるものを挙げる。/isu/が/ih/になる語は、調査時にみられなかった。

(52) //isi//→/iH/：/iH/'石'、/kiH/'岸'、/niH/'西'、/taniH/'田螺'

前のモーラがウ段である語を挙げる。

(53) a. //usi//→/uH/：/u(u)H/'牛'、/ku(u)H/'串'、/muH/'虫'、/kuuH/'櫛'、/suuH/'寿司'、/uruH/'漆'、/kainuH/'飼い主'、/tjawaNmuH/'茶碗蒸し'、/kezuubuH/'削り節'

b. //usu//→/uH/：/uH/'臼'、/kuH/'楠'

前のモーラがエ段である語を挙げる。/esu/が/eh/になる語は、調査時にみられなかった。

(54) //esi//→/eH/：/me(e)H/'飯'、/keH/'芥子'、/deeH/'弟子'

前のモーラがオ段である語を挙げる。/osu/が/oh/になる語は、調査時にみられなかった。

(55) //osi//→/oH/：/koH/'腰'、/hoH/'星'、/ototoH/'一昨年'、/tjoH/'調子'、/nakajoH/'仲良し'、/booH/'帽子'、/rjooH/'漁師'、/hjooH/'表紙'、/toomoroko(o)H/'玉蜀黍'

上記の例から、前の母音に関係なく、[ç]が現れていることがわかる。少数ではあるが、この語末の[ç]は、サ行の有声音/zi/、/zu/でもみられる。

(56) a. //zi//→/H/：/onaH/'同じ'[8]、/kwaH/'火事'

b. //zu//→/H/：/zjoH/'上手'、/boH/'坊主'、/omowaH/'思わず'

2.6.3.2. **語中**

次に、語中で//si//、//su//が[ç]になる語をみる。[ç]の後の子音が、阻害音の語を挙げる。

(57) a. /Hk/： /muHko/'息子'、/taHkuu/'助ける'、 /miHkaka/'短い'

b. /Ht/： /nuHto/'盗人'、/aHta/'明日'、/doHte/'どうして'、/noNnoHta/'軒の下'、

c. /Hg/：/keHgoN/'消しゴム'、/iHguruma/'石車[9]'、

形容詞語幹末が//si//である形容詞に、「非過去」の屈折接尾辞/-ka/が接続するとき、その語幹末の/si/が[ç]になる。

(58) 形容詞語幹/si-ka/→/H-ka/：

/isogaH-ka/'忙しい'、/jakamaH-ka/'喧しい'、/haNkaH-ka/'恥ずかしい'、

/muNkaH-ka/'難しい'、/mugeraH-ka/'かわいい'、/suzuH-ka/'涼しい'、

/omoroH-ka/'面白い'[10]、/tanoH-ka/'楽しい'、/hoH-ka/'欲しい'

[ç]の後の子音が、共鳴音の語を挙げる[11]。

(59) a. /Hm/： /muHme/'娘'、/haHme/'初め'、

b. /Hr/： /waHruu/'忘れる'、/uHro/'後ろ'、

これらのことから、後の子音にも関係なく、[ç]が現れているのがわかる。

オノマトペの ABAB 型で、B の位置に[ç]が現れる語もみられた。しかし、「ますます」のような副詞では、[ç]がみられない。*は、その語が当該方言において非文法的であることを表す。

(60) a. /muHmuH suu/'ムシムシする'、/giHgiH/'ギシギシ'、/geHgeH/'ゲジゲジ（虫）'

b. /*mahmah/'ますます'

2.6.3.3. //so//が[ç]になる語

共通語で語中が//so//の語も、[ç]になる語がみられる。

(61) //so//→/H/：/oHka/'遅い'、/aHko/'あそこ'

しかし、/hosoka/'細い'は/*hoHka/にならないなど、用例は限られている。調査では、この2 語のほかに用例がみられなかった。//so//は、//osorosi-ka//'恐ろしい'が/otoroH-ka/になるなど、歯茎破裂音化する語もみられる。

また、/miso/（味噌）、/heso/（へそ）は/*mih/、/*heh/にならないなど、語末が//so//の語は[ç]になる語がみられない。母音の弱化による/*asuko/という語が、/aHko/'あそこ'と発音されている可能性がある。

2.6.4. [ç]がみられない語

以下に挙げる語は、[ç]になる可能性があるにもかかわらず、[ç]では発話されない。

(62) a. //si//→/si/：/kasi/'歌詞'、/kasi/'樫'、/kaNzasi/'簪'、/haburasi/'歯ブラシ'、
/risi/'利子'、/gesi/'夏至'、/kokesi/'こけし'、/mikosi/'神輿'、
/huNdosi/'褌'、/sasimi/'刺身'、/nisime/'煮しめ'、/osibori/'おしぼり'、
/kagosima/'鹿児島'

b. //su//→/su/：/kasu/'糟'、/uguisu/'鶯'、/isu/'椅子'、/kisu/'鱚'、/risu/'栗鼠'、
/mesu/'雌'

c. //zi//→/zi/：/azi/'鯵'、/mazime/'真面目'、/ukuzima/'宇久島'、

d. //zu//→/zu/：/kazu/'数'、/uzu/'渦'、/kuzu/'屑'、/suzu/'鈴'、/juzu/'柚'、
/mozu/'百舌鳥'、/azuki/'小豆'、/nezumi/'鼠'、

e. //se//→/se/：/ase/'汗'、/kaze/'風'

2.6.5. モーラ音素/H/の設定

2.6.5.1. 中村(2018)の考察

中村(2018)は、この現象について、宇久町の野方方言を考察している。中村(2018)は、野方方言に語末音節に母音のない/us/'牛[12]'という形式があることを述べている。この/us/'牛'が、単独では/us/[ɯɛ]となり、主格の助詞「ノ」に接続するときは/usno/[uçˈnõ]となる。中村(2018)は、野方方言の主格の助詞「ノ」が、接続する音節が CV のとき「ン」になり、特殊モーラのとき「ノ」になることを挙げ、この形式によって/s/と/si, su, hi/の区別が可能であることを述べている。以下に中村(2018：21)に示されている表を示す。

(63) 表 5　無声摩擦音の音韻解釈において問題となる語形（中村(2018:21)）

区分	単独形	主格形
牛	/us/[ɯɕ]	/usno/[uɕ̬ⁱnõ]
鱚	/kisu/[kʲsɯ]	/kisun/[kʲsɯ˜n]
鷲	/wasi/[wɐɕi]	/wasin/[wɐɕĩ]
夕日	/juuhi/[jɯːçi]	/juuhin/[jɯːɕ̬ⁱn]

上記の表から、語末音節に母音のない/us/'牛'は「ノ」が接続し、そのほかの語形では「ン」が接続していることがわかる。なお、この/us/'牛'は、与格の助詞「ニ」に接続するときは/uusi/[ɯːɕi]、主題の助詞「ワ」に接続するときは/uusja/[ɯːɕɐ]となる。

中村(2018)の指摘する主格助詞での区別は、当該方言の音節構造を分析するうえで、有効である。しかし、この分析は表層音素レベルで音節構造がそのようになっていることを示すことにはなるが、基底音素レベルで語末音節に母音がないこと示すものではない。

2.6.5.2. 平方言の基底形

野方方言と同じく、平方言でも助詞//=wa//がついたとき、[ɯç]'牛'は[ɯɕaː]'牛は'のように発話される[13]。

(64) a. //usi//'牛'+//=wa//→/usjaa/ [ɯɕaː]
b. //kusi//'串+//=wa//→/kusjaa/ [kɯɕaː]
c. //usu//'臼'+//=wa//→/usjaa/ [ɯɕaː]

これらの形式は、「語末音素が狭母音//i//であるとき、//=wa//は[ʲa]となる」という前述の音韻規則「主題の//=wa//の同化」に沿うものである。また、平方言では、//usi//'牛'を[ɯç]と発話することもあれば、[ɯɕi]と発話することもあり、両形式は異形態であるといえる。

これらのことから、基底音素レベルでは、//usi//'牛'のように語末に母音音素があるものと解釈しておく。そのうえで、平方言にモーラ音素の/ʜ/を設定する利点を考察する。

2.6.5.3. モーラ音素の連続不可

平方言では、モーラ音素が続けて現れることはないと考えられる。

(65) a. /*NQ/,/*QN/,/*QQ/,/?NN/[14]

b. /*HN/,/*HQ/,/*NH/,/*QH/,/*HH/

「サ行子音+狭母音」でみられる[ç]は、モーラ音素と連続ではみられない。

(66) a. /*HN/ ：/sjasiN/'写真'、/zisiN/'地震'

b. /*HQ/ ：/hasiQko/'端っこ'

c. /*NH/ ：/taNsu/'箪笥'、/kaNsi/'監視'、/kaNzi/'感じ'

d. /*QH/ ：/zaQsi/'雑誌'、/maQsiro/'真っ白'

また、/sisi/という連続で、/si/が[ç]になることもない。

(67) a. /inosisi/→/*inosiH/, /*inoHsi/

b. /sisitoo/→/*siHtoo/

2.6.5.4. モーラ音素/H/の主格助詞/=no/への接続

中村(2018)で示された分析は、平方言の音節構造の分析にも有効である。平方言の主格助詞//=no//は、/no/と/N/という異形態を持っている。平方言の基本音節である CGV_1V_1M という構造を守るため、モーラ音素/H/の後では、/no/で接続する。

(68) a. /haH {no/*N}/'橋が'：はひ｛の／*ん｝でけた（橋ができた）

b. /hoH {no/*N}/'星が'：ほひ｛の／*ん｝いっぴゃ　出ちょーばい
（（宇久島の夜空は）星がいっぱい出ているよ）

c. /kwaH {no/*N}/'火事が'：くぁひ｛の／*ん｝出て　燃やろーばい
（火事が出て燃えているよ）

d. /waH {no/*N}/'鷲が'：わひ｛の／*ん｝飛んぼー（鷲が飛んでいる）

e. /araH {no/*N}/'嵐が'：あらひ｛の／*ん｝とーすぎたごて　戻ったよ
（嵐が通り過ぎたように帰ったよ）

語末にモーラ音素/H/がくるときは、助詞/no/しか用いられない。これは属格助詞//=no//でも同様である。

(69) a. /keH {no/*N}/'芥子の'：けひ｛の／*ん｝花

b. /garaH {no/*N}/'ガラスの'：ガラヒ｛の／*ん｝戸

c. /mukaH {no/*N}'昔の'/：むかひ｛の／*ん｝料理わ　見ためーも　んもなかそーやったねー（昔の料理は見た目も旨くなさそうだったね）

d. /keNkagoH {no/*N}'喧嘩腰の'/：喧嘩ごひ｛の／*ん｝ごて　ゆーた（喧嘩腰のように言った）

e. /nuNnokoH {no/*N}'塗り残しの'/：ペンキば　壁いっぴゃー　ぬんのこひ｛の／*ん｝なかごて　ぬった（ペンキを壁いっぱいに塗り残しのないように塗った）

//tanisi//'田螺'は、(52)に示した通り/taniH/という形式でみられる。しかし、/tanisi/という形式で用いられることもある。/tanisi/のようにモーラ音素/H/が用いられないときは、助詞/N/が接続する。//inosisi//も同様に、助詞/N/が接続する。

(70) a. /tanisi+no/'田螺が'：たにしん　山んごて　おー（田螺が山のようにいる）

b. /inosisi+no/'猪が'：いのししん　いっぴゃ　出て　困っちょーとちた（猪がいっぱい出て困っているんだって）

モーラ音素/H/に助詞/N/が接続しないのに対し、/hi/はその後に/N/を続けることができる。

(71) /mjaahi+no/'毎日の'：みゃーひん　こったい（（そんなのは）毎日のことだ）

これらのことから、「サ行子音+狭母音」でみられる[ç]を、/hi/と別の音素と捉え、モーラ音素/H/であるといえる。

2.6.6. モーラ音素 H の利点

2.6.6.1. 語末狭母音の脱落によるモーラ音素化

平方言では語末の狭母音が脱落することが多い。そのため、語末子音が/r/のとき、その前の母音が長母音になる以外は、語末がモーラ音素になる語が多くなる。

(72) a. //gi, mi, ni, du//→/N/：

//migi//→/miN/'右'、//kami//→/kaN/'紙'、//nani//→/naN/'何'、

//waradi//→/waraN/'草鞋'

b. //ki, ti, bi//→/Q/：

//sonotoki//→/soNtoQ/'その時'、//kuti//→/kuQ/'口'、//gaNkubi//→/gaNkuQ/'首'

これらの語も、主格や属格の助詞//=no//は/no/が接続する。

(73) a. //kemuri=no//'煙が'：けむん｛の／*ん｝おーかね（煙が多いね）

b. //tegami=no//'手紙が'：太郎かー　てがん｛の／*ん｝来た

（太郎から手紙が来た）

c. //doku=no//'毒が'：どっ｛の／*ん｝あー　魚じゃてん　食われん

（毒がある魚だから食べることができない）

d. //toki=no//'時の'：わっかとん｛の／*ん｝こっが　なつかひか

（若い時のことが懐かしい）

「サ行子音＋狭母音」でみられる[ç]は、これらの例と同様のふるまいをするため、モーラ音素と捉えたい。なお、(73d)は、助詞//=no//に/toQ/が逆行同化をして/toN/になっている。

2.6.6.2. 動詞語幹への子音連続の回避

平方言の音節構造は、CGV_1V_1M を基本としている。平方言の子音語幹動詞に子音はじまりの接辞が接続する場合、語幹末の子音がモーラ音素や母音音素になることで、音節構造を守っていると考えられる。

(74) a. /mat-/'待つ'+/-ta/'過去'→/maQta/ CVM.CV

b. /nom-/'飲む'+/-ta/'過去'→/noNda/ CVM.CV

c. /kuw-/'食う'+/-ta/'過去'→/kuuta/ CV_1V_1.CV

このような動詞活用を考えたとき、s 子音の動詞語幹をモーラ音素/H/と捉えることで、子音連続を回避することができる。/kas-/'貸す'を例にして、以下に示す。

(75) a. /kas-/+/-ta/'過去'→/kaHta/[kaçta] CVM.CV

b. /kas-/+/-te/'単純接続'→/kaHte/[kaçte] CVM.CV

c. /kas-/+/-nagara/'同時進行'→/kaHnagara/[kaçnagaɾa] CVM.CV.CV.CV

d. /kas-/+/-tjor-/'結果継続'+/u/'非過去'→/kaHtjoo/[kaçtɕoː] CVM.CGV_1V_1

このように動詞語幹について、統一した説明ができるようになる。

2.6.6.3. 格助詞=ni との区別

平方言の助詞//ni//は、名詞の語末が狭母音のとき、縮約が起こる。//doku=ni//'毒に'が[do:ki]、//siri=ni//'尻に'が[ɕi:ri]になるというものである。

この語末の狭母音の脱落によって、モーラ音素で終わる語は、助詞/ni/がついた語と、形式の上で区別が可能である。

(76) a. //usi//→/uH/ [ɯç] '牛'

b. //usi=ni//→/uusi/ [ɯ:ɕi] '牛に'

平方言では、語末がモーラ音素であることによって、この区別が明確になっていると考えられる。

2.6.7. まとめ

本項では、「サ行子音+狭母音」が語中や語末で無声硬口蓋摩擦音[ç]になることを考察した。この[ç]は、ハ行の/hi/とは異なるものであり、モーラ音素/H/を新たに立てる必要がある。この/H/の基底形は狭母音を伴った//si, su, zi, zu//であり、/si, su, zi, zu/の異形態であると考えられる。

2.7. アクセント

2.7.1. 五島列島方言のアクセントについて

五島列島方言のアクセントの考察は、まず平山（1938）が挙げられる。平山(1938)は宇久町を含む五島列島で、十五ヵ所の町村を調査し、「五島列島のアクセントは以上調査地の範囲に於いては凡て私の一型アクセントと称してゐるものに包括される」(p.1)とまとめている。地域別では、特に玉之浦、三井楽等を中心とする福江島西南部の地方を以下のようにまとめている。

(77) 二音節名詞 ○● ○○▲[15]（▲は助詞、●・▲は○よりも高い音節）

それに対し、福江島及び本山村、富江町、久賀島、奈留島を中心とする大部分の地域について、総じて平板のアクセントであるが、わずかに高い音節があることを指摘し、以下

のようにまとめている。

(78) 二音節語　◎○〔◎○〕　　○◎△〔◎◎△〕

（△は助詞、◎は○・△よりもやや高い音節、〔　〕内は第二音節が独立性に乏しい場合を示す）

そして、「試みに上記の図示による高低の差を二型以上の方言に行はれる高低の差と同様にして発音するならば土着の人は大変耳障りを感じ、全平の発音を以てすれば一般に奇異に感じない有様である」(p.4)ことを述べている。本稿で扱う宇久町方言も、こちらに該当すると述べられている。

同様の調査として、古瀬(1969)は、宇久町を含む五島列島全体で二十五ヵ所を調査している。福江島西南部は単独で○[○となるが、助詞がつくと○○[△となる。その他の地域では、単独で○]○となり、助詞がつくと○[○]△となるが、丁寧な発音では全平になると指摘している。二音節名詞に限っては、平山(1938)と古瀬(1969)は同様の結果が出ているといえる。

しかし、片山(1960)は、五島列島内でも地域によって違いがみられることを指摘している。町として発展している地点では平板化が進み、カトリック・隠れキリシタンの地域では曖昧音調から一型音調に、半農・半漁の地域では尻高一型であると述べている。

また、下村(1968)は富江、奈留、魚目の三ヵ所のアクセントを調査し、多型アクセント＞二型アクセント＞一型アクセントという変化を述べている。富江方言は一型で、単独では○[○となるが、助詞を付けた場合に中心地では○]○△が優勢となり、離れた地域では○○[△となる。奈留方言は二型であり、○[○と○]○があり、それは類別語彙の 1・2 類対 3・4・5 類の対立である。魚目方言は老年層では二型だが、青年層では一型である。老年層では単独で○]○とあらわれ、助詞をつけると 1・2 類は○○[△、3・4・5 類は○]○△となる。青年層では単独で○[○が優勢で、助詞がつくと○[○]△が優勢であると指摘する。

平山他(1969：14)は五島列島方言が、広い地域で話者にアクセント型知覚のない崩壊アクセントであると述べている。その地域は富江、福江、椛島、久賀島、岐宿、若松、新魚目、上五島、有川など五島列島全域を指している。そのなかで、宇久町も崩壊アクセントであると述べられている。五島列島方言のなかでも、玉之浦方言や三井楽丘郷方言の話者はアクセントの型知覚がみられ、統合一型アクセントであることを述べている。

2.7.2. 宇久町方言のアクセントについて

五島列島方言として多くの記述があるのに対し、宇久町方言のアクセントについて細かく記述したものは、ほとんどみられない。平山(1951)においては、五島列島全体を通じて記述し、「この音調には、下五島の中の上記の地方のみでなく、更に上五島の若松村・濱ノ浦村・北魚目村及び北松浦郡に属する宇久島の方言もほぼこれと同じである。（中略）これら諸地方の音調の型はすべて「平板」とすべきものなのである」(p.266)とされ、直接の記述はされていない。また、古瀬(1969)においても、宇久町山本を含めた調査を行っているが、他の調査地点と同様であるという記述で終わっている。

宇久町の野方方言を記述した中村(2018：23-24)は、野方方言を「崩壊型の無アクセント体系をもつ方言」と述べている。その根拠に以下の 4 つを挙げている。

(79) 1. 各回ごとの発話で、句の冒頭で上昇ピッチパターンに一定の傾向は見られるものの、同一の形式におけるピッチの実現の仕方にはばらつきがあること。
2. アクセント類ごとのピッチパターンの一般化ができないこと。
3. ピッチへの自覚の有無を 4 名の話者に尋ねたところ、すべての話者がピッチに無自覚であったこと。
4. 調査者が異なるピッチで同一の形式を発話した際、同音異義語との弁別機能や容認度のちがいが全く生じなかったこと。

平方言においても、アクセントの聞き取り調査を行ったところ、話者によって語のピッチパターンにばらつきがみられ、上記と同様といえる結果であった。したがって、平方言のアクセントも、中村(2018)に従い、崩壊型の無アクセントであると考える。

---

[1] この地域では、この撥音/N/を使ったことば遊びがある。/miN=no # miN=ni # miN=no # hjaQte # miN=no # miN=no # itaka/（右の耳に水が入って、右の耳が痛い）というものである。

[2] 野方方言のテ形現象については、中村(2019)に詳しい考察がある。ただし、中村(2019)は、有元(2007)と異なり、野方方言のテ形現象は平方言と同じタイプであると述べている。

[3] /hum-/'踏む'の場合は、/huɴdesimota/がみられる。

[4] 有元(2007)には、この音韻規則に「i 挿入ルール」も示されている。平方言のタイプ Ab（Ad）方言には無関係であるため、省略している。

[5] 平方言でも、まれに[niɛ]（西）のように発話されることがある。インフォーマントは[niɛi] ~[niɛ]~[niç]と捉えていると考えられる。頻度では[ç] が高いと考えられる。

[6] 玉之浦方言では、/si,zi/が[ç]になっていない/kasi/[kaɛi]'菓子'や/kazi/[kaʒi]'火事'などの用例

も挙げられている。
[7] 平山他(1969：59)には、樺島方言で/ha'i/[hai]'橋,箸'のように/h/が脱落することもあると述べられている。
[8] 九州方言では、「オナジ」が「オナシ」となっている語形もみられる。この語形は//onasi//の可能性もある。
[9] 大きな石の上に乗って、玉乗りをする遊びのこと。
[10] /omoʜroka/という回答もあった。どちらも使用可能であるとのことであった。
[11] 月川(1997)では「対馬」も/tuʜma/になるという記述がある。しかし、調査ではインフォーマントが[ç]にならないと判断したため、用例には挙げていない。
[12] 中村(2018)では/us/に対して、「牛」と「臼」という両方の語が併記されている。本論文では、意味の区別に触れないため、便宜的に「牛」を代表させる。
[13] ただし、/mukaʜ=wa/昔は"を[mɯkaça]と発話する話者もみられた。
[14] 平方言で、//umi//（海）を[uɴ]と言うが、[ɴː]とも言う。このとき、[ɴː]は例外となる。甑島里方言を記述した森他(2015：18-19)では、/ɴɴme/（梅）、/ɴɴdomo/（俺たち）などの例から、/ɴɴ/のみモーラ音素の連続を認めている。
[15] 本稿ではアクセントの高低を表すのに、〇]〇というように、[（上昇）、]（下降）、=（平板）、といった記号を用いる。しかし、(77)では、以下の(78)との対比を明瞭にするため、あえて〇（低）、●（高）を用いている。

3. 形態論

3.1. 言語形式の単位

3.1.1. 語・接語・接辞の区別

平方言を記述するにあたり、言語形式の単位を述べる。言語形式の単位は、下地(2018)を参考にする。下地(2018:53)では、形態統語的に自立しているか従属しているかという点と、音韻的に自立しているか従属しているかという点から、言語単位を 4 つに区別している。以下に、その表を示す。

(80)　　表 6　形態統語的自立性と音韻的自立性

		音韻的に	
		自立	従属
形態統語的に	自立	語	接語
	従属	複合語幹	接辞

語は、形態統語的にも音韻的にも自立した形式である。接辞は形態統語的にも音韻的にも従属した形式である。接語は形態統語的に自立しており、音韻的に従属している形式である。複合語幹は形態統語的に従属しており、音韻的に自立している形式である。

語よりも大きな単位に、句と節を設ける。句とは、2 つ以上の語からできている形式で、その主要部にある品詞をもって、句に名づける。例えば、名詞がその句の主要部であれば、「名詞句」と呼ぶ。節とは、述語をもった形式で、文の終止する位置にあるものを「主節」、その他のものを「従属節」と呼ぶ。

3.1.2. 形態統語的自立

形態統語的自立性の基準に、下地(2018：54-56)で用いられている「内部要素の結束性の有無」を用いる。ABC という形式の連続があったとき、BAC や ACB という入れ替えが可能であれば、ABC は形態統語的に自立していると考える。さらに、ABC の並びは変わらなくとも、そこに独立した語 X を挿入して ABXC という並びが可能であるとき、ABC は、形態論的にひとつとはいえない。

この基準をもとに、平方言の形式をみる。形態素の上部に形態素の順番を示す。本稿で

は、接語には「=」をもちい、接辞には「-」を用いる。

(81) a. 1 2 3 4 5
baa -tjaN =to aNta -doN（祖母ちゃんとあなた）
b. 4 5 3 1 2
aNta -doN =to baa -tjaN（あなたと祖母ちゃん）

1-2 と 4-5 は入れ替えが可能であることから、/baa-tjaN/'祖母ちゃん'、共格助詞の/=to/、/aNta-doN/'あなた'の 3 形式は、それぞれ形態統語的に自立しているといえる。/aNta-doN/の/-doN/は指小辞であり、これをつけずに/aNta/'あなた'でも用いられる。次に、/aNta/に対格助詞/=ba/を付けた形式をみる。

(82) a. 1 2 3 4 5
baa -tjaN =to aNta =ba（祖母ちゃんとあなたを）
b. 4 5 3 1 2
*aNta =ba =to baa -tjaN（*あなたをと祖母ちゃん）
c. 4 3 1 2 5
aNta =to baa -tjaN=ba（あなたと祖母ちゃんを）

(82a,b)をみると、(81)と異なり 1-2 と 4-5 は入れ替えができない。そして、(82c)では 1-2 と 4 が入れ替えができるため、5 の/=ba/も形態統語的に自立しているといえる。したがって、指小辞の/-doN/と対格助詞の/=ba/は、形態統語的自立に違いがあるといえる。指小辞の/-doN/は、形態統語的に従属しているのに対し、対格助詞の/=ba/は自立している。

3.1.3. 音韻的自立

音韻的自立の基準について、下地(2018)では韻律を基準にしている。前述の通り、平方言は崩壊型の無アクセントの方言であり、韻律を基準にすることはできない[1]。そのため、その形式が接続する形式によって、語形変化を起こすかどうかを、音韻的自立の基準とする。

(83) a. 1 2
nom -u（飲む）

b.　1　　2

aku　-ru（開ける）

動詞語幹に接続する 2 は、どちらも「非過去」を表す。この形式が、/nom-/'飲む'に接続するときは/u/、/aku-/'開ける'に接続するときは/ru/に変化する。このとき/nom-u/の/-u/は独立して発音することはできない。前接する形式とまざって発音されることから、音韻的に従属しているとみなす。主題を表す//=wa//も、//watasi=wa//'私は'が/watasja/になるなど、接続する形式によって変化する。

これは//kuti//'口'が/kuQ/となるような、それ自身がモーラ音素になる変化とは異なるものである。/kuQ/'口'は音韻的に自立しており、/-(r)u/や/=wa/は従属している。これらのような形式を音韻的に従属しているとみなし、その形式と同じ統語的特徴をもつものも、これに準じるものとする。

3.1.4.　品詞

3.1.4.1.　分類

形態統語的に自立した語と接語を、その統語的位置や機能によって、品詞に分類する。平方言では、名詞、動詞、形容詞、助詞、連体詞、接続詞、副詞という 7 つの品詞を立てる。動詞と形容詞は屈折接尾辞を接続させ、述語をつくる。この 2 つの品詞を合わせて用言と呼ぶ。

(84)　表 7　平方言の品詞分類

	名詞	動詞	形容詞	助詞	連体詞	接続詞	副詞
単独で語になれる	○	×	×	×	○	○	○
語幹に接辞/-(r)u/がつく	×	○	×	×	×	×	×
語幹に接辞/-ka/がつく	×	×	○	×	×	×	×
連用修飾用法をもつ	×	○	○	○	×	×	○
連体修飾用法をもつ	○	○	○	○	○	×	○
同じ品詞に下接できる	○	○	×	○	×	×	○

上記の分類とは別に、品詞をまたぐ形式として、指示詞と疑問詞を設ける。指示詞は、指示代名詞が名詞に分類され、指示連体詞が連体詞、指示様態副詞が副詞に分類される。

疑問詞も同様である。

3.1.4.2. 名詞

名詞は、それ単独で語になることができる形式である。接辞が接続する場合は、この名詞は語幹となる。連体修飾用法をもつということと、同じ品詞に下接できるということは、名詞では同様のことを指し、複合名詞となることである。名詞には、普通名詞、固有名詞、代名詞（人称代名詞、指示代名詞、疑問代名詞）、形式名詞がある。

3.1.4.3. 動詞

動詞は、語幹に接辞が接続することで語になり、文のなかで述語に用いられる。「非過去」を表すときは、語幹に接辞/-(r)u/が接続する。動詞は連用修飾用法と連体修飾用法をもつ。同じ品詞に下接して、複合動詞を作ることができる。

3.1.4.4. 形容詞

形容詞は、動詞と同様に、語幹に接辞が接続することで語になり、文のなかで述語に用いられる。「非過去」を表すときは、語幹に接辞/-ka/が接続することが、動詞と異なる。形容詞も連用修飾用法と連体修飾用法をもつ。ただし、複合形容詞を作ることはできない。

3.1.4.5. その他の品詞

助詞は、単独で語になることができず、また接辞が接続しない。助詞は、名詞などの主要部となる形式に従属している形式である。主要部となる形式に対し、複数の助詞を接続させることができる。助詞には、格助詞、とりたて助詞、接続助詞、終助詞、準体助詞がある。

連体詞は単独で語になることができる。連体修飾用法が、この品詞の主たるものである。

接続詞も、単独で語になることができる。節と節、文と文をつなぎ、その意味関係を示すことが、この品詞の主たる用法である。

これまでの 6 つの品詞のいずれにも当てはまらないものをまとめて、副詞とする。

3.2. 名詞

3.2.1. 普通名詞・固有名詞

名詞は、それ単独で語になる形式である。

(85) a. abura'油'
b. taneabura'菜種油'
c. tubakiabura'椿油'
d. kikai=no abura'機械の油'

(85b,c)のように、/tane/'種'や/tubaki/'椿'という名詞が接続し、複合名詞を作ることができる。名詞の連続は、(85d)のように、属格助詞/=no/による連体修飾もある。

名詞は語幹となって、接辞を接続させることもできる。接辞には、待遇を表すものと複数を表すものがある。

(86) a. 待遇を表す接辞：
/-sama/：/kaN-sama/'神様'、/tono-sama/'殿様'
/-saN/： /baa-saN/'兄さん'、/nee-saN/'姉さん'、/jome-saN/'嫁さん'、
/-tjaN/： /kaa-tjaN/'母ちゃん'、/baa-tjaN/'祖母ちゃん'
/-doN/： /oQ-doN/'私'、/watasi-doN/'私'、/aNta-doN/'あなた'、/naakaN-doN/'雷'
/-gama/：/bakatare-gama/'馬鹿者'、/turuQpage-gama/'禿'、/doNku-doN-gama/'蛙'
b. 複数を表す接辞：
/-tati/： /aN hito-tati/'あの人たち'、/watasi-tati/'私たち'
/-ra/： /watasi-ra/'私ら'、/ore-ra/'俺ら'

/-sama/、/-saN/、/-tjaN/は、待遇価値が下がるにつれて/-sama/から/-saN/、そして/-tjaN/となっている。/baa-saN/'兄さん'、/nee-saN/'姉さん'は、血縁関係のある人物というより、年上の男性や女性に対する呼び方で用いられる。/taroo-baa/'太郎兄'のように、/baa/を人名に接続させることもできる。/-gama/は、上記に挙げた限られた名詞にくらいしか用いられず、語彙的なものとなっている。

/-doN/は、/aNta/'あなた'などの 2 人称以外に、1 人称の/watasi/'私'にも接続する。自分自身を指す名詞に/-doN/は接続することができる。

(87) a. やけん　私ドンが　どーゆーふーな　現況で　おるかちゅーとを｛中略｝書きおるもんね（だから私がどういうような現況でいるかというのを｛中略｝（ホームヘルパーさんが）書いているものね）

b. 大久保に行って聞けば　おばさんドが　ゆーたごて　ハヨハヨハヨハヨてゆーたい（大久保に行って（方言を）聞けば、おばさん（話者自身）が（真似して）言ったようにハヨハヨハヨハヨって言うよ）

名詞に上接する接辞は、/o-/がみられる。これは日本語共通語と同様である。

(88)　/o-/：/o-tera/'お寺'、/o-maturi/'お祭り'

固有名詞には、人名や地名がある。

(89) 人名：nakamura'中村（姓）'、taroo'太郎（名）'
地名：taira'平'、obama'小浜'、saseho'佐世保'

3.2.2. 代名詞

人称代名詞は、1 人称と 2 人称にみられる。1 人称では、/ore/や/watasi/が用いられる。

(90) a. /ore/：オレに　あっごちゃー　服ば　もけっくれれ
（私に合うような服を見つけてくれ）

b. /watasi/：今日わ　土曜日で　ワタシも　そこに　行く　日じゃもん
（今日は土曜日で私もそこに行く日だもの）

ほかにも 1 人称代名詞には、/waga/がみられる。この形式は、主格や属格の助詞/=ga/を含んだ形式であり、この形式でしか用いられない。

(91) a. あの人　読まえんとに　なんの　ワガ　読まゆーかよ
（あの人が読むことができないのに、なんで私が読むことができるかよ）

b. ワガえんもんの　おらんとき　おきゃっさん　けーば　こまーじゃん
（私の家のものがいないとき、お客さんが来れば困るじゃない）

2 人称では、/unu/、/omae/、/ware/、/aNta/が用いられる。

(92) a. /unu/：ンが　よかごて　せれ（あなたがいいようにしろ）

b. /omae/：おーば　オマエより　手前　させっくれれよ

（私をあなたよりは先にさせてくれよ）

c. /ware/：ワンの　よかごて　せんね（あなたがいいようにしないか）

d. /aNta/：わたし　月曜日じゃけん　アンタと　会わんわけよ

（私は月曜日だからあなたと会わないわけだよ）

3 人称の人称代名詞はなく、3 人称を指すときは人名や役職名が用いられるか、/aN#hito/'あの人'のように連体詞をつけた名詞が用いられる。

指示代名詞、疑問代名詞については本項で扱わず、指示詞と疑問詞の項で述べる。

3.2.3. 形式名詞

名詞のなかで、それ単独で文に用いられず、連体修飾をする従属部のある名詞節でなければ文に用いられない名詞を、形式名詞と呼ぶ。形式名詞には/mono/'もの'、/koto/'こと'、/toki/'とき'、/toko/'ところ'などが挙げられる。

(93) a. /mono/：　よかモンばっかー　食わすっけん　太っちょ―と

（いいものばかり　食べさせるから　太っている）

b. /koto/：色々　考ゆーコッの　あって　不安で　苦しんじょー

（色々考えることがあって不安で苦しんでいる）

c. /toki/：とーちゃんたちんトキャ　行こごっなか　人わ　行かん

（父ちゃんたちのときは行きたくない人は行かない）

d. /toko/：わからんトコ　あーごちゃーですね

（わからないところがあるみたいですね）

このうち、/mono/'もの'は、文末に用いられて、モダリティ形式になっている。

(94) a. 学校わ　わがえん　目の前じゃモン（学校は私の家の目の前だもの）

b. おら　英語わ　ゆわえんモン（私は英語を言うことができないもの）

3.3. 動詞

3.3.1. 活用形

動詞は、語幹に屈折接尾辞が接続することで語になる。派生接尾辞は、動詞の語幹を拡張する接辞である。

(95) 動詞語幹-派生接尾辞-屈折接尾辞

動詞語幹に屈折接尾辞が接続した形式を、その屈折接尾辞の活用形と呼ぶ。例えば/kak-/'書く'という語幹に「非過去」の接辞/-(r)u/が接続した/kak-u/を「非過去形」と呼ぶ。派生接尾辞である「可能」の/-aje-/が接続し、「非過去」の/-(r)u/が接続した/kak-aju-ru/を「可能非過去形」と呼ぶ。

これらの活用形は、大きく 3 つの類に分けられる。

(96) 終止類：文を終止する類。
終止連体類：文を終止することも連体節を作ることもする類。
連用類：副詞節を作る類。

3.3.2. 動詞語幹

平方言の動詞は、大きく子音語幹活用動詞（以下、子音語幹動詞）と母音語幹活用動詞（母音語幹動詞）に分かれ、その他、カ行変格活用（以下、カ変動詞）、サ行変格活用（以下、サ変動詞）の変格活用動詞がある。以下に、それぞれの動詞の一例を挙げる。

(97) 子音語幹動詞：kak-'書く'、nug-'脱ぐ'、kas-'貸す'、mat-'待つ'、sin-'死ぬ'、
orab-'叫ぶ'、nom-'飲む'、hjar-'入る'、kuw-'食う'、okir-'起きる'
母音語幹動詞：ak{e/u}-'開ける'
カ変動詞：k{o/i/u}-'来る'
サ変動詞：s{e/i/u/ɸ}-'する'

子音語幹動詞の語幹末子音には、k（カ行）、g（ガ行）、s（サ行）、t（タ行）、n（ナ行）、b（バ行）、m（マ行）、r（ラ行）、w（ワ行）がある。

子音語幹動詞のなかには、「r 語幹化」した動詞も含む。共通語の上一段動詞は母音語幹動詞であるが、平方言ではかなりの活用形で「r 語幹化」している。/mir-/'見る'を例にする

と、子音語幹動詞のなかの r 語幹動詞に対応した形は、否定形/mir-a-N/、仮想形/mir-oo/、使役形/mir-a-suru/、否定仮定形/mir-a-neba/など、多くの活用形にみられる。ただし/mir-/'見る'の過去形は/mi-ta/である。/okir-/'起きる'には、過去形/oki-ta/のほかに/okiQ-ta/も用いられている。これはr語幹動詞の音便形に対応する形である。平方言では//hjar-ta//'入った'が/hjaQ-ta/となる。本論文では、共通語の上一段動詞は、r 語幹化した子音語幹動詞ととらえて考察を行う。

子音語幹動詞は、「過去」の//-ta//、「結果継続」の//-tjor-//など、t 音の接尾辞に異形態で接続する。この異形態を音便形と呼ぶ。語幹末子音が k と g の動詞語幹は、//kak-ta//'書いた'は/*kai-ta/が/k(j)aa-ta/となり、//ojog-ta//'泳いだ'は/*ojoi-da/が/oe-da/となる。語幹末子音が s の動詞語幹は、//kas-ta//'貸した'が/kaH-ta/となる。語幹末子音が t と r の動詞語幹は、//kat-ta//'勝った'が/kaQ-ta/となり、//odor-ta//'踊った'が/odoQ-ta/となる。語幹末子音が n と m の動詞語幹は、//sin-ta//'死んだ'が/siN-da/となり、//nom-ta//'飲んだ'が/noN-da/となる。語幹末子音が b と w の動詞語幹は、//asob-ta//は/*asou-da/が/aso-da/となり、//waraw-ta//は/*warau-ta/が/waro-ta/となる。

母音語幹動詞、カ変動詞、サ変動詞は、あとに続く接尾辞によって、母音が交替する。母音語幹動詞は、e と u の語幹をもつ。/ak{e/u}-/'開ける'を例にすると、非過去形/aku-ru/、過去形/ake-ta/となる。

カ変動詞は、/ku-ru/'来る'である。ko、ki、ku という 3 つの語幹をもつ。3 つの語幹は、否定形/ko-N/、過去形/ki-ta/、非過去形/ku-ru/にみられる。また、命令形は/*ko-i/が/kee/になっており、仮定形は/*ku-reba/が/keeba/になっている。

サ変動詞は、/su-ru/'する'である。se、si、su、s という 4 つの語幹をもつ。4 つの語幹は、否定形/se-N/、過去形/si-ta/、非過去形/su-ru/、可能非過去形/s-aju-ru/にみられる。

3.3.3. 活用表

以下に、それぞれの類ごとに活用表を示す。まず終止類と終止連体類の屈折接尾辞の活用表を示す。そして、連用類の屈折接尾辞の活用表を挙げ、最後に派生接尾辞の活用表を示す。表の子音語幹動詞は/kak-/'書く'、母音語幹動詞は/ak{e/u}-/'開ける'を代表させる。

(98) 表 8 終止類と終止連体類の屈折接尾辞

		命令	禁止	仮想	非過去	過去	否定
	語幹	-(r)e	-(r)una	-oo	-(r)u	-ta	(-a)-N
子	kak-'書'	kak-e	kaQ-na	kak-oo	kak-u	k(j)aa-ta	kak-a-N
母	ake-'開'	ake-re		akuu		ake-ta	ake-N
	aku-		aku-Nna		aku-ru		
カ変	ko-'来'	kee		kuu			ko-N
	ki-					ki-ta	
	ku-		ku-Nna		ku-ru		
サ変	se-'為'	se-re		suu			se-N
	si-					si-ta	
	su-		su-Nna		su-ru		
	s-						

(99) 表 9 連用類の屈折接尾辞

		単純接続	否定接続	同時進行	未完了条件	完了条件	逆接仮定	当為
	語幹	-te	(-a)-Nzi	-nagara	-(r)eba	-tara	-temo	(-a)-neba
子	kak-'書'	k(j)aa-te	kak-a-Nzi	kaQ-nagara	ka-eba	k(j)aa-tara	k(j)aa-temo	kak-a-neba
母	ake-'開'	ake-te	ake-Nzi	ake-nagara	ake-reba	ake-tara	ake-temo	ake-neba
	aku-							
カ変	ko-'来'		ko-Nzi					ko-neba
	ki-	ki-te		ki-nagara		ki-tara	ki-temo	
	ku-				ku-reba			
サ変	se-'為'		se-Nzi					se-neba
	si-	si-te		si-nagara		si-tara	si-temo	
	su-				su-reba			
	s-							

(100) 表 10　派生接尾辞

		使役	受身他	可能	可能	進行	結果継続	先行	丁寧
	語幹	-(s)ase-	-(r)are-	-(j)aje-	-(i)kir-	-wor-	-tjor-	-tjok-	-(i)mas-
子	kak-'書'	kak-ase-	kak-are-	kak-aje-	kak-ikir-	kaQ-wor-	k(j)aa-tjor-	k(j)aa-tjok-	kak-imas-
母	ake-'開'	ake-sase-	ake-rare-	ake-jaje-	ake-kir-	ake-wor-	ake-tjor-	ake-tjok-	ake-mas-
	aku-								
カ変	ko-'来'	ko-sase-	ko-rare-						
	ki-			ki-jaje-	ki-kir-	ki-wor-	ki-tjor-	ki-tjok-	ki-mas-
	ku-								
サ変	se-'為'								
	si-				si-kir-	si-wor-	si-tjor-	si-tjok-	si-mas-
	su-								
	s-	s-ase-	s-are-	s-aje-					

3.3.4.　屈折接尾辞

屈折接尾辞には、以下のものがある。

(101) 平方言の屈折接尾辞

終止類：/-e/'命令'、/-(r)una/'禁止'、/-oo/'仮想'

終止連体類：/-(r)u/'非過去'、/-ta/'過去'、/(-a)-N'否定'

連用類：/-te/'単純接続'、/(-a)-Nzi/'否定接続'、/-nagara/'同時進行'、
/-(r)eba/'未完了条件'、/-tara/'完了条件'、/-temo/'逆接仮定'、
/(-a)-neba/'当為'

それぞれの接辞は、平方言の音節構造にしたがい、形式を変化させる。「非過去」の/-(r)u/は、子音語幹動詞/kak-/'書く'が接続するとき/-u/となり、母音語幹動詞/ake-/'開ける'が接続するとき/-ru/となる。

3.3.4.1. 命令/-(r)e/

子音語幹動詞に/-e/が接続し、母音語幹動詞 e とサ変動詞 se に/-re/が接続する。カ変動詞は/*ko-i/が/kee/になった形式が用いられる。命令形に付く終助詞に/=jo/などがある。

(102) a. /or-e/'いろ'：うな　こけ　オレよ（お前はここにいろ）

b. /kee/'来い'：ケーよ（来いよ）

c. /se-re/'しろ'：はよ　セレ（早くしろ）

3.3.4.2. 禁止/-(r)una/

子音語幹動詞は/-una/が接続し、語幹の最終音節末が脱落した形式で用いられる。各語幹末子音での例を挙げる。/kak-/'書く'は/kaQna/、/nug-/'脱ぐ'は/nuNna/、/hanas-/'放す'は/hanaHna/、/mat-/'待つ'は/maQna/、/sin-/'死ぬ'は/siNna/、/orab-/'叫ぶ'は/oraQna/、/nom-/'飲む'は/noNna/、/odor-/'踊る'は/odoNna/、/waraw-/'笑う'は/waraQna/となる。/ajub-/'歩く'は b 語幹だが、禁止形は/ajuNna/になり、/kuw-/'食う'は w 語幹だが、禁止形は/kuuna/になるなど、例外の動詞もある。

その他の動詞は、母音語幹動詞 e、カ変動詞 ku、サ変動詞 su に/-runa/が接続する。禁止形にも終助詞/=jo/が接続する。

(103) a. /mir-na/'見るな'：何にも　ならんもんば　ミンナよ
（何にもならないものを見るなよ）

b. /ku-runa/'来るな'：あひたわ　クンナよね（明日は来るなよな）

c. /su-runa/'するな'：ばーかな　こっば　スンナよ（馬鹿なことをするなよ）

3.3.4.3. 仮想/-oo/

本論文では仮想を表す接尾辞/-oo/がついた形式を、「仮想形」と呼ぶ。この形式は日本語共通語において「意志形」とされている。共通語では/-oo/を専ら「意志」の意味で使用し、「推量」は「あろうはずがない」「降ろうとしている」などの無意志動詞に接続して、ある程度固定化した表現で使用するためである。文語的な表現では、2 人称または 3 人称が主語のとき、「｛おまえが／太郎が｝この酒を飲もう」という、意志動詞に/-oo/が付いた「推量」も用いられる。ただ「俺が飲もう」という、1 人称が主語のときは「意志」の意味で用いられている。しかし、平方言では/nomoo/'飲もう'が 1 人称で用いられたときでも、「意志」（「飲もう」）と「推量」（「飲むだろう」）の、どちらの意味にも取ることが

できる。文脈によって「意志」か「推量」かの意味を分けている形式である。

このことは平方言に限らず、九州地方全体で同様の使用がみられる。『方言文法全国地図』第 112 図「書くだろう（推量形）」には、福岡県南部、長崎県、熊本県北部、鹿児島県に「カコー」の形式がある[2]。

仮想形は、子音語幹動詞に/-oo/で接続する。末尾の長母音は短母音がすることも多い。

(104) a. /or-oo/'いよう'：一緒に　オロで（一緒にいよう）
b. /okir-oo/'起きよう'：明日わ　六時に　オキロー（明日は 6 時に起きよう）

母音語幹動詞、カ変動詞、サ変動詞は、/akuu/'開けよう'、/kuu/'来よう'、/suu/'しよう'のようにウ段長音になる。前述のように短音化することも多いが、仮想形が 1 音節の場合は短音化しにくい。/kuu/'来よう'は、歴史的にはカ変動詞の語幹 ko に/*-u/（/*-mu/）が付いて縮約した形式であると捉えられる。母音語幹動詞/akuu/'開けよう'は語幹の e に/*-u/（/*-mu/）が付いて縮約した/*akjuu/のような形式が、直音化したと捉えられる。同様に、/suu/'しよう'は語幹の se に/*-u/（/*-mu/）が付いて縮約した/*sjuu/のような形式が、直音化したと捉えられる。

仮想形に接続する終助詞に/=tai/、/=ka=ne/、/=de/などがある。/=tai/は仮想形に接続するとき、/=dai/と濁音化する。

(105) a. /kuu/'来よう'：また　こけ　クーだい（またここに来よう）
b. /suu/'しよう'：しごっば　スーかねー（仕事をしようかな）
c. /kakoo/'書こう'：太郎が　カコだい（太郎が書くだろう）
d. /mir-oo/'見るだろう'：花子も　ミロだい（花子も見るだろう）
e. /akuu/'開けるだろう'：太郎が　ぬっかれば　アクだい
（太郎が、暑ければ開けるだろう）

3.3.4.4. 非過去/-(r)u/

子音語幹動詞は/-u/が接続し、母音語幹動詞の e、カ変動詞の ku、サ変動詞の su に/-ru/が接続する。非過去形に接続する終助詞に/=jo/、/=zo/、/=ne/などがある。終助詞/=jo/に長母音が接続したとき、その長母音が/i/になることがある。

(106) a. /or-u/'いる'：太郎が　なかに　オイよ（太郎が中にいるよ）

b. /kak-u/'書く'：筆で　じーば　カッ　もんも　おろー
（筆で字を書く者もいるだろう。）

c. /okir-u/'起きる'：みゃーひ　六時　オキー（毎日 6 時に起きる）

d. /aku-ru/'開ける'：窓ば　アクー（窓を開ける）

e. /su-ru/'する'：今かー　しごっば　スッ（今から仕事をする）

f. /ku-ru/'来る'：花子が　クー　日ば　教えんね（花子が来る日を教えないか）

3.3.4.5. 過去/-ta/

子音語幹動詞は音便形に/-ta/が接続する。母音語幹動詞の e、カ変動詞の ki、サ変動詞の si に/-ta/が接続する。

(107) a. /kjaa-ta/'書いた'：てがんば　キャータ（手紙を書いた）

b. /tuko-da/'掴んだ'：二度と　離さんごて　ツコダ
（二度と離さないように掴んだ）

c. /ki-ta/'来た'：他の　人が　また　キタよ（他の人がまた来たよ）

d. /si-ta/'した'：きーたごちゃー　感じ　シタぞ（聞いたような感じがしたぞ）

e. /oki(r)-ta/'起きた'：はよ　オキタ　もんが　朝めひの　用意ば　した
（早く起きた者が朝食の用意をした）

3.3.4.6. 否定/(-a)-N/

子音語幹動詞に/(-a)-N/が接続する。母音語幹動詞の e、カ変動詞の ko、サ変動詞の se に/-N/が接続する。

(108) a. /okir-a-N/'起きない'：花子わ　まだ　オキラン（花子はまだ起きない）

b. /ko-N/'来ない'：二度と　コンごて　ゆーたよ
（二度と来ないように言ったよ）

c. /se-N/'しない'：静かに　センか（静かにしないか）

3.3.4.7. 単純接続/-te/

子音語幹動詞は音便形に、母音語幹動詞は e に、カ変動詞は ki、サ変動詞は si に/-te/を接続する。

(109) a. /siN-de/'死んで'：金魚が　シンデ　かなひかった

（金魚が死んで悲しかった）

b. /ki-te/'来て'：花子が　はよ　キテ　そん　次　太郎が　きたっよ

（花子が早く来て、その次、太郎が来たんだよ。）

/miru/'見る'は/mi-te/'見て'になり、/okiru/'起きる'は/okiQ-te/になる。母音語幹で接続するときと、r 語幹化した形（r 語幹の音便形に対応する形）で接続するときがみられる。

前述の通り、平方言では「テ形現象」がみられるため、/-te/が脱落することがある。

3.3.4.8. 否定接続/(-a)-Nzi/

否定形と同様に、子音語幹動詞に/(-a)-Nzi/が接続する。母音語幹動詞の e、カ変動詞の ko、サ変動詞の se に/-Nzi/が接続する。

(110) a. /iw-a-Nzi/'言わないで'：くちとわ　イワンジ　くっちゅーと

（（平方言では「口」を）「クチ」とは言わないで「クッ」と言うのだ）

b. /mir-a-Nzi/'見ないで'：テレビも　ミランジ　しごっしよー

（テレビも見ないで仕事をしている）

c. /ojog-aje-Nzi/'泳げなくて'：およんとわ　オヨガエンジ

（泳ぐのは泳げなくて）

3.3.4.9. 同時進行/-nagara/

子音語幹動詞は音便形とは異なる形式で、/-nagara/に接続する。語幹末子音が k、t の動詞語幹は//kak-nagara//'書きながら'が/kaQ-nagara/になり、//mat-nagara//'待ちながら'が/maQ-nagara/になる。語幹末子音が g、n、m、r の動詞語幹は、//nug-nagara//'脱ぎながら'が/nuN-nagara/になり、//sin-nagara//'死にながら'が/siN-nagara/、//nom-nagara//'飲みながら'が/noN-nagara/、//hjar-nagara//'入りながら'が/hjaN-nagara/になる。語幹末子音が b の動詞語幹は、促音化する動詞と撥音化する動詞がみられる。例を挙げると、//asob-nagara//'遊びながら'が/asoQ-nagara/になり、//ajub-nagara//'歩きながら'が/ajuN-nagara/になる。語幹末子音が s の動詞語幹は、//hanas-nagara//'放しながら'が/hanaH-nagara/になる。語幹末子音が w の動詞語幹は、動詞により異なるふるまいをする。//waraw-nagara//'笑いながら'は/waraQ-nagara/と促音化し、//kuw-nagara//'食いながら'は/kuu-nagara/と長音化する。//ikaw-nagara//'休みながら'や

//kaw-nagara//'買いながら'は、/ikai-nagara/や/kai-nagara/という形式になる。

r 語幹化した母音語幹動詞である/mir-/'見る'や/okir-/'起きる'は、/mii-nagara/'見ながら'や/oki-nagara/'起きながら'という形式になる。

母音語幹動詞は e、カ変動詞は ki、サ変動詞は si に接続し、/ne-nagara/'寝ながら'や/ake-nagara/'開けながら'、/ki-nagara/'来ながら'、/si(i)-nagara/'しながら'となる。

(111) /omoi-nagara/'思いながら'：なんか　ゆーはひじゃばってんなーち　オモイナガラ
なんべんも　見ちゃみー　見ちゃみーして（何か言うはずだけれどなあと思いながら、何回も見ては見、見ては見して）

3.3.4.10. 未完了条件/-(r)eba/

子音語幹動詞に/-eba/で接続し、母音語幹動詞の e、サ変動詞の su に/-reba/で接続する。カ変動詞は/keeba/'来れば'が用いられる。

(112) a. /kak-eba/'書けば'：今かー　カケバ　間に合おだい
（今から書けば間に合うだろう）

b. /tor-eba/'取れば'：歳　トレバ　伸ばんとばい
（歳を取れば（髪は）伸びないのよ）

b. /mir-eba/'見れば'：こん番組ば　ミレバ　思ったこっも　かわーかもわからん
（この番組を見れば、思ったことも変わるかもしれない）

c. /keeba/'来れば'：花子が　ケーバ　みんな　よろこっじゃろー
（花子が来れば、みんな喜ぶだろう）

3.3.4.11. 完了条件/-tara/

子音語幹動詞は音便形に接続し、母音語幹動詞の e、カ変動詞の ki、サ変動詞の si に接続する。

(113) a. /noQ-tara/'乗ったら'：もー 飛行機なんか　ノッタラ　馬鹿んごちゃったねー
（もう飛行機になんか乗ったら馬鹿みたい（な速さ）だった。）

b. /otoH-tara/'落としたら'：
コップば　オトヒタラ　跡形も　残らんごて　粉々に　砕けた

（コップを落としたら、跡形も残らないように粉々に砕けた）

/miru/'見る'は/mi-tara/になり、/okiru/'起きる'は/okiQ-tara/になる。母音語幹で接続するときと、r 語幹化した形（r 語幹の音便形に対応する形）で接続するときがみられる。

3.3.4.12. 逆接仮定/-temo/

子音語幹動詞は音便形に接続し、母音語幹動詞の e、カ変動詞の ki、サ変動詞の si に接続する。多くの場合、接辞末の/mo/は、母音が脱落し/N/になる。

(114) a. /arui-temo/'歩いても'：こん　川わ　アルイテモ　渡られいごて　浅か
（この川は歩いても渡ることができるくらい浅い）

b. /kiQ-teN/'切っても'：おーと　わら　キッテン　切れん　いぇんたいねー
（私とあなたは切っても切れない縁だね）

c. /kik-are-teN/'聞かれても'：なんば　キカレテン　いわゆーごて　調べたよ
（何を聞かれても言うことができるように調べたよ）

d. /mi-teN/'見ても'：こん　料理わ　どがん　ミテン　んもなか　ごちゃー
（この料理はどう見ても旨くなさそうだ）

3.3.4.13. 当為/(-a)-neba/

子音語幹動詞に/(-a)-N/が接続する。母音語幹動詞の e、カ変動詞の ko、サ変動詞の se に/-N/が接続する。

(115) a. /mir-a-neba/'見なければ'：外ば　ミラネバ　雨ん　ふーろーとも　しらんと
（外を見なければ、雨が降っているとも知らないのだ）

b. /se-neba/'しなければ'：セネバ　じゃもん（しなければだもの）

/(-a)-neba/は、「動詞語幹＋ネバ」ではなく、「否定形＋ネバ」の形式もみられる。

(116) a. /ik-a-Nneba/'行かなければ'：イカンネバ　風呂も　ひゃらえん
（（老人ホームに）行かないと風呂も入れない）

b. /hik-are-Nneba/'引かれなければ'：
手ば　ヒカレンネバ　あゆばえん　ひとばっか

（手を引かれなければ、歩けない人ばっかり。）

c. /tuu-tjor-a-Nneba/'ついていなければ'：

あの　まんま　気の　ツーチョランネバ　私　この世に　おらんとよ

（あのまま気がついていなければ、私はこの世にいないのよ）

また、/(-a)-Nba/という形式も用いられる。

(117) /mir-a-Nba/'見なければ'：

やっぱ　ちょっと　話ば　して　こー　様子ば　ミランバ　あの　人たちも　お風呂だけ　入らせっ　ぱっちな　帰られんけんね

（やっぱりちょっと話をして、こう（私の）様子を見ないと、あの人（ヘルパー）たちもお風呂だけ入らせてパッとは帰れないからね）

当為表現には、/(-a)-na/も用いられる。

(118) a. /moraw-a-na/'もらわないと'：そこでも　して　モラワナ

（そこでもしてもらわないと）

b. /hair-a-na/'入らないと'：今度わ　ハイラナ（今度は入らないと）

3.3.5. 派生接尾辞

派生接尾辞には、以下のものがある。

(119) 平方言の派生接尾辞

-(s)ase-'使役'、-(r)are-'受身、可能、自発、尊敬'、-(j)aje-'可能'、-(i)kir-'可能'

-wor-'進行'、-tjor-'結果継続'、-tjok-'先行'、-(i)mas-'丁寧'

派生接尾辞の/-(s)ase-/'使役'、/-(r)are-/'受身、可能、自発、尊敬'、/-(j)aje-/'可能'は、あとに続く接辞によって語幹が e になるときと u になるときがある。これは母音語幹動詞と同様である。派生接尾辞末が子音の形式は、子音語幹動詞と同様の接続をする。

3.3.5.1. 使役/-(s)ase-/

子音語幹動詞とサ変動詞の s に/-ase-/で接続し、母音語幹動詞の e とカ変動詞の ko に/-sase-/で接続する。

(120) a. /nom-ase-N/'飲ませない' : ノマセンじゃった（飲ませなかった）

b. /okir-asu-ru/'起きさせる' : 花子に　ひとーで　オキラスー

（花子に一人で起きさせる。）

c. /ker-ase-re/'蹴らせろ' : 俺も　ケラセレよ（俺も蹴らせろよ）

d. /s-aseQkure-re/'させてくれ' : おーば　おまえよら　手前　サセックレレよ

（俺をお前より手前にさせてくれよ。）

3.3.5.2. 受身・可能・自発・尊敬/-(r)are-/

子音語幹動詞とサ変動詞の s に/-ase-/で接続し、母音語幹動詞の e とカ変動詞の ko に/-sase-/で接続する。

この派生接尾辞は、「受身」「可能」「自発」「尊敬」という 4 つの意味で用いられる。まずは、「受身」の用例を挙げる。

(121) a. /tatak-are-ta/'叩かれた' : 太郎が　次郎かー　タタカレタ

（太郎が次郎に叩かれた）

b. /s-ase-rare-jor-u/'させられている' : 稽古　サセラレヨーとよ

（稽古させられているのよ）

次に「可能」の用例を挙げる。

(122) a. /nor-are-N/'乗ることができない' : 船の　出んてん　ノラレン

（船が出ないから乗ることができない。）

b. /s-aru-ru/'することができる' :

機械の　よーなったてん　今日わ　しごっの　サールイよ

（機械が直ったから今日は仕事ができるよ。）

「自発」は、「思い出す」などの知覚に関する限られた動詞にみられる。

(123) /omoidas-aru-ru/'思い出される' :

昔の　もんば　見れば　前ん　ことが　オモイダサルーなー

（昔のものを見ると、昔のことが思い出されるなあ）

「尊敬」での使用は、伝統的な平方言ではみられない。対外的な場面で、「尊敬」を表

す必要があるときに用いられるもので、共通語での使用ともいえる。

(124)　/ko-rare-ta/'いらっしゃった'：コラレタ（いらっしゃった）

3.3.5.3.　可能/-(j)aje-/

子音語幹動詞とサ変動詞の s に/-aje-/で接続し、母音語幹動詞の e とカ変動詞の ki に/-jaje-/で接続する。r 語幹化した動詞である/mir-/'見る'や/okir-/'起きる'には、/mir-aje-/や/okir-aje-/と接続する。

(125) a.　/s-aju-ru/'することができる'：いっも　稽古　しちょーてん　サーユーだい
（いつも稽古をしているからできるよ。）

b.　/ki-jaje-N/'来ることができない'：島にキヤエン（島に来ることができない）

3.3.5.4.　可能/-(i)kir-/

子音語幹動詞に/-ikir-/で接続する。母音語幹動詞の e、カ変動詞の ki、サ変動詞の si に接続するときは、形態素のはじめの母音の/i/を脱落させ、/-kir-/で接続する。

(126) a.　/kaw-ikir-a-N/'買うことができない'：びんぶーじゃけん　何も　カイキラン
（貧乏だから何も買うことができない）

b.　/si-kir-u/'することができる'：いっも　稽古　しちょーけん　シーキーだい
（いつも稽古をしているからすることができるよ）

/-(r)are-/、/-(j)aje-/、/-(i)kir-/の「可能」のちがいは、後述する。

3.3.5.5.　進行/-wor-/

3.3.5.5.1.　子音語幹動詞以外の動詞との接続

この接尾辞は、母音語幹動詞の e、カ変動詞の ki、サ変動詞の si に接続する。/-wor-/は、母音語幹動詞に接続する異形態に/-jor-/をもつ。

(127) a.　/kaQse-wor-u/'被せている'：はんずんに　カッセオイよ
（はんずん（大きな茶色の瓶）に（蓋を）被せているよ）

b.　/uQtuke-wor-u/'打ち付けている'：看板ば　ウッツケオイよ

（看板を打ち付けているよ）

c. /toke-jor-u/'溶けている'：氷ん　トケヨイよ（氷が溶けているよ）

d. /tabe-jor-u/'食べている'：ごっつん　でちょーちゃろ　よー　タベヨーばい
（ご馳走が出ているのだろう、よく食べているよ）

3.3.5.5.2. 子音語幹動詞の語形変化

子音語幹動詞は音便形とは異なる形式で、/-wor-/に接続する。語幹末子音が k、t の動詞語幹は//kak-wor-//'書いている'が/kaQ-wor-/になり、//mat-wor-//'待っている'が/maQ-wor-/になる。語幹末子音が n、m の動詞語幹は//sin-wor-//'死んでいる'が/siN-wor-/、//nom-wor-//'飲んでいる'が/noN-wor-/になる。語幹末子音が r の動詞語幹は//odor-wor-//'踊っている'が/odoo-wor-/と長音化する。語幹末子音が b の動詞語幹は、動詞によって異なるふるまいをする。//job-wor-//'呼んでいる'や//tob-wor-//'飛んでいる'、//ajub-wor-//'歩いている'は、/joN-wor-/や/toN-wor/、/ajuN-wor-/のように撥音化する。//orab-wor-//'叫んでいる'は、/oraQ-wor-/のように促音化する。

以下の語幹末子音の動詞は、2 通りの語幹が/-wor-/に接続する。この 2 通りの語幹の使用は、同一の話者でもみられる。語幹末子音が g の動詞語幹は、//kog-wor-//'漕いでいる'が/koN-/と/koQ-/のどちらかで接続する。語幹末子音が s の動詞語幹は、//hos-wor-//'干している'が/hoH-/と/hoQ-/のどちらかで接続する。この 2 つの語幹末子音は、調査時において、どちらかといえば前者が多く回答されるが、後者でも問題なく使用できるとのことである。

語幹末子音が w の動詞語幹は、//waraw-wor-//'笑っている'が/waraQ-/と/wara-/のどちらかで接続する。ただし、g 語幹や s 語幹は/-wor-/の語形に区別がなかったのに対し、w 語幹は、/waraQ-wor-/か/wara-or-/という区別がある。これは他の w 語幹の動詞でも同様である。

(128) a. //kaw-wor-//'買っている'：/kaQ-wor-/または/kaa-or-/

b. //suw-wor-//'吸っている'：/suQ-wor-/または/su(u)-or-/

c. //utaw-wor-//'歌っている'：/utaQ-wor-/または/uta(a)-or-/

//ikaw-wor-//'休んでいる'が/ikoQ-wor-/、//kuw-wor-//'食っている'が/kuu-or/のように、どちらか一方しか用いられない動詞もある。

3.3.5.5.3. /-wor-/の語形変化

/-wor-/は、子音語幹動詞の語幹末子音に接続するときに語形変化し、/-gor-/や/-bor-/、/-mor-/などの異形態になる。

(129) a. /hanaH-gor-u/'話している'：なーごに　ハナヒゴー（長く話している）
b. /kaQ-gor-u/'勝っている'：どっちが　カッゴーかよ（どっちが勝っているか）
c. /siN-gor-u/'死んでいる'：もー　シンゴーよ（もう死につつあるよ）
d. /kaQ-bor-u/'書いている'：カッボーごたった（書いているようだった）
e. /noN-bor-u/飲んでいる'：ビールば　みんのごて　ノンボー
（ビールを水のように飲んでいる）
f. /noN-mor-u/'飲んでいる'：みゃーばん　ノンモーばって　今日も　飲もごちゃいよ
（毎晩飲んでいるけれど今日も飲みたいよ）

w 語幹動詞が接続するとき、/-wor-/の/w/が脱落して/-or-/になることもある。

(130) a. /kuu-or-u/'食っている'：ずーっと　クーオーとたい（ずっと食っているんだよ）
b. /wara-or-u/'笑っている'：テレビの　よかっの　あーろーちゃろ　ワラオイよ
（テレビの良いのがやっているのだろう、笑っているよ）
c. /suu-or-u/'吸っている'：タバコば　スオンね（タバコを吸っているね）

これらの接辞を/-or-/と解釈した理由は、w 語幹動詞に/-wor-/が接続するならば、動詞語幹末がモーラ音素化すると考えられるためである。

(131) a. /ikoQ-bor-u/'休んでいる'：イコッボイよ（休んでいるよ）
b. /waraQ-bor-u/'笑っている'：
何の　よかこっの　あったっじゃろ　ワラッボイよ
（なんの良いことがあったんだろう、笑っているよ）
c. /suQ-gor-u/'吸っている'：タバコば　スッゴイよ（タバコを吸っているよ）

r 語幹動詞が/-wor-/に接続するときも/w/は脱落する。このとき r 語幹動詞の語幹末子音の前の母音が長音化する。

(132) a. /hjaar-or-u/'入っている'：

どこどこん　みせやに　人間の　いっぴゃ　ヒャーローばい

（どこどこのお店に人間がいっぱい入っているよ）

b. /aar-or-u/'やっている'：なんか　売り出しの　アーローっちゃろ

（何か売り出しがやっているのだろう）

//hjar-wor-u//'入っている'を例に考察を行う。/hjar-wor-u/は、/-wor-/の/w/が脱落したことにより、/*hja.ro.ru/という 3 モーラの形式になる。他の子音語幹動詞は語幹末子音がモーラ音素化か長音化をして、モーラ数を保持している。例えば//kak-wor-u//'書いている'であれば、/ka.Q.go.ru/になり、4 モーラを保持している。r 語幹が/-wor-/に接続するときは、このモーラ数の保持のため、語幹末子音の前の母音を長音化し、代償延長を行っていると考えられる。ただし、平方言の特徴として、長母音の単音化もみられる。そのため、代償延長をしていないようにも捉えられる形式はある。

r 語幹化した母音語幹動詞である/mir-/'見る'や/okir-/'起きる'は、/miir-or-/'見ている'や/okir-or-/'起きている'という形式になる。

(133)　/mir-oQ-ta/'見ていた'：先生も　ミロッタばって（先生も見ていたけれども）

「非過去」の/-(r)u/以外の動詞屈折接尾辞が接続する例を、以下に挙げる。

(134) a. /hanaH-goQ-ta/'話していた'：そして　一所懸命　はなひゴッタてんなー

（そして一生懸命話していたからなー）

b. /kaQ-gor-e/'書いていろ'：てがんば　かっゴレ（手紙を書いていろ）

c. /noN-bor-e/'飲んでいろ'：黙って　のんボレよ（黙って飲んでいろよ）

3.3.5.5.4. 【参考】藪路木島方言の/-wor-/

平方言の/-wor-/の異形態/-gor-/、/-bor-/は、動詞語幹末の子音にかかわらず、どちらの形式も接続している。宇久町の近隣にある小値賀町の藪路木島方言では、動詞語幹末の子音によって、この/-wor-/を使い分けている。参考のため、ここに挙げる。

藪路木島方言では、子音語幹動詞に/-wor-/が接続するとき、その子音語幹末に u を挿入する。

(135) a. //kag-wor-u//'嗅いでいる'→/kaguworu/

b. //das-wor-u//'出している'→/dasuworu/

c. //utaw-wor-u//'歌っている'→/utawuworu/

d. //tir-wor-u//'散っている'→/tiruworu/

ただし、b 語幹と m 語幹の動詞では、動詞語幹がモーラ音素化し、/-wor-/も語形変化する。

(136) a. //kam-wor-u//'噛んでいる'→/kaNmoru/

b. //tob-wor-u//'飛んでいる'→/toQboru/

3.3.5.6. 結果継続/-tjor-/

子音語幹動詞の音便形、母音語幹動詞の e、カ変動詞の ki、サ変動詞の si に接続する。r 語幹化した母音語幹動詞である/mir-/'見る'や/okir-/'起きる'は、/mitjor-/'見ている'や/okiQtjor-/'起きている'という形式になる。母音語幹で接続するときと、r 語幹化した形（r 語幹の音便形に対応する形）で接続するときがみられる。

(137) a. /okiQ-tjor-u/'起きている'：花子は　もー　オキッチョイよ。

（花子はもう起きているよ）

b. /ake-tjor-u/'開けている'：1 時間前かー　アケチョー

（1 時間前から開けている）

c. /ki-tjor-u/'来ている'：昨日かー　キチョー（昨日から来ている）

3.3.5.7. 先行/-tjok-/

子音語幹動詞の音便形、母音語幹動詞の e、カ変動詞の ki、サ変動詞の si に接続する。

(138) a. /kaa-tjok-eba/'書いておけば'：きの　カーチョケバ　よかったばってね

（昨日書いておけば良かったんだけれどね）

b. /juu-tjok-eba/'言っておけば'：

はよ　ユーチョケバ　おばさんどば　ここに　集めちょったばってんねー

（早く言っておけば、おばさんをここに集めていたんだけれどね）

c. /moQte#iQ-tjok-e/'持って行っておけ'：みんも　たいそ　モッテイッチョケよ

（水もたくさん持って行っておけよ）

d. /ee-tjok-e/'置いておけ'：飲まんとなら　エーチョケよ
（飲まないのなら置いておけ）

e. /si-tjok-e/'しておけ'：母ちゃんかー　留守番シチョケち　頼まれた
（母ちゃんから留守番しておけと頼まれた）

3.3.5.8. 丁寧/-(i)mas-/

伝統的な宇久町方言で、丁寧形はみられない。島外の人などに対して、丁寧さを表す必要があるときには、共通語の「マス」が用いられる。

子音語幹動詞に/-imas-/で接続する。母音語幹動詞の e、カ変動詞の ki、サ変動詞の si に接続するときは、形態素のはじめの母音の/i/を脱落させ、/-mas-/で接続する。

(139)　/si-mas-u/'します'：今かー　仕事わ　シマス（今から仕事はします）

3.3.6. 複合動詞

複合動詞は、動詞の語幹が動詞に接続することで作られる。

(140) 語彙的複合動詞

a. //kak-//'書く'+//kaje-ru//'換える'→/kaQkajuru/'書き換える'

b. //os-//'押す'+//tawas-u//'倒す'→/oHtawasu/'押し倒す'

c. //mi-//'見る'+//matigaw-u//'間違う'→/mimatigaw-u/'見間違う'

(141) 統語的複合動詞

a. //kak-//'書く'+//haHme-ru//'始める'→/kaQhaHmeru/'書き始める'

b. //kak-//'書く'+//kom-u//'込む'→/kaQkomu/'書き込む'

以下の例は複合ではなく、「テ形現象」により「単純接続」の/-te/が脱落した動詞が、あとの形式に続いていると考える。

(142) a. //utaw-//'歌う'+//-te//+//kik-ase-ru//'聞かせる'→/utoQkikaseru/'歌って聞かせる'：
ウトッ　キカセレよー（歌って聞かせてよ）

b. //kime-//'決める'+//-te//+//jo-ka//'良い'→/kimeQjoka/'決めていい'：
おーが　キメッ　ヨカかよ（私が決めていいかい）

3.3.7. コピュラ動詞/=zjar-/

3.3.7.1. 動詞への接続

接語/=zjar-/は、/=zjar-oo/の形式で「推量」を表し、/(-a)-N=zjaQ-ta/の形式で「否定過去」、/(-a)-N=zjar-oo/の形式で「否定推量」を表す。また、「理由」を表す/=zja#moN/や終助詞を接続した/=zja=na/などの形式もみられる。このとき/=zjar-/の接辞末の/r/は脱落している。

(143) a. /or-u=zjar-oo/'いるだろう' : まだ　オージャロ（まだいるだろう）

b. /ku-ru=zjar-oo/'来るだろう' : クージャロだい（来るだろう）

c. /su-ru=zjar-oo/'するだろう' : 今かー　しごっば　スージャロだい
（今から仕事をするだろう）

d. /nom-a-N=zjaQ-ta/'飲まなかった' : 飲もごちゃったばってー　ノマンジャッタ
（飲みたかったけれど、飲まなかった。）

e. /nar-a-N=zjar-oo/'ならないだろう' : 薬に　ナランジャロ
（薬にならないだろう）

この/=zjar-/は、連用類の屈折接尾辞による副詞節にも接続する。

(144) a. /oboe-na=zjar-oo/'覚えないとだろう' : 踊りも　オボエナジャロ
（躍りも覚えないとだろう）

b. /kat-ase-na=zja#moN/'勝たせないとだもの' : カタセナジャモンねー
（勝たせないとだものね）

動詞に直接接続するだけでなく、準体助詞/=to/を介しても接続する。

(145) a. /ar-u=to=zja=na/'あるのだな' :
おっども　こがん　アートジャナ（私もこうあるのだな）

b. /sir-a-N=to=zja#moN/'知らないのだもの' :
シラントジャモン（知らないんだもの）

c. /ajuba-N=zjaQ-ta=Q=zjar-oo/'歩かなかったのだろう' :
アユバンジャッタッジャロだい（歩かなかったのだろうね）

3.3.7.2. 名詞述語文

名詞が述語で用いられるとき、「非過去」の場合は何も接辞を接続させない。終助詞/=tai/や/=ne/が、名詞に直接接続する。

(146) a. 太郎わ　ガクセー（太郎は学生だ）

b. 私ん　いた　頃ちゅーとが　八月の　スエたいね

（私がいた頃というのが八月の末だよね）

c. 運動会ちゅーけど　レクリエーションたい

（運動会というけれども、レクリエーションだよ）

「過去」や「仮想」は、接語/=zjar-/に動詞の接辞が接続する。「否定」は、接語/=zjar-//に形容詞の否定形/naka/が接続する。

(147) //=zjar-//+//-ta//'過去' → /=zjaQta/：

去年まで　太郎わ　ガクセージャッタ（去年まで太郎は学生だった）

//=zjar-//+//-oo//'仮想' → /=zjaroo/：

おばさんも　戻ったっちゃ　ヒトリジャロ

（おばさんも帰ったって一人だろう）

//=zjar-//+//na-ka//'否定' → /=zja#naka/：

ガクセージャナカ（学生じゃない）

3.4. 形容詞

3.4.1. 形容詞語幹と活用形

形容詞の活用型は、ひとつである。以下に、語幹末母音ごとの形容詞の用例を挙げる。平方言では、語幹末母音 e の形容詞はみられない。

(148) 形容詞語幹

語幹末母音 a　oQta-'高'、taka-'高'、zamana-[3]'大'

語幹末母音 i　kanasi-'悲'、atarasi-'新'

語幹末母音 u　nuku-'暑'、samu-'寒'、

語幹末母音 o　too-'遠'、nakajo-'親'

これらの語幹に、2 つの屈折接尾辞が接続する。

(149) 形容詞の屈折接尾辞

終止連体形： 語幹-ka

連用形： 語幹-u

形容詞の文法的カテゴリーは、これらの屈折接尾辞のあとに何かを接続して表している。終止連体形の/語幹-ka/は、単独では「非過去」を表し、この形式に動詞派生接尾辞の/-r-/が接続することで「過去」や「仮想」などを表す。この/-r-/は、「過去」の接尾辞/-ta/などの t 音に続くとき、逆行同化を起こし、促音/Q/になる。

/nuku-/'暑'、/samu-/'寒'など、語幹末母音 u の形容詞は、終止連体形の接尾辞/-ka/に接続するとき、語幹末の音節が特殊モーラになる。語幹末音節の子音が無声音であれば促音/Q/、有声音であれば撥音/N/になる[4]。/kanasi-/'悲'など、語幹末母音 i の形容詞は、終止連体形の接尾辞/-ka/に接続するときに、多くの場合、語幹末音節が特殊モーラ/H/になる。

連用形の/語幹-u/は、副詞的用法で用いられる。連用形に他の形式を接続することで「否定」や「単純接続」を表す。平方言では、形容詞連用形/samu-u/に/site/を接続させて、「単純接続」を表している。共通語の「朝は寒く、昼は暑い」のような連用形中止による接続は用いられない。

また、前述の通り、平方言では、[samɯ:]'寒く'が[samɯ]となるなど、長母音の単音化がみられる。

3.4.2. 活用表

以下に、形容詞の活用表を示す。

(150) 表 11　形容詞活用表

	終止連体形	終止連体形-動詞派生接尾辞			連用形	
	非過去	過去	仮想	未完了 仮定条件	否定	単純 接続
語幹	-ka	-ka-r-ta	-ka-r-oo	-ka-r-eba	-u#na-ka	-u#site
oQta-'重'	oQta-ka	oQta-ka-Q-ta	oQta-ka-r-oo	oQta-ka-r-eba	oQto na-ka	oQto site
kanasi-'悲'	kanaH-ka	kanaH-ka-Q-ta	kanaH-ka-r-oo	kanaH-ka-r-eba	kanasjuu na-ka	kanasjuu site
nuku-'暑'	nuQ-ka	nuQ-ka-Q-ta	nuQ-ka-r-oo	nuQ-ka-r-eba	nuku-u na-ka	nuku-u site
too-'遠'	too-ka	too-ka-Q-ta	too-ka-r-oo	too-ka-r-eba	too na-ka	too site

3.4.3.　語幹に接続する屈折接尾辞

3.4.3.1.　非過去/-ka/

語幹に/-ka/を接続する。/aka-/'赤い'、/naga-/'長い'などの語幹末母音が a の形容詞、もしくは/nuku-/'暑い'、/samu-/'寒い'などの語幹末母音が u の形容詞は、語幹末音節が特殊モーラ化することが多い。語幹末音節の子音が無声音であれば促音/Q/、有声音であれば撥音/N/になる。

(151) a.　/aQ-ka/'赤い'：こん　トマトわ　アッカ（このトマトは赤い）
　　b.　/hiQ-ka/'低い'：せーが　ヒッカ（背が低い）
　　c.　/naN-ka/'長い'：ナンカ　間　おらるー（長い間いられる）
　　d.　/aQtaa-ka/'もったいない'：アッターカ　こっば　すんなよ
　　（もったいないことをするなよ）
　　e.　/jaguraH-ka/'煩わしい'：ヤグラヒカったい（煩わしいんだ）

対外的な場面で、丁寧さを表すときは、非過去形に/=des-u/を接続させて用いる。伝統的な宇久町方言では、丁寧形はみられない。

(152)　/nuQ-ka=des-u/'暑いです'：ヌッカデスねー（暑いですね）

3.4.3.2. 否定/-u#na-ka/

連用形に形容詞/na-ka/を接続する。

(153) a. /samu#na-ka/'寒くない'：今日わ　サムナカねー（今日は寒くないね）

b. /tako#na-ka/'高くない'：タコナカ　本（（値段が）高くない本）

/samu/'寒く'、/tako/'高く'の連用形は、助詞/=wa/や/=mo/などでとりたてることができる。

(154) a. /nuku=wa#na-ka/'暑くはない'：ヌクワナカ（暑くはない）

b. /ito=mo#kaju=mo#naka/'痛くも痒くもない'：イトモ　カユモナカ
（痛くも痒くもない）

3.4.3.3. 単純接続/-u#site/

連用形に/site/を接続する。この/site/は、歴史的には動詞/si-/'する'に「単純接続」の/-te/が接続した形式であったと考えられるが、もはやこのときの動詞/si-/'する'には動作性がなくなっており、/site/という形式で固定化している。

(155) a. /oqto#site/'重くて'：オットシテ　持たえん（重くて持つことができない）

b. /samu#site/'寒くて'：サムシテ　サムシテ　たまらんよ
（寒くて寒くてたまらないよ。）

c. /isogasjuu#site/'忙しくて'：イソガシューシテ　あんけらるーとって
（忙しくて（他の人に）預けられるんだって）

d. /okasjuu#site/'可笑しくて'：オカシューシテ　人んとば　見ちょー
（可笑しくて人のものを見ている）

3.4.4. 動詞派生接尾辞//-r-//に接続する屈折接尾辞

3.4.4.1. 過去/-ta/

終止連体形に/-r-ta/を接続する。/-r-/は促音化して/-Q-/になる。

(156) a. /aQ-ka-Q-ta/'赤かった'：アッカッタ　みーの　くろなっちょいよ
（赤かった実が黒くなっているよ）

b. /jo-ka-Q-ta/'良かった'：あの　人が　来てくれちょったけん　ヨカッタ
（あの人が来てくれていたから良かった。）

c. /nuQ-ka-Q-ta/'暖かかった'：ヌッカッタ　モンガ　チントナッタ
（暖かかったものが冷たくなった）

d. /okaH-ka-Q-ta/'可笑しかった'：一番　はじめ　オカヒカッタっがね
（一番初め可笑しかったのがね）

3.4.4.2. 仮想/-oo/

終止連体形に/-r-oo/を接続する。

(157) a. /aQ-ka-r-oo/'赤いだろう'：中も　アッカロねー（中も赤いだろうね）

b. /nuQ-ka-r-oo/'暑いだろう'：明日わ　とても　ヌッカロー
（明日はとても暑いだろう）

c. /waka-ka-r-oo/'若いだろう'：なんの　ワカカロかよ（なにが若いだろうか）

3.4.4.3. 未完了条件/-eba/

終止連体形に/-r-eba/を接続する。

(158) a. /aka-ka-r-eba/'赤ければ'：アカカレバ　とろだい（赤ければ採ろうよ）

b. /na-ka-r-eba/'なければ'：運動会の　時じゃ　ナカレバ　会わえんかな
（運動会の時じゃなければ会うことはできないかな）

3.4.5. 形容動詞

3.4.5.1. 形容動詞語幹と活用表

形容動詞は、終止連体形のとき、形容詞と同じ接辞/-ka/が接続する。そのため、品詞では形容詞の一種と捉える。しかし、連用形のとき、接辞/-ni/が接続する点は形容詞と異なる。また、形容動詞は接辞/-na/が接続する連体形をもつ点も形容詞と異なる。

(159) 平方言の形容動詞の屈折接尾辞

終止連体形：　語幹-ka
連体形：　語幹-na
連用形：　語幹-ni

形容動詞は、「過去」や「仮想」を表すとき、終止連体形の屈折接尾辞/-ka/に動詞派生接

尾辞/-r-/を接続させるか、もしくはコピュラ動詞/=zjar/を用いる。形容動詞の活用は形容詞型の活用と名詞述語型の活用が併存している。

形容動詞の連用形は、副詞的用法のみで用いられる。形容詞の連用形が表していた「否定」や「単純接続」は、連用形を用いない。形容動詞の「否定」は、/*sizuka-ni#naka/のように連用形を用いた形式を使用せず、終止連体形に接続したコピュラ動詞/=zjar-/に、/na-ka/を接続させて表している。「単純接続」は形容動詞語幹に助詞/=de/を接続させる。

以下に、活用表を示す。

(160) 表 12　形容動詞活用表

	終止 連体形	連体形	連用形	動詞派生接尾辞／コピュラ動詞			助詞
	非過去	連体修飾	副詞的 用法	過去	仮想	否定	単純 接続
語幹	-ka	-na	-ni	-ka-r-ta/ =zjar-ta	-ka-r-oo/ =zjar-oo	=zja# na-ka	=de
sizuka- '静'	sizuka-ka	sizuka-na	sizuka-ni	sizuka-ka- Q-ta/ sizuka=zj aQ-ta	sizuka-ka- r-oo/ sizuka=zj a-r-oo	sizuka= zja na-ka	sizuka =de
riQpa- '立派'	riQpa-ka	riQpa-na	riQpa-ni	riQpa-ka- Q-ta/ riQpa=zja Q-ta	riQpa-ka- r-oo/ riQpa=zja -r-oo	riQpa=zja na-ka	riQpa= de

3.4.5.2.　終止連体形/語幹-ka/と語幹に接続する形式

終止連体形単独では「非過去」で用いられる。「過去」は終止連体形に動詞派生接尾辞を接続させた/-r-ta/か、語幹にコピュラ動詞を用いた/=zjar-ta/を用いる。「過去」の接辞/-ta/に接続する/r/は、促音化して/-Q-/になる。「仮想」も同様に/-r-oo/か/=zjar-oo/を用いる。

(161) a.　/sizuka-ka/'静かだ'：こん　部屋わ　シズカカ（この部屋は静かだ）

b. /sizuka-ka-Q-ta/、/sizuka=zjaQ-ta/'静かだった'：

さっきまで　｛シズカカッタ／シズカジャッタ｝部屋が　そーぞーらひか

（さっきまで静かだった部屋が騒々しい）

c. /sizuka-ka-r-oo/、/sizuka=zjar-oo/'静かだろう'：

むこーわ　まーだ　｛シズカカロ／シズカジャロ｝ねー

（向こうはまだ静かだろうね）

「否定」は、コピュラ動詞/=zjar/に形容詞/na-ka/を接続する。このとき/=zjar-/の接辞末の/r/は脱落している。

(162) /geNki=zja#naka/'元気でない'：きのほで　ゲンキジャナカ

（昨日ほど元気でない）

「未完了条件」は終止連体形に動詞派生接尾辞を用いた/-r-eba/を接続させる。

(163) /sizuka-ka-r-eba/'静かなら'：シズカカレバ　ねむらるー

（静かなら眠ることができる）

対外的な場面で、丁寧さを表すときは、語幹に/=des-u/を接続させて用いる。伝統的な宇久町方言では、丁寧形はみられない。

(164) /sizuka=des-u/'静かです'：シズカデス（静かです）

3.4.5.3. 連体形/語幹-na/

名詞への連体修飾には、終止連体形か連体形を用いる。

(165) a. /sizuka-ka/、/sizuka-na/'静かな'：｛シズカカ／シズカナ｝部屋（静かな部屋）

b. /geNki-ka/、/geNki-na/'元気な'｛ゲンキカ／ゲンキナ｝人（元気な人）

3.4.5.4. 連用形/語幹-ni/

連用形は副詞的用法でのみ用いる。

(166) a. /sizuka-ni/'静かに'：もーすぐ　シズカニなー（もうすぐ静かになる）

b. /geNki-ni/'元気に'：風邪が　よーなって　ゲンキニなった

（風邪が治って元気になった）

3.4.5.5. 助詞/語幹=de/

「単純接続」は、語幹に助詞/=de/を接続する。

(167) /geNki=de/'元気で'：太郎わ　ゲンキデ　花子わ　おとなひか

（太郎は元気で花子は大人しい）

3.4.6. 「形容詞連用形＋ニ」による副詞的用法

3.4.6.1. 問題の所在

平方言では、形容詞連用形が直接接続する形式のほかに、連用形に「ニ」が接続する形式で副詞節をつくることがある。以下に用例を示す。

(168) a. 【形容詞連用形のみ】ミヒコ　ゆー（短く言う）

b. 【形容詞連用形＋ニ】ミヒコニ　ゆー（短く言う）

この「ニ」は、形容動詞の連用形に用いられる/-ni/であると考える。形容詞連用形は、それ単独で名詞的に用いられることがある。

(169) そがん　ハヨニわ　でけん（（夕飯は）そんなに早くにはできない）

形容動詞語幹も、名詞で用いられる。そのため、形容詞連用形を形容動詞語幹と同様に捉え、副詞節を作るために/-ni/を接続させていると考えられる。このような捉え方に類似するものとして、福岡方言等でみられる「ヤスクデ買う」（安い値段で買う）という文がある。同様の文を、平方言では「ヤスニこーた」（安い値段で買った）と「形容詞連用形＋ニ」を用いることができる。

このような形容詞連用形の捉え方には、インフォーマントによる差がみられる。したがって、「形容詞連用形＋ニ」は、インフォーマントによって容認性が異なる。その容認性を本論文のインフォーマントである話者 A、C、D、F の 4 名に判断してもらっている。

3.4.6.2. 「形容詞連用形＋ニ」の使用

3.4.6.2.1. 副詞的用法での使用

本節では、形容詞連用形による副詞的用法、否定、単純接続の用法で、「形容詞連用形＋ニ」が使用されるかをみる。文法性の容認度判断は、A による回答を主としている。

(170) a. コモニ　割れた（（ガラスが）細かく割れた）
b. こけ　ナゴニ　おろごちゃー（ここに長くいたい）
c. クロニ　なーとん　はよ　なったねー（暗くなるのが早くなったね）

3.4.6.2.2. 否定での使用

「否定」でも、「形容詞連用形＋ニ」の形式が用いられる。

(171) a. 今日わ　サムニ　ナカねー（今日は寒くないね）
b. タコニ　ナカ　本（（値段が）高くない本）

形容詞連用形と「否定」の/na-ka/の間に、//=wa//や//=mo//などのとりたて助詞を入れた場合、「形容詞連用形＋ニ」は用いられない。

(172) a. ｛ヌク／*ヌクニ｝ワ　ナカ（暑くはない）
b. ｛イト／*イトニ｝モ　｛カユ／*カユニ｝モ　ナカ（痛くも痒くもない）

ただし、/na-ka/に接続するのでなければ、容認される。

(173) ミヒコニワ　切らんじ　なごきーとぞ
（（ネギは）短くは切らないで、長く切るんだよ）

3.4.6.2.3. 単純接続での不使用

「単純接続」では、「形容詞連用形＋ニ」が用いられない。

(174) a. ｛オット／*オットニ｝シテ　持たえん（重くて持てない）
b. ｛サム／*サムニ｝シテ　｛サム／*サムニ｝シテ　たまらんよ
（寒くて寒くてたまらないよ）

3.4.6.3. 「形容詞連用形＋ニ」の用例

インフォーマント 4 名のうち半数以上が使用すると回答した用例を挙げる。

(175) a. カレーが　ンモニ　できちょいよ（カレーがおいしくできているよ）[5]

b. 腕ん　イトニ なったよー（（田んぼの仕事をしたら）腕が痛くなった）

c. ナカヨーニ　暮らしちょんねー（（みんな）仲良く暮らしている。）

d. ムンカシュニ　考ゆんなよ（（そんなに）難しく考えるなよ）

次に、4 名とも容認できなかった用例を、いくつか挙げる。

(176) a. こどがためなら　いっだ　つこてん　｛オシュ／*オシュニ｝　なかよ
（子どものためなら、いくら使っても惜しくない）

b. ｛ネット／*ネットニ｝なった（眠たくなった）

d. ｛クルシュ／*クルシュニ｝　なった（（息が）苦しくなった）

d. ｛アタラシュ／*アタラシュニ｝買わないかん
（新しく買わないといけない）

3.4.6.4. 【参考】他地域にみられる「形容詞連用形＋ニ」

3.4.6.4.1. 『日本のふるさとことば集成』にみられる用例

『日本のふるさとことば集成』を見ると、各地に「形容詞連用形＋ニ」がみられることがわかる[6]。以下に、参考として挙げる。用例は、方言談話をまず示し、丸括弧で書中の訳を示す。角括弧は、巻数とページ数、地域、性別、生年を示す。

(177) 首都圏

a. コマカニ　キッタンガ　ジョーズー　キッタンダ　ッツッテー（細かに切ったのが上手[に]切ったのだと言って）〈7-111、群馬県前橋市、男性、明治 35 年生〉

b. イエノ　マワリン　ズット　タカクニ　ツルシテアルッチュ　ワケダ（家の周りにずっと高くつるしてあるというわけだ）〈8-125、山梨県塩山市、女性、明治 43 年生〉

(178) 近畿地方

ハヨーニ　トーバンデ　ソージ　シヨー　オモテ　ミズ　クミニイタラ（早

くに当番で掃除[を]しよう[と]思って水[を]汲みに行ったら）〈13-190、兵庫県相生市、女性、大正 3 年生〉

(179) 中国地方

a. シタオモテン　X8 チャンラー　オーソーニ　オーソーニ　ショータガ　オーキー　タヤコー　セーデモ　エー　ヤンベージャッタガ（下表の X8 ちゃんは遅く遅くしていたよ　大きい田などそれでもよい具合だったよ）〈14-179、岡山県小田郡、女性、大正 8 年生〉

b. ワタシラ　コーモーニ　シカクニ　コー（中略）コンダケノ　スンポーニキレ　ユーテ　イワレル（私など[に]小さく四角にこう（中略）これだけの寸法に切れ[と]いっていわれる）〈15-80、広島県広島市、女性、大正 1 年生〉

c. ハナビガ（中略）ソートー　ヒロー　オーキューニ　マワリマス（花火が（中略）相当広く大きく回ります）〈15-59、広島県広島市、女性、大正 1 年生〉

d. ソノ　ナワノ　ツナガ　アタラシー　ナカーワ（中略）ノビデ　ナガーンナッテ（中略）マタシチャ　トンデデテ（中略）ソレ　キッテ　ツズメニャイケン（その縄の綱が新しい間は（中略）伸びて長くなって（中略）またしても飛んで出て（中略）それ[を]切って縮めないといけない）〈14-80、島根県仁多郡、女性、生年不詳（収録時 60 歳以上）〉

e. A：（稲が）アネーニ　コオー　デキンニャー　イケンイ。
B：（中略）コオーニ　デキル　ッテ　ユー　コトァ　ヤッポ　ブンケツシチョルジャロー　ナンカラ
（A：あんなに固くできないといけないよ。B：（中略）固くできるということはやはり分蘖しているだろう[と]いうことだから）〈15-218、山口県豊浦郡、A　男性、明治 44 年生、B　女性、明治 29 年生〉

(180) 四国地方

a. テーボーカ°　タカニ　シタントデ（堤防が　高く　したのとで）〈16-204、徳島県阿南市、男性、明治 34 年生〉

b. ムシカ°　スクナンナッタナ[7]（虫が少なくなったね）〈16-153、徳島県阿南市、男性、明治 34 年生〉

c. マッコト　オモシローニ　ヤッタ（ほんとうにおもしろくやった）〈17-202、高知県高知市、女性、明治 40 年生〉

d. （梶の皮を）マンマルコーニ　ヒーテ　コンナニ　ナランドゥトゥ（真ん丸く引いてこんなにならないで）〈17-238、高知県高知市、女性、明治 40 年生〉

3.4.6.4.2. 『長崎県小値賀町藪路木島方言集』にみられる用例

宇久町の近隣にある小値賀町の藪路木島方言の方言集にも、「形容詞連用形＋ニ」の用例がみられる。用例は、まず藪路木島方言を示し、括弧内に方言集の訳を示す。

(181) a. アツンニマク（厚く蒔く　多めに間を近く蒔く）

b. オースンニ（ずいぶん遅く　・・・来たつ）

c. ミソゴユーンニ（味噌の味を濃い目に　・・・炊いて食べる）

d. ミシコンニセレ（短めにしてくれ）

e. ヤオンニタケ（柔らかめに炊け）

3.5. その他の品詞

3.5.1. 助詞

3.5.1.1. 格助詞・とりたて助詞・準体助詞

助詞は、すべて接語である。句に接続する格助詞、とりたて助詞、準体助詞と、節に接続する接続助詞、終助詞に分かれる。

格助詞には「主格」の/=ga/、/=no/や、「対格」の/=ba/などがある。格助詞は、その句の述語との統語的な関係を明示する。

(182) a. 【主格】/oo=ga/'私が'、/tonaN=no#moN=no/'者が'：

オーガ　飲もだいっち　思っちょったら　となんの　モンノ　のーだ

（私が飲もうと思っていたら、隣の者が飲んだ）

b. 【対格】/sake=ba/おら　サケバ　のーだよ（私は酒を飲んだよ）

とりたて助詞には「主題」の/=wa/や「累加」の/=mo/がある。とりたて助詞は、句に接続し、「主題」や「累加」などを表す。特定の格を表しているわけではなく、また、格助詞

にも接続する。

(183) a. 【主題】/sake=wa/'酒は' :

こん　サケワ　うまかてん　いっだでん　飲まるいよ

（この酒は旨いからいくらでも飲むことができる）

b. 【累加】/omae=mo/'あなたも' :

太郎に　たのじょーばって　オマエモ　してくれれよ

（太郎に頼んでいるけれど、あなたもしてくれよ）

c. 【累加】/denwa=ni=mo/'電話にも' :

デンワニモ　出られんごて　忙しかっぱい

（電話にも出ることができないくらい忙しいんだよ）

準体助詞/=to/は、用言の終止連体形に接続し、名詞句をつくる。終助詞/=tai/などに接続するときは、逆行同化をして/=Q/になる。

(184) a. /zjor-u=to=wa/'料理するのは' : 魚ば　ジョートワ　とても　じょひ

（魚を料理するのはとても上手だ）

b. /noo-da=Q=tai/'飲んだんだよ' :

にごなかごちゃったてん　おもわひ　ノーダッタイ

（苦くなさそうだったから思わず飲んだんだよ）

準体助詞/=to/は、そのあとに動詞/ar-/を接続させ、接辞を続けることができる。このとき、この 2 つの形式に/j/が挿入され、/*=to+j+ar-/が/=tjar-/という形式になる。さらに、/=tjar-/の前に/Q/がつくことが多く、/=Qtjar-/という形式で用いられる。活用はコピュラ動詞の/=zjar-/と同様である。「仮想」の/-oo/と「否定」の/na-ka/が接続する。

(185) a. /aq-ta=Qtjar-oo/'あったのだろう' :

やっぱ　命に　いぇんの　アッタッチャロち　ゆーとたいね

（やはり命に縁があったのだろうというのだね）

b. /kik-a-N=tja#na-ka/'利かない' : 10 日じゃ　キカンチャナカ

（（入院日数が）10 日じゃ利かないのではないか）

3.5.1.2. 接続助詞

接続助詞には、順接で用いる/=teN/、/=kaNni/、/=nara/や逆接で用いる/=baQte(N)/など、がある。接続助詞は節に接続し、さらに従属節をつくる。これらの接続助詞のつくる従属節を、「条件節」と呼ぶ。

(186) a. /taQ-tjor-u=teN/'立っているから'：茶柱ん　タッチョーテン　見てみれよ
（茶柱が立っているから見てみろよ）

b. /matigo-Q=kaNni/'間違うから'：
みんと　ひだりと　マチゴッカンニ　みんば　すー　もんも　ひだりば　すーもんも　色々おろー（右と左と間違うから（踊りを）右をする者も左をする者も色々いるだろう）

c. /ar-u=to=nara/'あるのなら'：用事が　アートナラ　戻って　よかよ
（用事があるのなら帰っていいよ）

b. /kanaH-ka=baQte/'悲しいけれど'：カナヒカバッテー　なんだん　でん
（悲しいけれど涙が出ない）

3.5.1.3. 終助詞

終助詞には、/=jo/や/=ne(e)/、/=bai/、/=tai/などがある。終助詞は主節末に接続する。終助詞/=ne(e)/は終助詞に接続することができる。

(187) a. /jo-ka=jo/'いいよ'：ゆーめしゃ　おーが　つくーてん　ヨカヨ
（夕飯は私が作るから（作らなくて）いいよ）

b. /ame=bai=nee/：明日わ　アメバイネー（明日は雨だね）

c. /na-ka=jo=na/：2 時間も　ナカヨナ（2 時間もないよね）

c. /atumu-ru=tjar-o=ka=na/'集めるのだろうかね'：
なんでん　アツムーチャロカナ（何でも集めるのだろうか）

d. /ik-a-na=tai=na(a)/'行かないとだね'：
動かえんごて　なってから　いずれと　イカナタイナー
（動くことができなくなってからいずれ行かないとだね）

f. /ki-ta=Qtjar-o=kai/'来たのだろうか'：だーか　キタッチャロカイ
（誰か来たのだろうか）

平方言の終助詞の相互承接を一覧にして、以下に示す。

(188) 表 13　終助詞の相互承接

		後接する形式						
		=jo	=ka	=tai	=bai	=kai	=ne(e)	=na(a)
前接する形式	=jo		×	×	×	×	○	○
	=ka	○		×	×	×	○	○
	=tai	×	×		×	×	○	○
	=bai	×	×	×		×	○	○
	=kai	×	×	×	×		○	○
	=ne(e)	○	×	×	×	×		×
	=na(a)	×	×	×	×	×	×	

3.5.2.　連体詞

連体詞は、指示詞の「コソアド」を用いて、名詞を修飾する形式が、ほとんどだと考えられる。「コソアド」は、あとに/-no/を接続する形式か、/-gaN-na/を接続する形式にして、名詞を修飾する。

(189) a.　/a-no/'あの'：アノ　人ん　来るんじゃろ（あの人が来るんだろう）

b.　/ko-no/'この'：だんだん　コノごろわ　椅子にも　座らんじ

（だんだんこの頃は椅子にも座らないで）

c.　/ko-gaN-na/'こんな'：コガンナ　ことばが　よかったいねー

（こんなことばが良いんだよね）

d.　/so-gaN-na/'そんな'：ソガンナ　こちゃ　知らんとたい

（そんなことは知らないんだ）

3.5.3.　接続詞

接続詞は、節の初めに用いられる。平方言の接続詞は、屈折接尾辞や接続助詞などに由来するものが多い。/zjakeN/'だから'、/baQteN/'しかし'、/sositara/'そしたら'、/sosite/'そして'などが挙げられる。

3.5.4. 副詞

副詞は、6 つの品詞分類にあてはまらない品詞であり、連用修飾用法を主とする。しかし、それだけで語となることができるため、名詞と同様のふるまいもする。

(190) a. /hotoNdo#sir-a-N/'ほとんど知らない'

b. /hotoNdo=no#hito/'ほとんどの人'

c. /hotoNdo=zjaQ-ta/'ほとんどだった'

(190a)は動詞/sir-/'知る'に連用修飾する副詞であるのに対し、(190b,c)は「属格」の助詞/=no/が接続していること、コピュラ動詞/=zjar-/で述語文を作っていることから、名詞と捉えらえられることができる。

連用修飾のみを行う副詞は、/goroQto/'みんな'や/miNna/'みんな'、/motiQto/'もう少し'、/iQpjaa/'いっぱい'、/iQmo/'いつも'、/iQka/'いつか'、/tjokotjoko/'急いで'などがある。その他は、共通語と共通する形式が多い。例えば、/moo/'もう'や/taisoo/'大層'などである。/miNna#goroQto/'みんな'など、副詞が重複することもある。

副詞には、指示詞の「コソアド」を用いて、/koo/'こう'などのように長母音化する形式か、指示詞に/-gaN/を接続した形式で、用言を修飾するものがある。/-gaN/に形容動詞連用形をつくる/-ni/を接続させる形式もみられる。

(191) a. /koo/'こう'：コー　縛れよ（（藁は）こう縛れよ）

b. /so-gaN/'そんなに'：また　ソガン　あれば　困るじゃろ
（またそんなにあれば困るだろう）

c. /a-gaN/'あんなに'：アガン　うたっごったばってん
（あんなに歌っていたのに）

d. /a-gaN-ni/'あんなに'：アガンニ　ふとか　人んな　大変じゃ　介護も
（あんなに大きい人のは大変じゃ、介護も）

また、驚きや感情、応答を表す語も、本論文では副詞に含める。平方言では、驚いたときに発される形式に、//aQpajo//というものがある。

3.6. 指示詞と疑問詞

3.6.1. コソアド体系

指示詞と、共通語と同様に「コソア」が用いられる。疑問詞には「ド」が用いられる。この「コソアド」は、品詞にまたがってみられる。以下に、表にして示す。

(192) 表 14　コソアド体系

		指示詞			疑問詞
		コ系	ソ系	ア系	ド系
名詞	事物	kore	sore	are	dore
	場所	koko	soko	aHko	doko
	場所+ニ	koke	soke	aHke	doke
	方向	koQti	soQti	aQti	doQti
連体詞		kono	sono	ano	dono
		kogaNna	sogaNna	agaNna	dogaNna
副詞		koo	soo	aa	doo
		kogaN	sogaN	agaN	dogaN
	呼びかけ	kora	sora	ara	dora

3.6.2. 指示詞

現場での指示のとき、「コソア」は話し手側の事物であれば「コ」、聞き手側の事物であれば「ソ」、どちら側ともみなせない事物は「ア」が用いられる。

(193) a.　/koo=ba/'これを'：コーバ　見れ（（自分の手のものを）これを見ろ）

b.　/soo=ba/'それを'：ソーバ　やれよ（（相手の手のものを）それを寄越せよ）

c.　/aa=ba/'あれを'：アーバ　見れよ

（（話者、聞き手から離れている木を見て）あれを見ろ）

場所の指示では、助詞/=ni/が融合した形式も用いられる。

(194) a.　/koko=N/'ここの'：ココン　どぶば　掃除しぇれよ

（ここの溝を掃除しろよ）

b. /koke/'ここに'：コケ　私わ　おーてん　いっちょけよ
（ここに私はいるから行っておけよ）

c. /soko=no/'そこの'：ソコノ　川わ　私たちが　泳んごったと
（そこの川は私たちが泳いでいたのだ）

d. /soke/'そこに'：そら　ソケ　はさんの　あーたい
（ほら、そこに鋏があるよ）

e. /aHko=to/'あそこと'、/aHko=ta/'あそことは'：アヒコト アヒコタ　いとこたい
（あそことあそことは、いとこだよ）

f. /aHke/'あそこに'：あら　アヒケ　おーた　おが　孫ばい
（あら、あそこにいるのは私の孫だよ）

以下の文は、事物が話し手の背後にあり、向かい合った聞き手には見えない物に対して述べている文である。実際の距離は話し手が近いのに対して、「ソ」が用いられている。

(195) /soo=ba/'それを'：ソーバ　見てくれんか
（（作業中で手が離せないので）それを見てくれ）

文脈での指示のとき、話者が想定している事物には「ア」が用いられる。

(196) /aa=ba/'あれを'：
こないだ　こーた　鍋　あったろー　アーバ　かひちょけよ
（この間買った鍋があっただろう、あれを貸しておけよ）

3.6.3. 疑問詞

疑問詞は、「ド」を用いた形式がみられる。

(197) a. /doke/'どこに'：いま　ドケ　おーと（今どこにいるの）

b. /doko=N/'どこの'：ドコン　人じゃった（どこの人だった？）

c. /doQti=ga/'どっちが'：ドッチガ　よかっかよ（どちらがいいかな）

d. /do-N/'どの'：ドン　家かよ（どの家なのかな）

e. /do-gaN-na/'どんな'：土産わ　ドガンナ　もんば　こーたっかよ
（土産はどんなものを買ったのかな）

f. /do-gaN/'どのように' : ドガン　しよーちゃろ　知らん
（どのようにしているのだろう、（私は）知らない）

g. /do-gaN-ni/'どのように' : ドガンニ　して　すっちゃろかい
（どのようにしてするのだろうか）

上記以外に「ド」は、/do-gaN-site/'どうやって（手段）'や/do-Hte/'どうして（理由）'などの形式がみられる。

(198) a. /dogaN-site/'どうやって' : ドガンシテ　帰った（どのようにして帰った？）

b. /do-Hte/'どうして' : ドヒテ　行かんじゃった（どうして行かなかった？）

「ド」を用いた形式以外にも、以下のような疑問詞がある。

(199)　名詞 : /dare/'誰（人）'、/nani/'何（事物）'、
副詞 : /itu/'いつ（時）'、/ikutu/'いくつ（数）'、/iQta/'いくら（値段）'、

用例を以下に挙げる。

(200) a. /daa=zjaQ-ta/'誰だった' : あたしん 見た　ひたー　ダージャッタっじゃろかい
（私が見た人は誰だったんだろうか）

b. /naN=ba/'何を' : ナンバ　食べたっかよ（何を食べたんだよ）

c. /naN-niN/'何人' : ナンニン　いたっかよ（何人行ったんだよ）

d. /iQ/'いつ' : イッ　来たっかよ（いつ来たんだよ）

e. /iQta=zjaQ-ta/'いくら' : こん　お菓子わ　イッタジャッタっかよ
（このお菓子はいくらだったんだよ）

疑問詞に/-ka/を接続させて、不定表現にすることができる。

(201) a. /daa-ka=no/'誰かの' : ダーカン　財布ん　落ちちょーよ
（誰かの財布が落ちているよ）

b. /naN-ka/'何か' : ナンカ　なかかよ（何かないかな）

c. /iQta-ka/'いくらか' : こん　お菓子は　イッタカ　わからんよ
（このお菓子はいくらかわからないよ）

[1] 宇久町の野方方言を記述した中村(2019)では、当該方言が崩壊型の無アクセント方言であるため、語の単位は形態統語的特徴のみで定義している。

[2] 『方言文法全国地図』第 112 図では，九州地方全域に「カクジャロー」や「カクドー」という形式も示されている。九州地方では，これらの形式と「カコー」が併存して用いられている。

[3] /zamana-/'大'は、終止連体形で「ザーマナカ」とも「ザマナカ」とも発話される。本論文では、基底形は//zamana-//と考える。この/zamana-/は、語幹だけで連体修飾もできる形容詞である。

a. わがえん　とーちゃんな　｛ザーマナカ／ザーマナ｝　人間じゃもん
（私の家のお父さんは、（体格が）大きい人だ）

b. 庭にわ　｛ザマナカ／ザマナ｝　岩ん　あーと（庭には大きな岩がある）

この「ザマナ」は、形容動詞連体形と同じ形式である。連体修飾以外では形容詞活用と同様である。同様の形容詞に、/ookena-/'大'や/boQteNna-/'大'がある。

[4] 形容詞を名詞化する接尾辞//-sa//が接続するときは、語幹末がウ音のク活用形容詞は逆行同化を起こす。/nuku-sa/'暑'は/nuQsa/になり、/samu-sa/'寒'は/saQsa/になる。

[5] 九州方言学会編(1991：206)に、福岡県の形容詞カ・イ語尾併用地域で、「オイシューニコサエチ」（発表者注：「おいしく作って」の意か）という例が示されている。

[6] 茂木俊伸氏（熊本大学）によるご教示で、徳島県庁が作成した動画「徳島は宣言する VS 東京」でも、同様に「形容詞連用形＋ニ」がみられることがわかった。以下に全用例を示す。

a. 【結果】日本中の着物をアオーニ染めて「ジャパンブルー」って言われた阿波藍。
b. 【結果】よその県をウラヤマシーニ思うたり、都会がええと思うて、若いもんがようけ出ていってしもた。
c. 【結果】こんまい子からとっしょりまで、ナカヨーニ暮らしていけるだろ。
d. 【結果】もっとほの値打ちをオーキーニ育てようと決めたんじゃ。
e. 【ナル】東京でおったら、なんやら気持ちはサビシーニなるんちゃうじゃろか。

[7] 同談話内の男性（1912（明治 45）年生）の形容詞連用形の文は全 2 例で、「スクナーナッタケンド」（少なくなったけれど）〈140A p.235〉と「形容詞連用形＋ニ」を用いていない文のみを用いている。

4. 格

4.1. 一覧

平方言の格助詞を一覧にして、以下に示す。

名称	形式	統語機能	意味
主格	=ga、=no	主語の標示	無標[1]：動作主 受動：被害者
属格	=ga、=no	名詞の修飾	所有、所属、属性
対格	=ba	直接目的語の標示	他動詞文の対象
与格	=ni	間接目的語の標示	無標：着点、受け手、変化の結果、目的地、場所、時点 受動：動作主 使役：動作主（被使役者）
所格	=de		空間、道具、手段、時間量、原因
奪格	=kara		無標：起点、経路、手段 受動：動作主
共格	=to		共同相手
比較格	=jori		比較対象
限界格	=made		限界点

4.2. 主格/=ga/、/=no/

主格は、/=ga/もしくは/=no/で表される。/=no/は/=N/という異形態ももつ。他動詞文の〈動作主〉、自動詞文の〈動作主〉、〈変化主〉、形容詞や名詞述語の〈状態主〉を表示する。これらのものを「主語」と呼ぶ。

(202) /=ga/

a. 【他動詞文】なんなんば　してくって　ワ<u>ガ</u>　飲んぼれよ
（何々をしてくるから、あなたが飲んでいろよ）

b. 【他動詞文】すーごちゃーとなら　ワガ<u>ガ</u>　すーごちゃーごて　せれば
（したいのなら、あなたがしたいようにすれば）

c. 【他動詞文】タローガ　雨ち　いよったよ（太郎が雨って言っていたよ）

d. 【他動詞文】センセーガ　てがんば　かっとちたい
（先生が手紙を書くんだって）

e. 【自動詞文】明日わ　アメガ　ふー（明日は雨が降る）

f. 【形容詞文】ンーガ　うれしかごちゃーとよな（あなたが嬉しそうだよな）

g. 【形容詞文】アーガ　さっかろよなー（あいつが寒いだろうな）

g. 【名詞述語文】イマガ　いっぱん　しやわせよー（今が一番幸せだよ）

(203) /=no/

a. 【自動詞文】ワノ　いってけよ（お前が行ってこいよ）

b. 【自動詞文】アメン　ふっかもしれんねー（雨が降るかもしれないね）

c. 【自動詞文】とひとったら　サッカッノ　こたゆっねー
（年を取ったら寒いのがこたえるね）

d. 【形容詞文】明日から　もー ヒマノ なかっよ（明日からもう暇がないよ）

/=no/は、他動詞文の主語では用いられない[2]。平方言では、以下のような文で、/=no/を用いて主格を表すことはできない。

(204)　タロー{ガ／*ノ}　机ば　壊した（太郎が机を壊した）

主格を助詞がない形式でも表すことは稀なようである。以下のような文もみられるが、ほとんどの場合、助詞を接続させて主語を示す。

(205)　ダーカ　おんに　押された（誰かが私に押された）

動作主ではなく主題を表すようなときには、助詞がないこともある。

(206) a. ワタシ　月曜日じゃけん（（当番の日について）私は月曜日だから）

b. あの　まんま　気の　つーちょらんねば　ワタシ　この世に　おらんとよ
（あのまま気が付いていなければ、私はこの世にいないのよ）

4.3. 属格/=ga/、/=no/

属格は、接続する名詞の〈所有〉、〈所属〉、〈属性〉を表す。主格の助詞でもある/=ga/と/=no/で表される。/=no/は/=N/という異形態をもつ。

(207) /=ga/

a. いっも　ワガ　じーちゃんと　そがん　いーよったもん
（いつもあなたの祖父ちゃんとそのように言っていたもの）

b. 今も　使おーちゃろ　使おらんちゃろ　ワガ　ことばも　わからんとよ
（今も使っているのだろうか、使っていないのだろうか、私のことばもわからないのだよ）

c. ワガ　え　泊まっていけば（私の家に泊まって行けば）

d. ンガ　ためたい（あなたのためだ）

e. おら　もー　いっも　ソーガ　時にわ　ぐやん　わるなって　行かえんとち
（私はもういつもそんな時には具合が悪くなって行けないんだって）

(208) /=no/

a. ワガトノ　酒ば　飲めよ（あなたのものの酒を飲めよ）

b. ジブンノ　こどんのごて　みじょがー（自分の子どものように可愛がる）

c. インノ 子が　いっぴゃ　んまれっしもた
（犬の子がいっぱい生まれてしまった）

d. ココン　ばーちゃんと　一緒にわ　ならんけど
（ここの祖母ちゃんと一緒にはならないけど）

/=ga/は、代名詞に接続することが多い。それに対し、/=no/は様々な名詞に接続する。

4.4. 対格/=ba/

他動詞文の対象を「目的語」と呼ぶ。その目的語を表す対格は/=ba/で表される。

(209) a. 勝ったなら　ホービバ　あげなたいね（勝ったなら褒美をあげないとね）

b. こん　エーガバ　見ろー（この映画を見よう）

c. セーバ　持ってこんね（セリを持ってこないか）

d. 鯛じゃ　のして　ヒラスバ　しーちょーと（鯛でなくヒラスを好んでいる）

4.5. 与格/=ni/

与格は、間接目的語の標示を行う格である。間接目的語とは、〈着点〉、〈受け手〉、〈変化の結果〉、〈目的地〉、〈場所〉、〈時点〉を表すものである。前述の通り、/=ni/

は、接続する名詞の語末音節が狭母音のとき、縮約を起こすことがある。

(210) a. 【着点】ヒージ　当たった（肘にあたった）
b. 【受け手】あるっぼったら　サルニ　おーて（歩いていたら猿に会って）
c. 【受け手】ウーシ　餌やー（牛に餌をやる）
d. 【変化の結果】イシャニ　なれば　よかったとこれ
（医者になればよかったのに）
e. 【目的地】ビョーインニ　行こや（病院に行こうよ）
f. 【目的地】ウミニ　めがけて　走る（海にめがけて走る）
g. 【目的地】エーキ　行く（駅に行く）
h. 【場所】ゲンカンニ　あるよ（玄関にあるよ）
i 【場所】たっか　オトニ　驚く（高い音に驚く）
i. 【時点】クジニ　待っちょけ（9 時に）

/=ni/は、受動文のとき〈動作主〉を表す。

(211) a. 太郎が　ハナコニ　はなひかけられた（太郎が花子に話しかけられた）
b. 太郎が　イヌニ　どーもせんとに　かんつかれた
（太郎が犬にどうもしないのに噛みつかれた）
c. ヘッパニ　だまさるっ（（私が）嘘に騙される）

それぞれ(211a)「花子が太郎に話しかける」、(211b)「犬が太郎にかみつく」、(211c)「嘘が私を騙す」ことを受動文にしており、その動作主である「花子」と「犬」、「ヘッパ」に/=ni/が接続している。

使役文において、〈動作主（被使役者）〉を/=ni/が表す。

(212)　おら　タローニ　酒ば　飲ませた（私は太郎に酒を飲ませた）

(212)では、「酒を飲む」の動作主は「太郎」であり、それを/=ni/で標示している。

4.6. 所格/=de/

所格の/=de/は、〈空間〉、〈道具〉、〈手段〉、〈時間量〉、〈原因〉を表す。

(213) a. 【空間】わが　イェデ　はいろーとたい　おまえわ
（自分の家で（風呂に）入っているんだ、あなたは）
b. 【空間】ダイガクデ　知りおーたっち　ゆー（大学で知り合ったという）
c. 【道具】マッチデ　火ば　つける（マッチで火をつける）
d. 【手段】コータイデ　はいっちょーと　あんたと
（交替で入っているのだ、あなたと）
e. 【手段】ジブンデ　自分の　ことば　できる　ほーじゃけん
（自分で自分のことをできる方だから）
f. 【手段】ヒトリデワ　脱ぎ着も　さーえん（一人では脱ぎ着もできない）
g. 【時間量】アトデ　そん　うちん　むひめにね（後でその、うちの娘にね）
h. 【時間量】今日わ　ドヨービデ　私も　そこに　行く　日じゃもん
（今日は土曜日で私もそこに行く日だから）
i. 【原因】シャワーダケデワ　ぬくもらん（シャワーだけでは温まらない）
j. 【原因】クスリデ　眠らせらっちょったけん（薬で眠らせられていたから）

4.7. 奪格/=kara/

奪格の/=kara/は〈起点〉、〈経路〉、〈手段〉を表す。/=kara/は/=kaa/という異形態をもつ。

(214) a. 【起点】おら　ウクジマカラ　来たっよ（私は宇久島から来た）
b. 【起点】いっぱん　はひめに　ビールカー　飲もや
（いちばん初めにビールから飲もうよ）
c. 【起点】太郎　オマエカー　ゆえよ（太郎、お前から言えよ）
d. 【経路】アッチカー　来たよ（あっち（の道）から来た）
e. 【手段】長崎にわ　バスカー　来たよ（長崎にはバスで来た）
f. 【手段】こまかっの　無かてん　コレカー　お願いします
（こまかいのが無いので、これ（一万円）でお願いします）

この/=kara/は、「単純接続」の/-te/のあとにも接続し、〈起点〉を表す。

(215) a. ヒャッテカー　上がったー　どひたも　なあ　よー　なかごちゃーとじゃん

（（お風呂に）入ってから上がったのどうしたの（とするの）もなあ、良くないようなものだよ）

b. じゅーじ　近く　ナッテカー　つれらって　いったっよ
（10 時近くになってから、（病院に）連れられて行ったのよ）

/=kara/は、受益表現であるテモラウ文の動作主も表す。このテモラウ文は、共通語において、「ニ」と「カラ」が交代可能な文と不可能な文がある。

(216) a. タローカー　てがせしてもろた（太郎｛に／から｝手伝ってもらった）
b. タローカー　教えっもろた
（太郎｛に／から｝教えてもらった）
c. センセーカー　来てもろた（先生｛に／*から｝来てもらった）
d. どしてん　行かえんてん　トモダチカー　代わりに　いてもろた
（どうしても行けないから、友人｛に／*から｝代わりに行ってもらった）
e. 時分の　よかとき　アメカー　降ってもらえば　よかばって
（時分の良いとき、雨｛に／*から｝降ってもらえたらいいのだけど）

(216a,b)など、当該行為の動作主が〈起点〉と捉えられるものには、共通語で「カラ」が使用できる。平方言では〈起点〉と捉えにくいものでも、テモラウ文に/=kara/が広く用いられている。

この傾向は、受動文での動作主でもいえる。平方言では/=ni/でも受動文の〈動作主〉を表すのに対し、/=kara/でも〈動作主〉を表すことができる。

(217) a. ウラシマタローカー　亀わ　たひけられた
（浦島太郎｛に／から｝亀は助けられた）
b. カメカー　感謝された（（浦島太郎は）亀｛に／から｝感謝された）
c. コドモタチカー　尊敬されちょー（息子たち｛に／から｝尊敬されている）
d. カーチャンカー　留守番しちょけち　頼まれた
（母親｛に／から｝留守番を頼まれた）
e. 泥棒　ひゃっちょって　取ろーとこば　ケーサツカー　捕まえられた
（泥棒が物を盗んでいるところを、警察｛に／*から｝捕まえられた）
f. あとで　食おだいち　とっちょったら　タローカー　食われた

（大事にとっていたケーキを、太郎｛に／*から｝食べられた）

g. アメカー　降られっ　困っちょー（雨｛に／*から｝降られて困っている）

/=kara/が、使役文の動作主を表す例もみられた。ただし、インフォーマントによって容認度が異なるため、当該方言にとって普通に用いられていない可能性がある。

(218)　孫カー　皿ば　洗わすだい（孫に皿洗いをさせようよ）

4.8. 共格/=to/

共格の/=to/は、〈共同相手〉を表す。

(219) a. アンタドント　同級生の　あん　子の　娘さんが
（あなたと同級生のあの子の娘さんが）

b. ××おばさんわ　そこん　××ネーサント　おなどひじゃけん　いっこ　おーかと（××おばさんはそこの××姉さんと同い年だからひとつ多いのだ）

c. おんなじ　テト　おんなじ　アシト　すっちゃーもん
（同じ手と同じ足と（を使って）するんだもの）

4.9. 比較格/=jori/

比較格/=jori/は、〈比較対象〉を表す。

(220) a. まだ　うちん　マゴダヨリモ　年下じゃな
（まだうちの孫たちよりも年下だな）

b. あん　イエヨリ　おーがろん　いえん　ほーが　ふるかっよ
（あの家より私どもの家の方が古いんだよ）

c. コイヨラ　たいそ　飲むもんじゃなかったい
（これよりはたくさん（酒を）飲むものではないんだよ）

d. ヒトヨラ　ふとかてん（（普通の）人よりは大きいから）

4.10. 限界格/=made/

限界格/=made/は、〈限界点〉を表す。

(221) a. そがん　ユーマデワ　どーも　なか（そのように言うまでは、どうもない）

b. くじから　サンジハンマデネ（9 時から 3 時半までね）

c. パンツマデ　履かせっもらおっ（パンツまで履かせてもらっている）

---

[1] 「無標」とは、森他編(2015)において「有標の-ˢase-'CAUS'や-ʳare-'PASS'によらないヴォイス。能動（active）に近い」と述べられている。

[2] このような傾向は、鹿児島県の甑島里方言にもみられることが、同方言を記述した森他(2015：92-94)にも報告されている。

5. 単文

5.1. ヴォイス

5.1.1. 受身

5.1.1.1. 直接受動文：まともの受身

「受身」は、動詞語幹に派生接尾辞の/-(r)are-/を接続することで表す。2 項動詞では能動文の「A が B を V する」と「A が B に V する」の 2 種類がある。平方言では、どちらも「B が A｛に／から｝V される」になる。

(222) 【2 項動詞】「A が B を V する」→「B が A｛に／から｝V される」

a. 太郎が　次郎カー　叩かレタ（太郎が次郎から叩かれた。）

b. 太郎が　先生カー　褒めラレタっちたい

（太郎が先生から褒められたってよ）

c. へっぱっぱっかー　ゆーてん　みんなカー　嫌わルっとたい

（うそばっかり言うから、みんなから嫌われるんだよ）

(223) 【2 項動詞】「A が B に V する」→「B が A｛に／から｝V される」

a. 太郎が　犬ニ　どーもせんとに　かんつかレタ

（太郎が犬に何もしていないのに噛みつかれた）

b. 太郎が　花子ニ　はなひかけラレタ（太郎が花子に話しかけられた）

c. 太郎が　先生カー　好かレチョー（太郎が先生から好かれている）

次に、3 項動詞の例を示す。

(224) 【3 項動詞】「A が B を C に V する」→「C が A から B を V される」

a. 山田さんが　知事カー　感謝状ば　贈らレタっちた（山田さんが知事から感謝状を贈られたってよ）

b. 太郎が　花子ば　世話さレタ（太郎が（次郎から）花子を紹介された）[1]

(225) 【3 項動詞】

「A が B に C を V する」→「C が A から B に V される」

感謝状が　知事カー　山田さんに　贈らレタっちた（感謝状が知事から山田さんに贈られたってよ）

平方言での非情物主語の文を示す。このとき、非情物主語は「ニヨッテ」で示されている。

(226) 【非情物主語】

a. 業者ニヨッテ　よそがたん　どこかに　うしてラレタ
（（大量のゴミが）業者によって、よその方のどこかに捨てられた）

b. 紫式部ニヨッテ　書かレタ（（『源氏物語』は）紫式部によって書かれた）

5.1.1.2. 間接受動文

5.1.1.2.1. 持ち主の受身

「持ち主の受身」とは「受動文のガ格が、対応する能動文のヲ格（ニ格）名詞を修飾するノ格（所有者）であるもの」(日高 2002：3)をさす。

(227)　太郎が　次郎{ニ／カー}　頭ば　こずかレタ（太郎が次郎に頭を叩かれた）

(227)は、能動文「次郎が太郎の頭を叩いた」という文が、受動文で「太郎が次郎に頭を叩かれた」となる現象である。平方言では、動作主の「次郎」を「ニ」でも「カラ」（カー）でも示せる。以下に、その他の用例を示す。

(228) a. 太郎カー　おーが　妹ん　叩かレタ（太郎から俺の妹が叩かれた）

b. 太郎カー　花子が　かんげば　切らレタ
（太郎から花子が髪の毛を切られた）

c. 花子が　太郎カー　人形の　かんげば　切らレタっちた
（花子が太郎から人形の髪の毛を切られたってよ）

d. 太郎が　次郎カー　自分の　着ちょー服ば　破らレタ
（太郎が次郎から自分の着ている服を破られた）

e. 太郎が　次郎カー　寝ちょーとこば　見らレタ
（太郎が次郎から寝ているところを見られた）

f. 壁ニ　かっつらかさレタ（壁に落書きされた）

5.1.1.2.2. 第三者の受身

「第三者の受身」とは「受身のガ格が、対応する能動文の格成分ではあり得ないもの」

(日高 2002：3)をさす。上村(1983)は、当該地域も含む九州方言では、本項で述べる「第三者の受身」が新しい言い方であることを述べている。以下に、引用する。

(229) 上村孝二(1983：26)

> 自動詞の受動態は比較的新しい言い方で本来はそれを忌避して能動態だけを使っていたと推定される。日向・両肥・薩偶などがめだつ。「奥さんに、寝られて…」に対しては、奥サンガネオッテ、～ワズローテ、～ワルシテ、～ダレテなどを好み、「雨に降られた」には雨ニ逢ウタ、雨ガ降ッタ、雨ニ降リコマレタ等々の表現を喜ぶ。

平方言でみられる「第三者の受身」の用例を以下に示す。

(230) a. 太郎わ　雨{ニ／カー}　降らレッ　ぬれくさった（太郎は雨に降られて、ずぶ濡れになった）

b. 大声で　泣かレッ　困ったっちた（（花子は子どもに）大声で泣かれて困ったってよ）

(230a)の能動文は「雨が降った」であり、「雨が太郎に降った」ではない。平方言では、能動文でガ格の「雨」を「ニ」でも「カラ」（カー）でも示せる。

5.1.1.3. 「カラ」の意味の広さ

砂川(1984：75)では、日本語共通語で「ニ」と「カラ」がどちらも使用できるのは、述語の動詞が「起点」および「動作主」の 2 つの項をとるときであると述べている。「「起点・動作主」を表す項の、「起点」の方が強く意識された時に「カラ」が用いられ、一方の「動作主」の方が強く意識された時に「ニ」が用いられるようになる」と述べている。

(231) 日本語共通語の「ニ／カラ」の使用

a. 彼はみんな {に／から}　信頼されている。

b. 彼は車 {に／*から} はねられた。　(砂川 1984：71)

福嶋(1992：85)では、新潟方言の格助詞「カラ」が「起点」と考えられないときにも使用されることを述べている。以下は、福嶋(1992)で示された新潟方言の用例である。

(232) 新潟方言（福嶋 1992：85）

a. このたびはたくさんの父母の皆さんから来ていただきましてありがとうございました。

b. この制度は、……本学の学生とともに県民の方々から本格的に学習していただこうとするものです。

九州方言において、「カラ」の用法が広いことは『方言文法全国地図』（以下、GAJ）をみてもわかる。以下に、GAJ において、共通語で「ニ」が用いられる文に「カラ」が用いられている地域を列挙する。

(233) GAJ で確認できる「カラ」が用いられている地域

a. 第 26 図「息子に（手伝いに来てもらった）」
青森県、秋田県、山形県、宮城県、新潟県、長野県、長崎県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県、

b. 第 27 図「犬に（追いかけられた）」
山形県、山口県、長崎県、熊本県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県

c. 第 29 図「船で（来た）」
長崎県、熊本県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県、

d. 第 30 図「1 万円で（お願いします）」
青森県、秋田県、山形県、岩手県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、

九州方言では、共通語の「ニ」の用法に対して、「カラ」が広く用いられていることがわかる。

日高(2002)も、熊本県の高校生を対象に、同様の調査を行っている[2]。その結果、創造的行為を表す動詞による受動文[3]、第三者の受身の文、第三者の受身的なテモラウ文では「から」が許容されないことを述べている。

平方言では、「第三者の受身」でも「カラ」が用いられていることがわかる。

(234) a. 【まともの受身：物理的働きかけ】浦島太郎カー　亀わ　たひけラレタ
（浦島太郎から亀は助けられた）

b. 【まともの受身：感情の動き】亀カー　感謝さレタ（亀から感謝された）

c. 【まともの受身：感情の動き】子どもたちカー　尊敬さレチョー

（（××さんは）子どもたちから尊敬されている）

d. 【まともの受身：2 者間のやりとり】
かーちゃんカー　留守番しちょけち　頼まレタ
（（太郎は）母親から留守番をしておけと頼まれた）

e. 【持ち主の受身：物理的働きかけ】犬カー　かんつかレタっち
（犬から噛みつかれたって）

f. 【持ち主の受身：物理的働きかけ】財布ば　すりカー　盗まレタ
（財布をスリに盗まれた）

g. 【第三者の受身】雨カー　降らレテ　ぬれくさった
（雨に降られてずぶ濡れになった）

(235) a. 【テモラウ：2 者間のやりとり】太郎カー　教えっもろた
（太郎から教えてもらった）

b. 【テモラウ：第三者の受身的な用法】
時分の　よかとき　あめカー　降ってもらえば　よかばって
（時期のいいときに雨から降ってもらえたらいいけど）

なお、愛宕(1992)は長崎市方言で、「場所」や「経由・手段」を表す格助詞に「から」が使用されることを述べている[4]。

(236) 長崎市方言（愛宕 1992：238）

a. 【場所】ウチノ　ミセカラ　ノンデ　クレロー（私の店で（ジュースを）飲んでくれ）

b. 【手段】ナマカラ　タブッ　トヨ（（鰯を）生のままで食べるのよ）

これらの例は、平方言では確認できていない。平方言では「起点」がもとにあるなかで、受動文の動作主を表していると考えられる。

5.1.2. 可能

平方言の可能形式は、「ヤユル」（/-(j)aje-/）と「ラルル」（/-(r)are-/）が用いられる。

(237) a. 【ヤユル】どがんな　じーでん　読まユー

（どんな（難しい）字でも読むことができる）

b. 【ラルル】船ば　たのじょったてん　すぐ　乗らレタ

（船を予約していたから、すぐ乗ることができた）

(237a)は、「自分の持っている能力によって、どんな難しい字でも読むことができる」ということを表している。(237b)は、「事前に船を予約していたという状況によって、すぐ乗ることができた」ということを表している。(237a)「ヤユル」は「能力可能」であり、(237b)「ラルル」は「状況可能」である。以下に、用例を示す。

(238) 【ヤユル】

a. 太郎わ　あひが　はやかてん　走らユイ

（太郎は足が早いから、（100 メートルを 11 秒で）走れる）

b. 力の　のして　ドアの　開けヤエン（力がなくて、ドアが開けられない）

c. 島に　きヤエン（（太郎はすぐに）宇久島に来れない）

d. いっも　稽古しちょーてん　さーユーだい

（いつも稽古をしているから、（何キロでも走ることが）できる）

(239) 【ラルル】

a. よそわひかけん　飲まレン（（この水は）汚くて飲めない。）

b. ヘルパーさんわ　うけラレンごと　なっちょーとち

（ヘルパーさんは（お茶などを）受け取れないようになっているのって）

c. 天候が　悪かてん　こラレン

（天候が悪いから（船が出ないので、太郎は宇久島に）来れない）

d. 休んじゃてん　なんでん　さール（（今日は）休みだからなんでもできる）

日本語共通語では、「私は英語を話す」を「可能」で表したとき、「私には英語が話せる」になるような格の交替が起こる。平方言でもこのような格の交替がみられる。

(240) a. あのひと{φ／ニ}　読まエンとに

（（（こんな難しい漢字、頭のいい）あの人に読めないのに）

b. なんの　{オレ／ワガ／オラ／オーニ}　読まユーかよ

（どうして私に読めるんだよ）

(240a)は、無助詞と/=ni/の交替が可能であることを示す。(240b)は、「オレ」が無助詞であり、「ワガ」が/=ga/、「オラ」は/=wa/、「オーニ」は/=ni/が接続することを示す。

5.1.3. 自発

「自発」とは「通常は動作主体の意志の発動によって行う／行わないはずのある動作が、動作主体の意志とはかかわりなく、あるいはときにそれに反して、起こる（肯定文の場合）／起こらない（否定文の場合）」(渋谷 2006 : 48)ものをさす。平方言は「ラルル」での「自発」は、「思い出す」などの知覚に関する限られた動詞にみられる。

(241)　昔の　もんば　見れば　まえん　ことが　思い出さルーなー
（昔のものを見ると、昔のことが思い出されるなあ）

そのほかの動詞には、接辞をつけない形式が用いられる。

(242) a.　となりー　人ん　答えの　{見えた／*見らレタ}
（（テストで）隣の人の答えが見えた）
b.　うまかそーじゃったけん　おもわひ　{くたよ／*食わレタ}
（（ケーキが）美味しそうだったから、思わず食べてしまった）
c.　にごなかごちゃったてん　おもわひ　{のーだ／飲まえた／*飲まレタ}
（（薬が）苦くなかったから、思わず飲めた）
d.　のんなち　言われたばって　おもわしらひ　{飲んだ／*飲まレタ}
（（医者から酒は）飲むなと言われたけれども、思わず飲んでしまった）

5.1.4. 尊敬

伝統的な平方言では「尊敬」の/-(r)are/を用いない[5]。以下の用例は、どちらも共通語の形式とも考えられるものである。この形式を、インフォーマントは「良かことば」という対外的な場面で用いる形式と述べている。「良かことば」は、同じ地域の者どうしでは使わない形式である。

(243)　こラレタ／こらした（（先生が）いらっしゃった）

インフォーマントの内省では、平方言では伝統的に使用される敬意表現はなく、もし文

に敬意を付加したいのならば、「良かことば」を使うしかないとのことである。

5.1.5. 使役

「使役」は、動詞語幹に動詞派生接尾辞/-(s)ase-/を接続させて表す。使役の動作主は/=ni/で表す。以下に他動詞文での「使役」の用例を挙げる。

(244) a. おら　太郎に　酒ば　飲ませタ（私は太郎に酒を飲ませた）
b. 太郎に　カレーば　食わセレよ（太郎にカレーを食わせろよ）
c. あんまー　のーじょーてん　飲ませンジャッタ
（（酒を）あまりに飲んでいるので、（これ以上）飲ませなかった）
d. 太郎に　ゆーめひば　作らスー（太郎に夕飯を作らせよう）
e. おまえに　におた服ば　自分に　もけサセンか
（あなたに似合った服を自分に見つけさせないか）

(244a)を例に挙げると、「私」が使役者となって「太郎が酒を飲む」を行っていることを、「私は太郎に酒を飲ませる」という文にしている。

自動詞文では、動作主を/=ba/で表す。ただし、動作の対象がある場合は、動作主が/=ni/で表される。

(245) a. おみなっ前で　おーば　踊らセンか（皆の前で私を躍らせないか）
b. 太郎に　運動場ば　走らセレ（太郎に運動場を走らせろ）

(245b)は「運動場を走る」のように、動作の対象がある。その対象の「運動場」が/=ba/で示されている。

また、「使役」と「受身」を含めた文には、以下のようなものがある。

(246)　太郎は　次郎かー　酒ば　飲まサレタ（太郎は次郎に酒を飲まされた）

5.2. アスペクト

5.2.1. 進行

「進行」は、動詞語幹に動詞派生接尾辞/-wor-/を接続させて表す。/-wor-/は/-gor-/、/-bor-/、/-mor-/などの異形態をもつ。「進行」とは、当該動作が終了限界達成前の状態で続いて

いることを示す。以下は、すべて目の前で起こっていることを述べた文である。

(247) a. 【主体動作動詞】こどんが　あるっゴイよ（子どもが歩いている）
b. 【主体動作客体変化動詞】大根ば　きーローよ（大根を切っている）
c. 【主体変化動詞】てれびん　ころんボイよ（テレビが倒れている）
d. 【主体変化動詞】死んゴー（死につつある）

/-wor-/は反復や習慣を表すときにも用いられる。

(248) a. みゃーひ　本家まで　あるっゴーとよ（毎日本家まで歩いているのよ）
b. こら　何回も　みーロンね（これは何回も見ているね）
c. くりかえしくりかえし　あーローちゃなか
（（再放送のドラマを見て）繰り返し繰り返しやっているのではないか）

「直前」を表すときは、動詞語幹に/=ti#si-wor/'としている'を接続させて表す。

(249) a. 【主体動作動詞】とちとち　あゆんチ　ショーごちゃいよ
（（赤ちゃんが）歩こうとしているようだよ）
b. 【主体動作客体変化動詞】きーチ　シヨイよ
（（大根を）切ろうとしている）
c. 【主体変化動詞】ころんチ　シヨイよ（（花瓶が）倒れようとしている）

「直前」を表すときは、動詞語幹に/kakar-tjor-/を接続する形式も用いられる。

(250)　金魚ん　死んカカッチョイよ（金魚が死にかかっているよ）

5.2.2. 結果継続

「結果継続」は、動詞語幹に動詞派生接尾辞/-tjor-/を接続させて表す。「結果継続」とは、当該動作が終了限界達成後の状態が続いていることを表す。

(251) a. 【主体動作動詞】ともだっの　くっとば　まっチョーとよ
（友達が来るのを待っているのだよ）
b. 【主体動作客体変化動詞】みひこ　きっチョー（（髪を）短く切っている）
c. 【主体変化動詞】氷ん　溶けチョイよ（氷が溶けているよ）

この/-tjor-/は、結果の残存も表す。

(252) a.　布団な　あひけ　なおひチョーとよ（布団はあそこにしまってあるのだよ）

b.　火の　消えチョラン（火が消えていない）

/-tjor-/に「非過去」の/-u/以外の屈折接尾辞が接続している例を挙げる。

(253) a.　【仮想/-oo/】かーちゃんの　せんたっもんば　へーチョロー

（母ちゃんが洗濯物を干しているだろう）

b.　【過去/-ta/】ほん　時わ　もー　寺にも　行かえんじ　ねチョッタ

（その時はもう寺にも行くことができずに寝ていた）

また、以下は、調査時に何度か用いられた形式を、改めてインフォーマントに確認したところ、内省では使用できない文と判断されたものである。参考として、ここに示す。

形容詞に/-tjor-/が接続する文が、稀にみられる。

(254) a.　/waru-ka-r-tjor-u/'悪い状態でいる' :

わたしろんの　年輩が　一番　わるかっチョーとよ

（わたしたちの年輩（世代）が一番悪い状態でいるとよ）

b.　/joka-r-tjor-u/'いい状態でいる' :

××おばさんの　長崎で　してきて　よかっチョーとたい

（××おばさんの（葬式を）長崎でしてきていい状態でいるのだ）

「進行」の/-wor-/に「結果継続」の/-tjor-/が接続していると考えられる文が稀にみられる。

(255) a.　/tukai-joQ-tjo-ar-u/'使っている' :

かーちゃんども　そがな　ことば　使いヨッチョアイよ

（母ちゃんもそんな言葉を使っているよ）

b.　/juw-oQ-tjor-u/'言っている' : ユオッチョイよ（言っているよ）

5.3. モダリティ

5.3.1.　モダリティの分類

モダリティを「対事的モダリティ」と「対人的モダリティ」に分け、記述を行う。対事

的モダリティは、さらに推量表現や様態表現、伝聞表現などの「認識的モダリティ」と、意志・勧誘表現や希望表現などの「義務的モダリティ」に分ける。

5.3.2. 認識的モダリティ

5.3.2.1. 推量表現

推量表現は、用言に「仮想」の接辞/-oo/を接続する形式のほか、コピュラ動詞/=zjar-/に「仮想」の/-oo/を接続した形式が用いられる。

(256) 動詞

a. 【語幹-oo】カコー（書くだろう）

b. 【コピュラ動詞/=zjar/+/-oo/】カッジャロー（書くだろう）

(257) 形容詞

a. 【/語幹-ka/+/-r-/+/-oo/】明日わ　ぬっかロー（明日は暑いだろう）

b. 【コピュラ動詞/=zjar/+/-oo/】明日わ　ぬっかジャロねー

（明日は暑いだろうね）

他の屈折接尾辞が接続した形式は、以下の通りである。「用言+/-oo/」の形式と「コピュラ動詞/=zjar/+/-oo/」のどちらの形式も用いられるものは併記する。

(258) a. 【過去】ぬっかっタロー／ぬっかっタジャロー（暑かっただろう）

b. 【否定】書かンジャロー（書かないだろう）

c. 【過去否定】書かンジャッタロー（書かなかっただろう）

「疑問」の接語/=ka/と共起する例を示す。

(259) a. 半分な　意識不明に　なっちょったっちゃなかローカね

（半分は意識不明になっていたのではないだろうかね）

b. 私わ　こっち　座って　なんの　もの　ゆオーカよ

（私はこっちに座って、どうして物が言えるだろうかよ）

(259a)は事態に対する話者の疑いを表し、(259b)は反語を表す。

推量表現は、上記の形式のほかに、/=ka=mo#sire-N/'かもしれない'も用いられる。類似した形式に/=ka=mo#wakar-a-N/'かもわからない'がある。両形式に、意味の区別はないと考え

られる。また、/sire-N/を省略した/=ka=mo/だけの使用もみられる。

(260) a. 明日わ　雨ん　ふーカモシレンばい（明日は雨がふるかもしれない）
b. ××さんも　くーカモね（××さんも来るかもね）
c. しずかカモワカラン（静かかもわからない）

また/=haH/'はず'も用いられる。コピュラ動詞/=zjar-/に接続して、形容動詞と同様の活用をする。コピュラ動詞に接続せず、終助詞が/=haH/に直接接続することもある。

(261) a. 私ば　見れば　ね　あんたー　声ん　ずっけん　なんか　ゆーハヒジャばってんなーち　思いながら（私を見るとね、あなたは声がでるから何か言うはずだけれどなと思いながら）
b. ××ちゃんわ　しっちょーハヒジャばってなー　ちゅーたけど
（××ちゃんは知っているはずだけれどなって言ったけど）
c. 土曜日にわ　××ちゃんも　きよーハヒよ
（土曜日には××ちゃんも来ているはずだよ）

5.3.2.2. 様態表現

様態表現には、/goto/が用いられる。/goto/は共通語の「如し」に由来する形式である。/goto/は、それ自体では副詞節を作る形式である。その/goto/に存在動詞の/ar-/'ある'が接続して、/gotjar-u/という述語形式を作る。「様態」を表す/goto/は、名詞に属格の/=no/を接続させた形式か、用言の終止連体類の屈折接尾辞につづく。/goto/は/gote/や/goQ/という異形態をもつ。

(262) a. 【名詞+/=no/】自分の　子どんのゴテ　みじょがー
（自分の子どものように可愛がる）
b. 【動詞】綿ん　みんば　吸い込んゴテ　どんどん　覚えた
（綿が水を吸い込むように、どんどん覚えた）
c. 【動詞】味が　染むゴト　炊きつめた（味が染みるように煮込んだ）
d. 【動詞】話し出せば　もー　わからんゴッ　ないもんな
（話し出すともうわからないようになるものね）
e. 【形容詞】店に　売ってよかゴテ　じょーし　でけた

（店に売っていいくらい、上手にできた）

「様態」の意味について、森山(1995：493)で示されている論理関係をもとに整理する。

(263) a. 【推量的な意味：不明関係】らいおんのゴチャー　もんの　見えちょーばい
（ライオンのようなものが（テレビで）見えているよ）

b. 【比喩的な意味：不一致関係】べべんこんゴチャー　犬ねー
（牛のような犬だね）

c. 【例示的な意味：包含関係】わんのゴチャー　男わ　おらん
（あなたのような男はいない）

/gotjar-u/は、以上の「様態」のいずれの意味でも用いられている。これは主節の述語でも同様である。

(264) a. 降ったゴチャンねー（（雨が）降ったようだね）

b. やさしかったゴチャーもんねー（優しかったみたいだものね）

c. なんでん　しっちょー　学者んゴチャー（何でも知っている学者のようだ）

d. 肌が　まっしろして　ゆっのゴチャーもんねー
（肌が真っ白くて雪のようだものね）

そのほか、共通語の「そうだ」や「ようだ」に相当する/=soo/や/=joo/を用いることがある。/=soo/は、/=zjar-/に接続し、形容動詞と同じ活用をする。/=joo/も同様の活用をすると考えらえるが、連用修飾用法の/=joo-ni/'ように'の形式で専ら使われている。インフォーマントの内省によると、この 2 つの形式は、伝統的な平方言でなく、近年になって共通語の形式を用いているとのことである。

/=soo=zjar-/'そうだ'には、以下の例がある。コピュラ動詞に接続せず、終助詞が/=soo/に直接接続することもある。

(265) a. きっかソージャねー（体調が悪そうだね）

b. 太郎わ　体格の　よかてん　あひの　はやかソージャねー
（太郎は体格が良いから足が速そうだね）

c. んまかソーナ　パンば　いぇらんだ（美味しそうなパンを選んだ）

d. きのどっかソーニ　しちょー（気の毒そうにしている）

e. 雨ん　ふーソーよ

/=joo-ni/'ように'の例を以下に挙げる。

(266) a. なかなか　それが　思うヨーニ　いかんわけよ
（なかなかそれが思うようにいかないわけだよ）
b. すもーとんのヨーニ　たーそ　きちょー（相撲取りのように大層着ている）
c. 自分の　おもたごて　なーヨーニ　せれば　わーかもんねー
（自分の思ったようになるようにすれば悪いもんね）

5.3.2.3. 伝聞表現

伝聞表現には、/rasi-/'らしい'が用いられる。/rasi-/は形容詞と同じ活用をする。以下に、用例を挙げる。

(267) a. もー　色々　大変じゃったラシカばって（もう色々大変だったらしいけど）
b. そて　あの　人が　別れっ　きちょーラヒカね
（そして、あの人が離婚して来ているらしいね）
c. わたしに　食べさすち　魚ば　買いに　いっちょラシカッタったい
（私に食べさせようと魚を買いに行っているらしかったんだよ）

「伝聞」は、「引用」の/=ti/'て'でも表される。/=ti/の前には準体助詞の/=to/が接続することも多い。準体助詞/=to/は、/=Q/という異形態でも用いられる。

(268) a. あめチ　いよったよ（雨って言っていたよ）
b. たろーの　ゆーとん　明日わ　雨ん　ふーチ ゆーおった
（太郎が言うのが明日は雨が降るって言っていた）
c. こん　空模様でわ　明日わ　あめじゃろっチ　たろーが　ゆおった
（この空模様では明日は雨だろうって太郎が言っていた）

この/=ti/'て'が主節で用いられるときは、あとに/=tai/や/=bai/などの終助詞を接続させる。

(269) a. 雨ん　ふーろーとチタイ（雨が降っているんだってよ）
b. 天気予報でわ　明日わ　とても　ぬっかっチバーイ

（天気予報では明日はとても暑いんだってよ）

c. きのーわ　とても　ぬっかったチタ（昨日はとても暑かったってよ）

5.3.3. 義務的モダリティ

5.3.3.1. 意志表現

意志表現は、動詞語幹に「仮想」の接辞/-oo/を接続する形式で表す。「意志」の/-oo/には、終助詞が接続することが多い。接続する終助詞には、/=kai/、/=tai/（=/dai/）がある。

(270) a. 夕方に　なったてん　ニュースどん　ミロカイ
（夕方になったからニュースでも見ようかな）

b. なこごちゃーとっきゃ　気の済むまで　ナコダイ
（泣きたいときは気の済むまで泣こうよ）

この「仮想」の/-oo/は「勧誘」にも用いられる。そのときに接続する終助詞は/=ja/（/=jai/）、/=ka/、/=de/がある。

(271) a. 朝までも　サワゴヤー（朝までも騒ごうよ）

b. 雨ん　ふーろーてん　もー　いっとわ　ヤメチョコヤイ
（雨が降っているから、もう行くのはやめておこうよ）

c. ビールどん　ノモカ（ビールでも飲もうか）

d. 一緒に　オロデ（一緒にいようよ）

また「勧誘」には、/-oo/にコピュラ動詞/=zja#na-ka/を接続した形式も用いられる。

(272)　酒どん　ノモジャナカネ（酒でも飲もうじゃないか）

5.3.3.2. 希望表現

希望表現は、動詞の仮想形に、様態表現に用いられる//goto+ar-//の形式が接続する。希望表現での「否定」は、動詞仮想形に//goto#na-ka//が接続する。

(273) a. はよ　よー　ナロゴチャー（早くよくなりたい）

b. まーだ　ハタラコゴチャッタ（まだ働きたかった）

c. どけーも　イコゴッナカ（どこにも行きたくない）

d. 父ちゃんたちん　ときゃ　イコゴッナカ　人わ　行かん　イコゴチャ　人わいーたっちゃろだい（お父さんたちの時は行きたくない人は行かない、行きたい人は行ったんだろうよ）

e. 結婚　スゴチャー（結婚したい）

f. 酔っぱらわんごて　スーゴチャー（酔っぱらわないようにしたい）

平方言では、動詞仮想形に/gotjar-u/の形式が主に用いられている。ただし、稀に/-itaka/'たい'の形式もみられることがあった。

(274) a. アイタカッバイネー（会いたいんだね）

b. トランプば　シタカ（トランプをしたい）

上記の用例は、調査時に動詞仮想形に/gotjar-u/の形式である「アオゴチャー」（会いたい）と「スーゴチャー」（したい）と併せて回答されたものである。

5.3.3.3. 禁止表現

禁止表現は、動詞語幹に「禁止」の/-(r)una/を接続して表す。「禁止」の/-(r)una/には、終助詞が接続することが多い。接続する終助詞には、/=jo/、/=ne/がある。

(275) a. ノンナヨ（飲むなよ）

b. ノンナネ（飲むなよ）

この/=jo/と/=ne/は、待遇によるちがいである。禁止表現での/=ne/は、自分より年下や目下の相手に対して用いる形式である。

5.3.3.4. 当為表現

当為表現には動詞語幹に/(-a)-neba/、/(-a)-na/が用いられる。当為表現には終助詞/=ne(e)/や/=tai/が接続する。

(276) a. くろ　ならんうち　我が家に　モドラネバ
（暗くならないうちに我が家に帰らなければ）

b. そら　ひとっ　大将ば　キメッモラワネバネー
（それはひとり大将を決めてもらなければね）

c. あひたから　はよ　オキラナタイ（明日から早く起きないとね）

5.3.4. 対人的モダリティ

5.3.4.1. 終助詞

対人的モダリティは、終助詞を中心に記述を行う。平方言の終助詞には、以下のものがある。

(277) a. 情報を提示する：/=jo/、/=tai/、/=bai/
b. 同意や確認をする： /=ne(e)/、/=na(a)/
c. 情報を尋ねる：/=ka/、/=kai/

/=jo/と/=tai/、/=bai/は、いずれも聞き手に情報を提示するときに用いられる。

(278) a. こん　前わ　十日　あまーも　おったヨ（この前は十日あまりもいたよ）
b. 病院にな　ICU や　なんやにな　いっとらんとよ　ちゅーたタイ
（病院には ICU や何かには行ってないのよって言ったよ）
c. やっぱ　そん　時な　頭ん　おかしゅ　なったバイねーち
（やはりその時は頭がおかしくなったよねって）

/=jo/は/=ka/に接続ができるため疑問文にも用いられるが、/=tai/や/=bai/は平叙文での使用に限られる。

(279) a. 飲まゆっとカヨ（飲むことができるのかよ）
b. のーだっカヨ（飲んだのかよ）

/=ne(e)/、/=na(a)/は、聞き手への同意や確認をするときに用いられる。

(280) a. 元気で　よかったネ（元気でよかったね）
b. 今　帰って来たナー（今帰って来たな）

どちらも同様の使用ができるが、使用頻度は/=ne(e)/の方が高いようである。平方言の/=ne(e)/は、以下のような文で用いられる。

(281) a. 迎えん　来たけん　のーてネ（迎えが来たから乗るからね）

b. よべわ　太郎が　遊びきたネ（昨夜は太郎が遊びに来たね）

c. 今　どけ　おーとネ（今どこにいるのよ）

d. 学生のときわ　勉強しちょった方がよかネ
（学生のうちは勉強しておいた方がいいね）

e. 飲みもんば　来るとき　こっけネ（飲み物を来るときに買って来いよ）

インフォーマントの内省では、(281b)は隣に太郎がいる時に出ないと/=ne(e)/は使用できないとのことであった。話し手は聞き手が答えを知っている場合に/=ne(e)/を用いている。ただし、自問自答でも使用できるため、必ず聞き手を必要とするわけではない。

(282) a. おら　まーだ　勉強すーごちゃんネー（私はまだ勉強したいな）

b. 山田さんの　孫じゃったっぱいネ
（（（独り言で）あの人は）山田さんの孫だったんだね）

なお、/=na(a)/も、独り言で使用できる。以下は、独り言を述べている文である。

(283) a. 今日わ　××ちゃん　いっごんナー（今日は××ちゃん行っているな）

b. 夢じゃったっちゃろか　なんじゃったじゃろかいナー
（夢だったのだろうか何だったんだろうかな）

/=ka/と/=kai/は、聞き手に情報を尋ねるときに用いる。/=ka/は様々な形式に接続するのに対して、/=kai/は仮想形に接続する。

(284) a. ××か　だーかち　ゆーちゃなかっカ
（（名前は）××とか誰とかいうのではないのか）

b. 私の　幻覚じゃったカな（私の幻覚だったかな）

c. ほんなら　あたしん　見た　ひたー　だーじゃったっじゃろカイ
（それなら私が見た人はだれだったんだろうか）

d. また　盆前　きやゆカイね（またお盆前に来ることができるろうかね）

5.3.4.2. 命令に用いる終助詞「ネヨ」

5.3.4.2.1. 問題の所在

平方言では、以下のような文が用いられる。

(285) a. 酒ば　飲まんネヨ（酒を飲まないか）

b. ここば　片付けっくれんネヨ（ここを片付けてくれないか）

c. ぜんば　貸さんネヨ（お金を貸さないか）

共通語の終助詞の承接を考えると、「ヨネ」はあっても「ネヨ」はない。平方言では終助詞「ネ」が様々な形式に接続するのに対し、動詞否定形にしか「ネヨ」は接続しない[6]。

(286) a. 【否定形】酒ば　{飲まんネ／飲まんネヨ}

b. 【禁止形】酒ば　{飲んなネ／*飲んなネヨ}

c. 【過去形】酒ば　{のーだネ／*のーだネヨ}

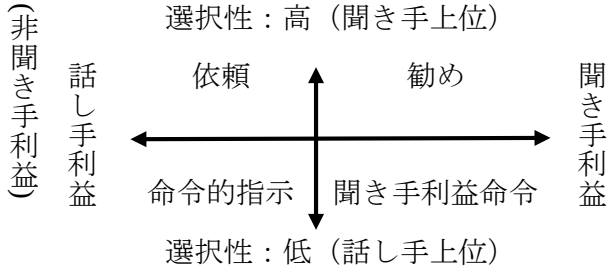
d. 【非過去形】酒ば　{飲んネ／*飲んネヨ}

5.3.4.2.2. 平方言の行為指示表現

5.3.4.2.2.1. 行為指示表現の分類

行為指示表現の分類に、森(2016)で示されている分類を用いる。森(2016:102-106)は、行為指示を「受益者」と「選択性」を基準にして、「命令的指示」、「聞き手利益命令」、「依頼」、「勧め」の 4 つに分類している。「受益者」とは、当該行為によって利益を得る人物のことである。「選択性」とは、当該行為をするか否かを、話し手が聞き手に選択させている度合いである。話し手の強制力が強ければ、聞き手は当該行為をしなければならない。その場合の聞き手の選択性は低いといえる。以下に、森(2016:103)に示されている図を引用する。

(287) 行為指示表現の枠組み



森(2016)の分類に従って用例を挙げていき、平方言の行為指示表現でどのような形式が用いられるかを確認していく。インフォーマントには、仲の良い同世代の人を聞き手に想

定してもらい、例文を平方言に直してもらった。

5.3.4.2.2.2. 命令的指示

用例は、平方言の文を挙げ、括弧内にインフォーマントに提示した例文を挙げる形で示す。「命令的指示」では、「動詞否定形+ネヨ」「動詞否定形+ネ」「動詞命令形＋ヨ」が用いられる。

(288) a. ドアば 開けたら 閉めっいかんネヨ
（ドアを開けたら閉めていかないか）
b. 明日 寄ってくれんネヨ（明日寄ってくれないか）
c. こけ 名前ば 書かんね（ここに名前を書かないか）
d. おーが のこーて ごろっと 行けよ（私が残るから、みんなで行け[7]）

5.3.4.2.2.3. 聞き手利益命令

「聞き手利益命令」では、「動詞命令形（＋ヨ）」が用いられる。そのほか、(289e)「せなじゃなかっか」（しないと（いけないの）ではないのか）、(289f)「書けば」のように、条件表現も用いられる。(289g)「黙っちょこで」のように、「動詞仮想形＋デ」も用いられている。

(289) a. こん 料理わ さじで 食えよ（この料理は匙で食べろ）
b. 泣こごちゃーひこ 泣けよ（泣きたいだけ、泣け）
c. 体にゃ 気一つけれよね（体には気を付けろ）
d. もー よか んーが よかごて せれ
（もういい、あなたが良いようにしろ）
e. 今日わ 宿題ば せなじゃなかっか
（今日は宿題をしないとならないのではないか）
f. 立ってわ 書かれんてん こけ 座って 書けば
（立っては書くことはできないから、ここに座って書けば）
g. ここでわ 黙っちょこで（ここでは黙っていよう）
h. これ以上 飲んなよ（これ以上飲むなよ）

5.3.4.2.2.4. 依頼

「依頼」では、「動詞否定形＋カ」「動詞仮想形＋デ」が用いられる。

(290) a. こん　本ば　おれ　くれんか（この本を俺にくれ）

b. おとろひかけん　一緒に　戻ろで　（怖いから、一緒に帰ろうよ）

5.3.4.2.2.5. 勧め

「勧め」では、「動詞否定形＋ネ」「動詞否定形＋カヨ」「動詞命令形＋ヨ」が用いられる。また、(291d)「ぎばらなたい」のように当為表現のほか、(291e)「はしーとがよかっちゃなかっかよ」（走るのがいいのではないのかな）のように、「～トガ　ヨカ」（～するのがいい）の形式も用いられる。

(291) a. こん　かひば　持っていかんね（このお菓子を持って帰れ）

b. 唐揚げん　残っちょーけん　食わんかよ（唐揚げが残っているから食べないか）

c. めーしゃ　たいそ　食えよ（ご飯はたくさん食えよ）

d. ぎばらなたい（頑張れ）

e. 体ん　ために　はしーとが　よかっちゃなかっかよ
（体のために走るのがいいのではないかよ）

f. 今日わ　酒ば　飲まんとが　よかばい（今日は酒を飲まないのがいいよ）

「勧誘」は「勧め」に含まれる。「勧め」は行為者が基本的に聞き手であるのに対して、「勧誘」は行為者が話し手と聞き手である点で異なっている。「勧誘」の文を以下に示す。「勧誘」では「動詞仮想形＋ヤ」「動詞否定形＋カヨ」が用いられる。

(292) a. 一緒に　あすびいこや（一緒に遊びに行こう）

b. 一緒に　飲み行かんかよ（一緒に飲みに行かない？）

5.3.4.2.2.6. 仲の良い同世代の人への行為指示表現形式

ここまでの形式をまとめると、以下のようになる。条件表現を用いた文などは除いている。動詞に終助詞が接続した形式が用いられるところに丸印をした。「動詞否定形＋ネヨ」は「命令的指示」で用いられる形式であることがわかる。

	否定形ネヨ	否定形ネ	否定形カ	否定形カヨ	命令形のみ	命令形ヨ	仮想形デ	仮想形ヤ
命令的指示	○	○				○		
聞き手利益命令					○	○	○	
依頼			○				○	
勧め		○		○		○		
勧誘				○				○

5.3.4.2.3. 待遇差による行為指示表現の違い

「動詞否定形＋ネヨ」が、どのような位相の相手に用いられるかを考察する。インフォーマントに、上述の例文を聞き手が変わったと想定して、改めて言い直してもらった。以下に、その想定する聞き手を示す。D が前項で想定した聞き手である。調査では A から F に当てはまる人物の氏名を挙げてもらい、その聞き手に話すつもりで発話してもらった。

(293) A　めったに会うことのない、地元のものすごく目上の人（B より目上）
B　よく会う目上の人（C より目上）
C　仲のいい目上の人
D　仲のいい同世代の人
E　仲のいい目下の人
F　自分の子ども

以下に、(288a)「ドアを開けたら、ちゃんと閉めろ」、(288c)「ここに名前を書け」の A から F までの文を示す。

(294) 【命令的指示】ドアを開けたら、ちゃんと閉めろ
A　あとしまっば　せねばね
B　ドアわ　閉めっ戻れよね
C　とーば　開けたら　もとんごて　閉めねば
D　ドアば　開けたら　閉めっいかんネヨ（(288a)再掲）
E　もとんごて　閉めれ
F　ドアば　開けたら　閉むーもんたい

(295) 【命令的指示】ここに名前を書け

A　こけ　名前お　書いてください

B　こけ　名前ば　かっくれんねよ

C　こけ　名前ば　｛書かんね／書かんネヨ｝

D　こけ　名前ば　書かんね（(288c)再掲)

E　こけ　名前ば　書けよ

F　こけ　名前ば　書けよ

最も高位である A には、共通語形を用いた「テクダサイ」や直接指示をしないような表現がなされている。また、(288d)「俺を置いていけ」では、A に対して「動詞否定形＋カナ」も用いられている[8]。

(296)　おーが　のこーて　みんな　行ってこんカナ

（私が残るから、みんな行ってこないか）

以下に、(288)で示した「命令的指示」の文の調査結果を示す。待遇価値が下がるにつれて、「動詞否定形＋終助詞」になり、「動詞命令形＋終助詞」の形式が用いられることがわかる。

	(288a)	(288b)	(288c)	(288d)
テクダサイ		A	A	
条件表現ネ	A			
条件表現のみ	C			B
否定形カナ				A
否定形ネヨ	D	C	B、C	
否定形ネ		B	C、D	
命令形ヨネ	B	E、F		
命令形ヨ		C	E、F	C、D、
命令形のみ	E			E、F
その他	F			

「動詞否定形＋ネヨ」は、B（よく合う目上の人）から D（仲のいい同世代の人）に用い

る形式であることがわかる。目下の者には動詞命令形による行為指示を行っている。

しかし、表では「動詞否定形＋ネ」も同様の待遇価値で用いられている。以下では、「ヨ」の用法をみることで、「動詞否定形＋ネヨ」との用法の違いを考察する。

5.3.4.2.4. 終助詞「ヨ」

5.3.4.2.4.1. 「ヨ」の待遇価値

「動詞否定形＋ネ」に「ヨ」が接続したとき、待遇価値がどう変わるかについて、その他の行為指示表現をみて、「ヨ」が接続したときの待遇差を考察する。まず、その分類の代表例を挙げ、残りは表にして示す。

(297) 【聞き手利益命令】体には気を付けろ。

A　体にわ　気一つけんかなよ

B　体にだけわ　気一つけれよね

C　体にだけわ　気一つけれね

D　体にゃ　気一つけれよね（(289c)再掲）

E　体にだけわ　気一つけっな

F　体に　気一つけっな

	(289b)	(289c)	(289d)	(289f)	(289g)	(289h)
テクダサイ					A	
マッセヨ	A					
条件表現	B、C		B	A、B、C、D、F		
～トガ　ヨカ						B
否定形カナヨ		A				
否定形カナ			A			
否定形ネ			C			
命令形ヨネ		B、D			B、C、E	
命令形ネ		C				
命令形ヨ	D、E、F			E	F	C、D、E

命令形のみ			D、E、F			F
仮想形デ					D	
テ形ナ		E、F				
その他						A[9]

「聞き手利益命令」でも、「命令的指示」のときと同様、待遇価値が下がるにつれ、共通語形や条件表現から「動詞否定形＋終助詞」になり、「動詞命令形＋終助詞」の形式が用いられることがわかる。また、A に対する文で「マッセヨ」という形式がみられた[10]。

(298)　泣こごちゃーひこ　｛なっまっせよ／泣かんかなよ｝
（泣きたいだけ、泣け）

(289h)「もうこれ以上飲むな」をみると、C（仲のいい目上の人）、D（仲のいい同世代の人）、E（仲の良い目下の人）には「動詞命令形＋ヨ」を用いているのに対し、F（自分の子ども）には、終助詞「ヨ」を接続しない動詞命令形のみを用いている。

次に、「依頼」の例を挙げる。

(299) 【依頼】この本をくれ

A　こん　本な　おれ　くれんかな

B　こん　本ば　おれ　くれれよ

C　こん　本ば　くれんね

D　こん　本ば　おれ　くれんか（(290a)再掲）

E　こん　本ば　くれれよ

F　こん　本ば　おれ　くれんか

	(290)a)	(290b)
否定形カナ	A	A
否定形ネ	C	
否定形カ	D、F	
命令形ヨ	B、E	B
仮想形ヤ		C、D、F
仮想形デ		D、E

「依頼」は話し手の利益のために、聞き手に行為をさせるものである。そのような行為指示の場合、動詞命令形のみの形式は用いづらいと考えられる。

「勧め」の例を挙げる。

(300) 【勧め】ご飯をたくさんお食べ。

A　ご飯わ　たいそ　食わんかなよ

B　めーしゃ　たいそ　食えよ

D　めーしゃ　たいそ　食えよ（(291c)再掲）

E　めーしゃ　たいそ　食え

					勧誘	
	(291a)	(291b)	(291c)	(291d)	(292a)	(292b)
テクダサイ	A					
条件表現				D		
否定形カナヨ			A	A		
否定形カナ		A			A	A
否 定 形 カ ヨ		C、D、				B、C、D
否定形ネ	D	F				
否定形カ	B	E				
命令形ヨ	C、F	B	B、C、D	B、		
命令形のみ	E		E、F	C、E、F		
仮想形ヤ					B、C、D、E、F	E、F
仮想形デ					F	

「勧め」では、高位の相手に共通語形や「動詞否定形＋カナ（ヨ）」が用いられ、待遇価値が下がるにつれ、「動詞否定形＋終助詞」、「動詞命令形＋ヨ」、動詞命令形のみへと変わっている。「勧め」は聞き手の利益になることを、聞き手に行為をさせることであ

るため、他の行為指示に比べて、動詞命令形のみでの文が許容されていると考えられる。

行為指示表現での終助詞「ヨ」の使用をみると、「ヨ」は聞き手に対してその行為をさせることに対して、不快に思わせないような配慮を表す形式であることがわかる。

5.3.4.2.4.2. 「ヨ」による聞き手への配慮

「動詞否定形＋ネ」は 4 分類のすべてに用いられている。その中でも話し手の利益のために、話し手が行為を決定して、聞き手に行為をさせる「命令的指示」は、聞き手にかなりの不快さを伴わせる可能性がある。そのような行為指示に対して、「ヨ」を接続させることで、聞き手への配慮を表していると考えられる。

5.3.4.2.5. まとめ

本項では、平方言にみられる「動詞否定形＋ネヨ」について考察した。この「動詞否定形＋ネヨ」は、親密な関係にある目上や同世代の人物に用いる形式である。この形式は「命令的指示」で用いる。「動詞否定形＋ネ」よる行為指示は「命令的指示」「聞き手利益命令」「依頼」「勧め」のいずれにも用いられる。「命令的指示」という、聞き手にとって最も負担がかかる行為指示に対して、「ヨ」を接続させることで、聞き手への配慮を表していると考えられる。

---

[1] この文は調査時に、能動文である「太郎に次郎が花子ば世話した」（太郎に次郎が花子を紹介した）を聞いている。そのため、「次郎に（から）」にあたる部分はないが、用例として挙げている。

[2] 日高(2002)では、熊本県以外にも、秋田県、岩手県、福島県、近畿地方の高校生、大学生を対象に調査を行っているが、本項では割愛している。

[3]「非情物主語」の文をさす。

[4] GAJ 第 28 図「運動場で（遊ぶ）」では、山陰地域に「から」の用例がみられる。

[5] 平方言には「カナ敬語」と呼ばれる表現がある。目上の人物への行為指示に「飲まんカナ」という文を使用する。「カナ」を付けることで独り言のようにして、相手に積極的に動作を促さない表現が、結果的に相手への配慮になっているのではないかと考えられる。

[6] この終助詞「ネヨ」の考察については、対馬方言を記述した原田(2005,2006)がある。

[7]「テレビの懸賞で温泉旅行が当たったが、メンバー全員は行けず、誰か一人が残らなくてはいけなくなった」という場面を想定した。

[8] 今回の調査で「カナ」は動詞否定形に接続する形式しか聞き得なかったが、「食ぶーカナ」（食べますか）、「食べたっカナ」（食べたんですか）など、他の形式にも接続する。

[9]「これ以上飲めばわーかっじゃなかっですか」（これ以上飲むと（体に）悪いのではな

いですか)

[10] この形式は「書きまっせよ」「開けまっせよ」「来（き）まっせよ」など、高位の人物に対して用いる形式であるという。この形式についても今後の課題とする。

6. 複文

6.1. 従属節の分類

複文とは、主節と、ひとつ以上の従属節によって構成されている文のことを指す。小西(2016：182)を参考に、従属節を以下のように分類する[1]。

(301) a. 補足節：述語に対する主語・補語成分となる。
   1. 引用節：発話や思考・知識の内容を引用する。
   2. 疑問節：思考・知識の内容を不確実なものとして示す。
   b. 名詞修飾節：名詞を修飾する成分となる。
   c. 副詞節：主節の副詞的修飾成分となる。
      1. 条件節：主節との間に因果関係がある事態を示す。「仮定節」「逆接仮定節」「原因・理由節」「逆接節」がある。
      2. 時間節：主節と種々の時間的な関係にある事態を示す。
      3. 目的節：主節の事態の動作・変化・状態の目的を表す。
      4. 様態節：主節の事態の動作・変化・状態の様態を表す。
   d. 等位節：主節と意味・統語的に対等な関係にある。

上記の分類をもとに、平方言の従属節を記述する。

6.2. 補足節

6.2.1. 引用節

平方言の引用節は、述語に「引用」の/=ti/を接続させたものである。/=ti/の前には、準体助詞/=to/の異形態/=Q/が接続することが多い。

(302) a. べんけーが　覚えにっかッチ　思った（「弁慶」が覚えにくいと思った）
   b. よかよねッチ　思うねー（良いよねって思うね）
   c. 運動会の　時わ　会うじゃろーけんチ　思っちょった
      （運動会の時は合うだろうからと思っていた）
   d. 寝ちょったチ　どーも　ならんけん　いこや
      （寝ていたってどうもならないから行こうよ）

この/=ti/は、動詞/iw-/'言う'と融合して、/=tjuw-/'という'という複合形式をもつ。以下の(303b)が、複合形式である。

(303) a. 帰ったッチ　ゆーた（帰ったって言った）

b. うん　帰ったッチュータロ（うん、帰ったって言っただろう）

この/=tjuw-/'という'に「完了」の/-tara/を接続した/tjuutara/'と言ったら'や、原因・理由の/=teN/が接続した/tjuuteN/'と言うから'という形式も節を作る。これらは、条件節に分類する。「単純接続」の/-te/が接続した/tjuute/'と言って'形式は、等位節に分類する。

(304) a. ××ん　おばさんの　きちょったっねーチュータラ　や　その　ひとわ　見らんよチューテ　な（××のおばさんが来ていたねって言ったら、いや、その人は見ないよと言ってね）

b. おばさんわ　行かんチューテン　連れ　いて　もらおごちゃいよ
（おばさんは行かないって言うから連れて行ってもらいたいよ）

6.2.2. 疑問節

疑問節は、述語に/=ka/を接続させたものである。

(305) a. もー　わが　うちん　玄関ば　どがんして　出たっカ　わからんっちゃけん
（もう私の家の玄関をどうやって出たのかわからないんだから）

b. もー　玄関も　どがんして　出たカ　靴も　どがんして　履いたカ　わからんと（もう玄関もどうやって出たか靴もどうやって履いたかわからないの）

c. なるカ　ならんカね（なるかならないかね）

d. その　人もね　調子お　合わせたカ　なんカ　しらん

6.3. 名詞修飾節

名詞修飾節は、述語が終止連体類の屈折接尾辞を接続し、名詞に修飾するものである。

(306) a. ダーモ　ヒャッタコッノ　ナカ　森に　ひゃった
（誰も入ったことがない森に入った）

b. アタマワ　ヤッパリ　ツカウ　ことわ　ある（頭はやはり使うことはある）

c. ムカシンゴト　オボエヨーチュー　気の　なか　わけよ
（昔のように覚えようという気がないわけよ）

(306a)は、被修飾名詞の「森」が名詞修飾節の述語の「ひゃったこっのなか」と格関係にあるものである。(306b)は、そのような格関係にないものもある。(306c)は、/=ti#juw-u/'という'の複合形式によって名修飾節を表すものである。

準体助詞/=to/が被修飾名詞になることもある。

(307) a. ジーバ　カイタとん　あるじゃろ（字を書いたのがあるだろ）
b. ムコーニ　アーとば　こっちかー　ぽーんち　して
（向こうにあるのをこっちからポーンってして）

6.4. 副詞節

6.4.1. 条件節

6.4.1.1. 仮定節

仮定節は、動詞屈折接尾辞の「未完了条件」の/-(r)eba/、「完了条件」の/-tara/、「仮定」の接語/=nara/が接続したものである。条件節の分類は、有田編(2017)を参考にする。

/-(r)eba/は、「認識的条件文」「予測的条件文」「反事実的条件文」「総称的条件文」を表す。まず、「認識的条件文」の例を挙げる。

(308) a. 【認識的条件文】明日　雨ん　降レバ　運動会わ　中止に　なーばいね
（明日雨が降れば運動会は中止になるよね）
b. 【認識的条件文】帰ろゴチャラ　帰れよ（帰りたければ帰れよ）
c. 【認識的条件文】なんでん　すーゴチャラ　すれば
（何でもしたければすれば）

(308b,c)の「ゴチャラ」は、「様態」の/gotjar-/に、/-(r)eba/が接続し、/gotjareba/が/*gotjarja/となり、/gotjara/という形式になったものである。

「予測的条件文」の例は、以下のものである。

(309) a. 【予測的条件文】明日　雨ん　降レバ　いこごっなかなー　おら　いかんよ
（明日雨が降れば行きたくないな、私は行かないよ）

b. 【予測的条件文】自分が　ぎばって　しよレバ　じょーしなーと
（自分が頑張ってしていれば上手になるのだ）

c. 【予測的条件文】そがん　くらすんで　本ば　読メバ　目が　わるなーとぞ
（そんな暗い隅で本を読めば目が悪くなるのだぞ）

「反事実条件文」の例は、以下のものである。

(310) a. 【反事実的条件文】あん　時　よーと　しちょレバ　腐らんじゃったとに
（あの時しっかりしていれば（田が）腐らなかったのに）

b. 【反事実的条件文】きの　かーちょケバ　よかったばってね
（昨日書いておけば良かったけれどね）

c. 【反事実的条件文】もちっと　はよ　ケーバ　よかったっにねー
（もう少し早く来れば良かったのにね）

「総称的条件文」の例は、以下のものである。

(311) a. 【総称的条件文】こん　みっば　まっすぐ　行ケバ　港に　つっとよ
（この道をまっすぐ行けば港に着くのよ）

b. 【総称的条件文】じゅーごから　きゅーば　ひケバ　ろくに　なーとじゃん
（15 から 9 を引けば 6 になるのだよ）

c. 【総称的条件文】氷ん　溶けレバ　みじ　なってなー
（氷が溶ければ水になってな）

次に、/-tara/は「事実的条件文」を表す。以下に用例を示す。

(312) a. 【事実的条件文】かえっタラ　××が　寝ちょったばい
（帰ったら××が寝ていたよ）

b. 【事実的条件文】だーかち　思っちょっタラ　おまえじゃったっかよ
（誰かと思っていたら、あなただったかよ）

c. 【事実的条件文】公民館に　行っタラ　会わ　おわっちょったよ
（公民館に行ったら会は終わっていたよ）

/=nara/は、「認識的条件文」「予測的条件文」を表す。/=nara/の前に準体助詞の/=to/が接

続するものもみられる。

(313) a. 【認識的条件文】本ば　見ろごちゃートナラ　よむナラ　かひよ
（本を読みたいなら、読むなら貸すよ）

b. 【認識的条件文】孫ん　チーム　勝ったナラ　甲子園に　いっちゃなか
（（結果は知らずに）孫のチームが勝ったなら甲子園に行くのではないか）

c. 【認識的条件文】明後日　いっトナラ　今日かー　用意せな　いかんねー
（明後日行くなら今日から用意しないといけないね）

d. 【認識的条件文】あんたん　行くナラ　一緒　つれのもーかねー
（あなたが行くなら一緒に行こうかね）

e. 【認識的条件文】てがんば　かっトナラ　字も　じょーし　書けよ
（手紙を書くなら字も上手に書けよ）

f. 【認識的条件文】となり　はいったナラ　用心せんなばいね
（となりに（泥棒が）入ったなら用心しないとだね）

「予測的条件文」の例は以下のものである。

(314) 【予測的条件文】返すナラ　かひてでん　よかよ
（返すなら貸してでもいいよ）

/=nara/は名詞にも接続する。

(315) a. 学生ナラ　頼まれん（学生なら頼むことができない）

b. 自分ひとりナラ　かわまんったい（自分一人ならかまわないんだよ）

6.4.1.2. 逆接仮定節

逆接仮定節は、動詞の屈折接尾辞/-temo/、「逆接仮定」の接語/=demo/が接続したものである。どちらも音節末の/mo/が/N/になることが多い。まず、/-temo/の例を挙げる。

(316) a. そーかー　待っテン　待っテン　こんちゃも
（それから待っても待っても来ないのだもの）

b. お茶ば　飲まんかなち　私が　ゆーテモ　もー　おばさん　時間わ　時間の決まっちょーけん（お茶を飲まないかなと私が言っても、「もうおばさん、

時間は、時間の決まっているから」（と断られた））

次に、/=demo/の例を挙げる。

(317) a. 今まで　ぬっかったてん　入る　入るちゅーてデモ　シャワーよ
（今まで暑かったから（風呂に）入る入ると言ってでもシャワーだよ）
b. おら　だーも　おらんデン　ひとーで　ぼつぼつぼつぼつなー
（私は誰もいないでも一人でこつこつこつこつなー）
c. もー　よせ　いちょってデン　おなごなら　よかば　男じゃろ
（もうよそに行っていてでも（世話係が）女性ならいいけれど男だろう）

6.4.1.3. 原因・理由節

原因・理由節は、接語/=teN/が接続するものである。九州方言では、同様の形式に/=keN/が用いられる。平方言でも、この/= keN/が用いられ、/=teN/は/=keN/の異形態と考えられる。この両形式において、使用頻度の高さから/=teN/を代表の形式と捉えている。

/=teN/（/=keN/）の従属節は、主節の原因を表している。

(318) a. あひの　いたかテン　行かえんじゃったっよ
（足が痛いから行くことができなかったよ）
b. 私　月曜日じゃケン　あんたと　会わん　わけよ
（私が（行くのは）月曜日だからあなたと会わないわけだよ）

また、/=teN/（/=keN/）の従属節が、主節に対する判断や発言の根拠であることも表す。

(319) a. こけ　私わ　おーテン　いっちょけよ（ここに私はいるから行っておけよ）
b. 我が　家　もどってかー　して　もらっケン　よか
（我が家に帰ってからしてもらうからいい）

上記の形式とは別に、/=kaNni/も原因・理由節を表す。

(320) a. その　人の　息子よちゅーカンニ　きーた　わけ
（その人の息子だというから聞いたわけ）
b. あんた　ICU に　おる　おるっち　思っカンニ　思いこまれちょったわけよ

（あなたが ICU におるおるって思うから（私に）思い込まれていたわけよ）

/=kaNni/には、原因・理由節ではない用法もみられる。以下の例は、「継起」を表している。

(321)　ご飯ば　食べ　しごっば　して　ともだちん　とけ　行ってカンニ　帰った
（ご飯を食べ、仕事をして、友だちのところに行ってから帰った）

原因・理由節には、共通語と同様の形式である/=kara/、/=node/も稀にみられる。

(322) a.　あの　人わ　料理ば　するカラ（あの人は料理をするから）
b.　息子かー　連れてきて　もらいますノデ　ちゅー
（（病院に対して）息子から連れて行ってもらいますのでと言う）

6.4.1.4. 逆接節

逆接節は、接語/=baQte(N)/が接続するものである。音節末の/N/は、脱落することが多い。さらに、/=baQte(N)/の前に準体助詞/=to/が接続することもある。

(323) a.　私わ　あんたば　見て　にこにこ　すっちゃバッテ　あんたが　知らん顔しちょーちゃねー（私はあなたを見てにこにこするのだけれど、あなたが知らん顔しているのよね）
b.　サービスち　ゆーたバッテ　金わ　あんけちょったっち　××わ　ゆーたバッテ（サービスって言ったけれど金は預けていたって××は言ったけれど）
c.　裸ん　なって　すぐ　あれ　すーごと　なっちょートバッテ　また　さむなって　けーばね（裸になってすぐあれするようになっているのだけれど、また寒くなってくればね）

共通語と同様の形式である/=kedo/も逆接節を表す。

(324) a.　ひとりで　入らるーごてわ　しちょートケド　恐ろしー　わけよ
（（風呂は）独りで入れるようにはしているのだけど恐ろしいわけよ）
b.　ここば　朝　とーったり　夕方　とーったり　するケド　あんたん　姿ば見らんど（ここを朝通ったり夕方通ったりするけどあなたの姿を見ないよ）

6.4.2. 時間節

時間節は、主節の事態との時間関係を表すものである。主に/toki/が用いられ、助詞/=ni/も接続する。

(325) a. 帰りに　うちしな　こー　いっごートキニ　もー　××が　ひとりで　しよって（帰りに家にこう行っているときにもう××が一人でしていて）

b. もしもん　こっ　なったトキニ　困るちゅー　ことで
（もしものことになったときに困るということで）

c. はじめ　目の　さめたトキニ　あんたば　五等室に　おって　わたしわ　もー　てっきー　××ちゃんっち　おもーちょった　わけよ
（初め目が覚めたときに、あなたを、五等室にいて、わたしはもうてっきり××ちゃんって思っていたわけよ）

/mae/'前'や/uti/'うち'によって、時間の前後関係を表す。/mae/'前'は主節が従属節より前の事態であることを表し、/uti/'うち'は主節の事態が従属節の事態の展開中であることを表す。

(326) a. 明けんウチニ　××に　電話するマエニ　病院に　電話した　わけよ
（（夜が）明けないうちに××に電話する前に病院に電話したわけよ）

b. ご飯　食べるマエニ　オレンジば　一個　食べたっち
（ご飯を食べる前にオレンジを一個食べたって）

6.4.3. 目的節

目的節は、主節の目的を表すものである。動詞語幹に/=ga/が接続することで表す。

(327) a. //ture=ga//'迎えに'：あした　ツレガ　けーよ（明日迎えに来いよ）

b. //kuw=ga//'食いに'：クーガ　いこや（食いに行こうよ）

c. //si=ga//'しに'：なん　シガ　来たんね（何しに来たんだね）

6.4.4. 様態節

様態節は、主節の動作や状態の、様子や程度を表すものである。平方言では、/goto/を用いて表す。以下に「様子」を表す例を挙げる。

(328) a. わっかうち　オモイノコシノ　ナカゴテ　あそんさらく　こったい
（若いうちに思い残しのないように遊びまわることだ）
b. 猫ば　大声で　怒鳴ったら　ビックーシタゴテ　にげっ　いた
（猫を大声で怒鳴ったらびっくりしたように逃げて行った）

次に「程度」を表す例を挙げる。

(329) a. こん　川わ　アルイテモ　ワタラレイゴテ　あさか
（この川は歩いて渡ることができるほど浅い）
b. 今わ　ネコン　テーモ　カルゴテ　いそがしか
（今は猫の手も借りるほど忙しい）

/goto/の様態節は、指示内容を表すこともある。

(330) a. アシタワ　アサジュージニ　クーゴテ　きーたよ
（明日は朝十時に来るよう聞いた）
b. ニドトコンゴテ　ゆーたよ（二度と来ないように言ったよ）

ただし、/hodo/も稀に用いられる。

(331)　金わ　使えば　つかっホド　めたたっまーに　へっていく
（金は使えば使うほど瞬く間に減っていく）

様態節には、「同時進行」の/-nagara/や「否定接続」の/(-a)-Nzi/が「付帯状況」を表すものもある。

(332) a. 酒ば　ノンナガラ　はなひば　きーたよ（酒を飲みながら話を聞いたよ）
b. テレビば　ミーナガラ　食べよーとよ（テレビを見ながら食べているのよ）
c. 勉強ば　サセンジ　しごっば　せれっち
（勉強をさせないで仕事をしろって）
d. 今日ね　たっかとっき　しなもんが　あったけんね　トラエンジね　むひこに　とらせたっばい（今日ね、高い所に品物があったからね、とることができなくてね、息子に取らせたのよ）

そのほか、動詞の重複形でも「付帯状況」を表す。

(333) a. あしぇば　カッカー　よー　ぎばんな（汗をかきながら、よく頑張るな）
b. テレビわ　ミーミー　たぶんなよ（テレビは見ながら食べるなよ）
b. ハイターば　つけちょっても　まーだ　ミガミガーアゲッ　よか　おかーさんのすっけん　どーせよごるっけんっち　いぇば（ハイターをつけていてもまだ磨き上げて、「いい、お母さんがするから、どうせ汚れるから」って言えば）

6.5. 等位節

動詞は、語幹に「単純接続」の/-te/を接続させて、等位節を表す。この/-te/は、脱落することが多い。形容詞は、連用形に単純接続の/site/を接続させて、等位節を表す。

(334) a. 今度　メガソーラーのデケッ　どっだけ　ふゆーもんかね
（今度メガソーラーができて、どれだけ（人口が）増えるものかな）
b. くされっ　シモッ　あったーか（腐れてしまって、もったいない）
c. もー　ヒダルシテ　されん（もうひもじくて、できない）
d. そこが　もー　どがんしてでん　オカシューシテ　人んとば　みちょ
（そこがもうどうしてでもおかしくて、人のものを見ている）

また、動詞語幹に/-tari/を接続させて、等位節を表す。

(335) a. 上　乗せタリ　取っタリ　こ　して　ジャンケンして
b. そーかー　三日間わ　点滴　2 本　打っタリね　したけど　病院の　しぇんせーも　しばらく　してかー（それから三日間は点滴 2 本打ったりね、したけど、病院の先生もしばらくしてから）

名詞は/=de/を接続させて、等位節を表す。

(336)　ひとら　学生デ　ひとら　会社員（一人は学生で、一人は会社員だ）

[1] 小西(2016)の従属節の分類は、日本語記述文法研究会編(2008)を参考にしている。

第 2 部　平方言にみられる文法現象

7.　宇久町平方言の「ゴト（如）」の用法

7.1. はじめに

九州方言では「様態」を表す形式として、「ゴト」という形式が広く使用されている。「ゴト」とは、日本の中央語で比況の助動詞といわれる「ごとし」と同語源の語彙と考えられる。九州方言の「ゴト」は九州方言学会編(1991)『九州方言の基礎的研究』（初版は 1969 年）、住田(1983)で、俯瞰的に取り上げられている。また、各地域の方言での「ゴト」の用法を記述した論考に、福岡市博多方言を扱った坪内(2005)、熊本県天草方言を扱った舩木(2006)がある。これらの先行研究は、「ゴト」が、様態用法、希望用法で用いられていることを示している。以下に、住田(1983)で挙げられた用例を示す。該当箇所には、筆者が下線を付した。

(337) a.　【様態】ヤサイガ　ヤマンゴト　トレタ。（野菜が山のようにとれた。）
(p.5)

b.　【希望】モー　キョワ　サムシテ　ナコゴタル。
（もう、きょうは寒くて泣きたいくらいだ。）　(p.8)

長崎県の五島列島に位置する、佐世保市宇久町平（たいら）方言でも、この「ゴト」が使用されている。しかし、平方言の「ゴト」は、先述した方言とは違う様相を示している。本章では、平方言での「ゴト」について、他の九州方言と比較しながら、その用法を考察する。

7.2. 平方言の「ゴト」

7.2.1.　「様態」の「ゴト」

福岡市博多方言を記述した坪内(2005:89)では、「ゴト」を「近似した二つの世界の事態に言及する」機能を持つとしている。坪内(2005)にならい、本章でも、話者が眼前にある事態を、自身が想定する近似した事態で述べる用法を、「様態」と名づける[1]。

以下に、平方言で使用される「ゴト」「ゴテ」「ゴチャル[2]」の用例を挙げる。述語形式の「ゴチャル」は、過去の接尾辞/-ta/が接続した「ゴチャッタ」も用いられる。用例は、ま

ず平方言の文を示し、括弧内に共通語訳を記す。

(338) a. 【ゴト】味が　染むゴト　炊きつめた（味が染みるように炊き込んだ）
b. 【ゴテ】ビールば　みんのゴテ　飲んぼー（ビールを水のように飲んでいる）
c. 【ゴチャル】降ったゴチャンねー（（昨夜は雨が）降ったようだね）
d. 【ゴチャッタ】ちょこちょこ　きよゴチャッタ
（（人が）ちょくちょく来ているようだった）

(338b)は「ビール」の飲み方や飲む量が、話者の想定する「水」に近似していることを述べている。(338c)で示す述語形式の用例も同様である。眼前にある「地面が濡れていること」などから、その事態が話者自身の想定する「雨が降った」という事態と近似していると述べている。近似した事態を述べる「様態」の「ゴト」は、日本語共通語における「ようだ」「そうだ」「らしい」などの、認識的モダリティと類似した意味を表している。

平方言の「ゴト」は、(338a,b)で示した副詞句を作る「ゴト」と「ゴテ」の二形式と、(338c)で示した述語形の「ゴチャル」（「ゴチャー」）が用いられる。本章では、特に断らない限り、これらの三形式をまとめて「ゴト」と記す。

「ゴト」に接続する形式は、名詞に助詞「ノ」（「ン」）が接続した形式、動詞と形容詞の連体形である。これらの接続は、住田(1983)で、他の九州方言でも同様にみられると述べられている。以下に、平方言での用例を示す。「ゴト」「ゴテ」「ゴチャル」の三形式で、接続する形式に違いはみられない。

(339) a. 【名詞+ノ】雨ん　ゴチャーねー（雨のようだね）
b. 【動詞】大きな　饅頭ば　一口で　食ぶーゴチャー　わん口たい
（大きな饅頭を一口で食べそうな大口だ）
c. 【形容詞】明日は　ぬっかゴチャー（明日は暑いらしい）

福岡市博多方言を記述した坪内(2005:92)では、上記の接続に加えて、「この金魚はもう死のウゴター」（この金魚はもう死んでしまいそうだ）という、仮想形が接続することを挙げている。住田(1983:8)でも、福岡県八女市柳島、柳川市矢留本町の話者が、「コッチンスイカン　ホーガ　ウマカロゴタッ」（こっちの西瓜のほうがうまそうだ）、「ミミン　ヤ

ブリューゴタッタ　ノー」（耳がやぶれそうだったなあ）など、動詞や形容詞の仮想形が接続することを述べている。

しかし、「様態」において、平方言では「ゴト」が仮想形に接続することはなく、連体形でしか接続しない。

(340) a.　雨が｛ふーゴチャー／*降ろーゴチャー[3]｝（雨が降りそうだ）
b.　天気の｛良かゴチャー／*良かろーゴチャー｝
（（明日は）天気が良さそうだ）

また、主語が一人称のときでも、「思わず」「つい」などの副詞と共起し、その動作が自身の意志とは無関係に起こりうる事態を表すときは、連体形で接続する。

(341) a.　走らえんてん　｛私は／太郎は｝あゆんゴチャー[4]
（（走れと言われたけれども、きつくて）走れないから｛私は／太郎は｝歩きそうだ）
b.　ケーキがうまかごちゃーけん　我を忘れて　くーゴトなった
（ケーキが美味しそうだから、思わず（私は）食べそうになった）

7.2.2.　「希望」の「ゴト」

7.2.2.1.　動詞の仮想形が接続する「ゴト」

7.2.1 節で述べたように、平方言では「様態」の「ゴト」は仮想形に接続しない。しかし、「希望」を表す場合は、動詞の仮想形に「ゴト」が接続する。

(342) a.　酒ば　飲もゴチャー（酒を飲みたい）
b.　温泉に　行こゴチャー（温泉に行きたい）
c.　まーだ　働こゴチャッタ（まだまだ働きたかった）

このとき動詞仮想形の主語は一人称であって、三人称では非文になる。

(343) a.　（私ワ／*太郎ワ）酒ば　飲もゴチャー
b.　（私ワ／*太郎ワ）温泉に　行こゴチャー

ただし、「チ」（て）などの形式をつけて引用文で示すか、「チャナカ」（ではないか）

などの形式をつけて修辞疑問文で示す場合は、主語が三人称でも使用できる。

(344) a.　会おゴチャーとチたい（（太郎が花子に）会いたいんだってよ）
　　b.　その犬　ひだるかーじゃなか　餌ば　食おゴチャッチャナカ
　　（その犬は空腹なのではないか、餌を食べたいのではないか）

この「希望」の「ゴト」は、否定表現において「様態」と違いがみられる。「希望」では「ゴト」の後に否定の形式が接続するのに対し「様態」では「ゴト」の前に接続する[5]。

(345) a.　【希望】無駄な　ぜんな　出そゴッなかもん
　　（無駄な金は出したくないもの）
　　b.　【様態：動詞】前も　今も　変わらんゴチャー
　　（昔も今も変わらないようだ）
　　c.　【様態：形容詞】明日から　もー　暇の　なかゴチャイよ
　　（（忙しくて）明日から、もう暇がなさそうだよ）

九州方言学会編(1991:457)に、熊本県牛深市深海方言では「希望」と「様態」の用法の区別によって、同様の否定表現の区別をするという記述がある。平方言に限らず、このような接続の違いは九州各地で確認されると考えられる。

7.2.2.2.　他方言での「動詞仮想形＋ゴト」

『方言文法全国地図』第 227 図「行きたい（なあ）」をみると、大分県、宮崎県を除く九州地方に、動詞仮想形が「ゴト」に接続した「イコーゴタル」などの形式が分布しているのがわかる[6]。

この仮想形に接続する「ゴト」の用法は、先行研究でも多く取り上げられている。九州方言全体での「ゴト」の使用をみた住田(1983:8)は、意志の接辞/-oo/が「ゴト」に接続した場合、「～したいくらい」「～したいほど」という意味になると述べている。この用法は「助動詞「たい」の文表現とは別種の希望表現」であり、実際には、それを実行するつもりはないことを意味している。このような「ゴト」の使用は、福岡市博多方言（坪内(2005)）、熊本県天草方言（舩木(2006)）でも同様である。

これらの方言では、仮想形で述べた事態を、「ゴト」によって、「そうしようとするくらいの状態だ」という「様態」で述べている。聞き手は、話者が意志的な行為を述べたと

いう意図を酌みとり、語用論的解釈を働かせ、この文を「希望」だと受け取る。したがって、この「ゴト」の意味は、共通語の「タイ」のように、様々な事態を志向して要求するような、明確な「希望」とは異なるものである。

坪内(2005:92-93)では、「ゴト」による「希望」を「「いっそ〜してやりたい」とその動作を話し手が自分の意志で制御できている場合」の用法と述べている。以下に、坪内(2005)で挙げられた用例を示す。

(346) a. 私／ママ彼／*この金魚はもう死のウゴター。
（私／*彼／*この金魚はいっそ死んでやりたいほどだ。）
b. （フルマラソンの途中で走るのをやめて私／*彼は）今すぐ歩こウゴター。
（今すぐ歩きたいくらいだ。）

舩木(2006:120-121)では、肯否疑問文で「飲みたいか？」と尋ねられたことに対して、「飲もうゴタル」と回答できないと述べている。肯否を確定した希望で伝えることが、「ゴト」の「希望」にできないためである。そのことから、「ゴト」による「希望」は結論を確定しない表現で用いられると述べている。福岡市若年層方言を記述した原田(2014:16)でも、「ゴト」による「希望」は、自分の気持ちが「意志」で述べた事態に近似することを意味しているのであって、積極的に望んでいるわけではないと述べている。

これまで先行研究で取り上げられた「ゴト」の「希望」は、「動詞仮想形+ゴト」の形式に「希望」の意味があることを認めつつも、明確な「希望」とは異なるものである。この「希望」は、自分の意志で実現できる事態で使用されるような限定的な用法であるといえる。

7.2.2.3. 平方言の「希望」の「ゴト」

平方言の「動詞仮想形+ゴト」は、先行研究で挙げた方言と異なる様相を示す。

(347) a. はよ　よー　なろゴチャー（早く（病気が）よくなりたい）
b. わっかもんに　戻ろゴチャー（若者に戻りたい）
c. 泳ん方ば　ならおゴチャー（泳ぎ方を習いたい）
d. 酔っ払わんごて　すーゴチャー（酔っ払わないようにしたい）
e. 失敗したこっば　わひるーゴチャイよ（失敗したことを忘れたい）

f. いっぴゃ　もたすゴチャー[7]

（（飼っている鶏に、卵を）いっぱい産ませたい）

g. 降らそゴッナカ（（雨を）降らしたくない）

(347a)では、「病気がよくなる」という、話者の意志だけでは実現できないような事態に対して、「動詞仮想形+ゴト」が用いられている。これは話者の意志次第で比較的治しやすい風邪などの病気でも、また癌などの話者の意志だけでは治癒が困難な病気でも、許容度は変わらない。

(347d,e)のように、「酔っ払わないようにすること」「忘れること」は感覚的な事態であり、話者の意志とは無関係だが、その事態を話者自身が志向し、実現しようとすることが「動詞仮想形＋ゴト」で表されている。

さらに、(347f,g)のように「飼っている鶏に卵を産ませること」や「雨を降らせること」というのは、話者自身の意志的な行動によって、実現させられる事態ではないが、「動詞仮想形+ゴト」が用いられている。平方言の「動詞仮想形＋ゴト」は、話者自身では実現できない事態も志向していることがわかる。この形式は様々な事態を志向し、要求しており、日本語共通語の「タイ」と対応する使用をしているといえる。

その他、「動詞仮想形+ゴト」は、「どうしても」「どうにかして」などの強い意志を表す副詞と共起することや、「プロポーズ」など曖昧にすることができない事態での使用が可能である。

(348) 【意志性の強い副詞との共起した文】

a. どしてん　酒ば　飲もゴチャー（どうしても酒を飲みたい）

b. どがんかして　乗ろゴチャー

（（出発しそうなバスに向けて走りながら）どうにかして乗りたい）

c. どけーも　行こゴッナカ　（（平郷のほかには）どこにも行きたくない）

(349) 【曖昧に伝えない文】

a. 結婚すゴチャー　（（プロポーズの言葉として、お前と）結婚したい）

b. 先生　小便に　行こゴチャー

（（学校の授業中、我慢できなくなって）先生、小便に行きたい）

c. ねっのあーてん　学校ば　休もゴチャー

（（朝起きて、親に訴えて）熱があるから、学校を休みたい）

上記のことから、平方言の「動詞仮想形+ゴト」は、話者の意志を様態的に伝えているのではなく、明確な「希望」の意味として用いられていることがわかる。

7.2.1.節で確認した通り、平方言では、仮想形が「推量」の意味で「ゴト」に接続することはない。「ゴト」に接続するとき、仮想形は「意志」の意味である。言い換えると、仮想形を形作る接辞/-oo/は、「意志」の意味でしか「ゴト」に接続しない。そして、この「動詞語幹-oo＋ゴト」は、動詞自体の意志性や、事態を話者が実現できるか否かに関係なく、その事態を志向し要求する形式となっている。したがって、平方言では意志の接辞/-oo/と「ゴト」のつながりによって、「希望」の意味を表していると考えられる。動詞語幹に接続した「-oo＋ゴト」という形式が「希望」を表す形式である。

また、当該地域では、/nomitaka/'飲みたい'、/mitaka/'見たい'など、他の九州方言でみられる希望形式/-(i)taka/は用いられていない[8]。この「-oo＋ゴト」による「希望」が希望専用の形式として用いられている。

7.3. 形態と意味の対応

「ゴト」が明確な「希望」の意味をもつと考えられる方言は、平方言以外にもある[9]。九州方言学会編(1991:522)では、鹿児島県指宿市岡児ヶ水（おかちよがみず）方言を例に、仮想形が「ゴト」に接続することで「希望」を表すことが示されている。以下に、九州方言学会編(1991)で挙げられた用例を示す。

(350) 岡児ヶ水方言における「ゴト」の使用

a. 【様態】ウガゼィ　ナロコ゜ヂャ（台風になりそうだ）

b. 【希望】シビンニュ　スコ゜ヂャ（小便をしたい）

(350a)は、「なる」の仮想形「ナロ」が、当該方言での「ゴト」の述語形式「コ゜ヂャ」に接続して「様態」を表している。(350b)は、「する」の仮想形「ス」が「コ゜ヂャ」に接続して「希望」を表している。岡児ヶ水方言では、仮想形に「ゴト」が接続して「様態」も「希望」も表していることがわかる。

また、鹿児島県南さつま市金峰町方言においても、同様の「ゴト」の調査結果を得た[10]。金峰町方言では、平方言同様、話者が行為を実現できない事態で「希望」として「ゴト」が用いられている。

(351) 金峰町方言における「ゴト」の使用

a. 【様態】雨が　降ろーゴチャンねー（雨が降りそうだね）

b. 【希望】あん子ー　かーさんに　おわすゴチャンなー[11]

（（子が母を探すテレビドラマを見て）あの子を母さんに会わせたいな）

これらの鹿児島県の方言では、「様態」であっても「希望」であっても、仮想形に「ゴト」が接続している。「動詞仮想形+ゴト」が一体となって「様態」と「希望」のどちらの意味も表しており、文脈によって、どちらかに区別していると考えられる。

福岡市方言の壮年層の方言を記述した坪内(2005)は、7.2.1.節でみた通り、「ゴト」に連体形だけではなく、仮想形での接続が可能であると述べている。これは、鹿児島県の方言と同じく、「動詞仮想形＋ゴト」が一体となって、文脈によって意味を表し分けているといえる。ただし、福岡市方言では、明確な「希望」の意味では用いられていないということが、鹿児島県の方言と異なる。

原田(2014)は、同じ福岡市方言ではあるが、若年層の「ゴト」の使用を記述する中で、「ゴト」に動詞の連体形が接続したときは「様態」、仮想形が接続したときは「希望」というように、意味を形態で分けていることを示している[12]。原田(2014)の指摘する若年層の方言では、「推量」の意味で用いられた仮想形は「ゴト」に接続しない。

平方言も、原田(2014)が示すような、意味と形態の対応がみられる。「様態」では「ゴト」に動詞の連体形が接続し、「希望」では動詞の仮想形が接続する。さらに、平方言では、この「希望」は、話者自身では実現できない事態も表すことが可能な、明確な「希望」を表す形式として用いられている。文脈ではなく形態によって、「ゴト」の意味の区別がなされていることがわかる。

以下に、各方言での意味と形態の対応をまとめた図を示す。九州方言の「ゴト」の用法をみたとき、意味と形態の対応から 3 つのグループに分けることができる。

	福岡市方言、天草方言 深海方言	岡児ヶ水方言 金峰町方言	平方言 福岡市若年層方言
様態	連体形／仮想形	連体形／仮想形	連体形
希望	仮想形　(様態的な希望)	仮想形	仮想形

表 15　各方言における「ゴト」の意味と形態の対応

7.4. まとめと今後の課題

九州方言の「ゴト」の用法は、これまで「様態」と「希望」の用法があることは指摘されつつも、その用法がそれぞれの方言で異なっている様相を示されてはこなかった。

本章では平方言の「ゴト」について、「様態」と「希望」の用法をそれぞれ記述し、特に「希望」を他の九州方言と比較して、その様相が他方言とは異なることを考察した。平方言の「希望」の「ゴト」は、共通語「タイ」に対応するような、明確な「希望」を表す形式であり、あらゆる文脈で用いられている。

そして、平方言の「ゴト」は、「様態」では名詞+ノ、動詞と形容詞の連体形が接続し、「希望」では動詞の仮想形が接続する。「様態」と「希望」が接続する形式によって分かれており、意味の区別が形態にも対応している。

本章では、「ゴト」における「様態」と「希望」の、それぞれの用法の考察に重きを置いたため、両者の関係については、十分な考察が加えられていない。また、「ゴト」が九州地方で地域差をもって用いられていることも、その分布を示すだけにとどめている。これらのことは、今後の課題とする。

---

[1] 住田(1983)では，「ゴト」の意味を「比況表現」「様態を端的に指示する表現」「希望表現」「推測表現」という 4 つに分類している。本稿では，「希望表現」以外の 3 つを「様態」としてまとめて考察を行う。

[2] この述語形式「ゴチャル」は，副詞句を作る二形式のうち，「ゴテ」に「アル」が接続してできた形式である。/gote#aru/の形態素境界の/tea/という母音連続は，縮約した場合，[tʲa]という音になる。この音は平方言では用いられておらず，音声体系の「空き間」になっている。そこで，[tʲa]ではなく，平方言の音声体系にある[tɕa]（/tja/）という類似した音で発音し，「ゴチャル」（/gotjaru/）という語形ができたと考えられる。

[3] 「ゴチャル」を用いずに，/huroo/によって「降るだろう」という様態的な「推量」を表すことが，平方言では可能である。/hurugotjaa/と/huroo/の違いは，話者の証拠性による認識の違いであると考えられる。

[4] インフォーマントの内省によると，主語が一人称のときには「あゆんゴテなった」（歩きそうになった）という文の方が，表現として自然であるとのことであった。その場合でも「様態」には連体形で接続している。

[5] 原田(2014:17)では，福岡市若年層方言では，「様態」と「希望」のどちらであっても，「ゴトない」という形式は非文法的であることが示されている。

[6] 福岡県，佐賀県，長崎県などの九州地方北西部には，これらの形式に加えて，「イキタカ」などの/-(i)taka/の形式が併存している。

[7] インフォーマントに確認したところ，平方言では，この文の/mot-u/は「（鶏が）産む」の意味であり，「（話者自身が）所有する」の意味ではないとのことであった。使役の派生接尾辞/-(s)ase-/は母音語幹であるため仮想形が/-asuu/となり，/-asu(u)goto/となる。

[8] 九州方言学会編(1991:520)に，平方言と同じく「ゴト」で明確な「希望」を表すことができる鹿児島県岡児ヶ水方言でも/-(i)taka/の形式が，「最近いくらか耳にする程度で」一

般的に用いられていないことが述べられている。

[9] 松尾弘徳氏（鹿児島国際大学）と共同で行った鹿児島県内での方言調査（2010 年 9 月，および 2011 年 3 月実施）で，以下の地域では「動詞仮想形＋ゴト」が「希望」で用いられることを確認した。調査地点は，鹿児島市喜入町，伊佐市，指宿市，川内市，南さつま市，鹿屋市，垂水市である。

また，鹿児島県甑島方言調査（2011 年から 2014 年まで実施）でも，同様の調査結果を得た。この調査結果は森他編(2015)にまとめている。

[10] インフォーマントは，昭和 4 (1929)年生，女性。鹿児島県南さつま市金峰町の生え抜きの話者である。

[11] 平方言でも「会わすゴチャー」という言い方で，この例文と同様の意味を表せる。

[12] 原田(2014)では，さらに「様態」の「ゴト」は語であり，「希望」の「ゴト」は/-(j)oogoto/という接辞であると分析し，それが「後接語」から「接尾辞」という変化と対応することを述べている。

8. 宇久町平方言の可能形式

8.1. はじめに

平方言には、以下のような可能形式がみられる。用例はまず平方言を示し、後の丸括弧内に共通語訳を示す形で挙げる。

(352) a. どがんな　じーでん　読まユー
（どんな（難しい）字でも読むことができる）
b. 船ば　たのじょったてん　すぐ　乗らレタ
（船を予約していたから、すぐ乗ることができた）
c. 独りで　入りキル　わけよ
（（お風呂には）独りで入ることができるわけだよ）

(352a)は、「学習して得た知識によって、どんな難しい字でも読むことができる」ということを表している。(352b)は、「事前に船を予約していたという状況によって、すぐ乗ることができた」ということを表している。(352c)は、「年を取って足腰が弱っているとはいえ、自分の身体能力によって、独力でお風呂に入ることができる」ことを表している。(352a,c)はいわゆる「能力可能」であり、(352b)はいわゆる「状況可能」である。

九州方言が「能力可能」と「状況可能」で形式を使い分けることは、九州方言学会編(1991)をはじめ、数多くの先行研究で述べられている。しかし、平方言を調査していくと、「能力可能」や「状況可能」と考えられる文であっても、形式を使い分けていないように思われる文がある。

(353) a. 【能力可能】いっぎれして　{走らエン／走らレン}
（息切れして（これ以上）走ることができない）
b. 【状況可能】太郎わ　痛かったろどしたろ　{行かユー／行かルー}だい
（太郎は（腹が）痛かろうが何だろうが、（遊びには）行くことができるよ）

可能表現の調査において、提示した調査文を「能力可能」ととるか「状況可能」ととるかは、インフォーマントの解釈次第で変わってしまう。木部(2004：3-4)では、調査者の想定と違う条件でインフォーマントが調査文を解釈した場合、意図通りでない可能表現の回答が得られてしまうという問題点があることを述べている。

本章では、ひとつの可能形式が「能力可能」にも「状況可能」にも用いられることに対して、その可能形式が、どのような場面で使用されるのかを考察する。そして、上記の問題点も考慮したうえで、話者がどのように可能形式を使い分けているのかを考察する。

8.2. 「可能」の接尾辞

8.2.1. 可能の接尾辞の接続

平方言の動詞は、大きく子音語幹活用動詞（以下、子音語幹動詞）と母音語幹活用動詞（以下、母音語幹動詞）に分かれ、その他、カ行変格活用（以下、カ変動詞）、サ行変格活用（以下、サ変動詞）の変格活用動詞がある。以下に、それぞれの動詞の一例を挙げる。

(354) 子音語幹動詞：kak-'書'、kas-'貸'、mat-'待'、sin-'死'、nom-'飲'、orab-'叫'、
hjar-'入'、kuw-'食'、okir-'起'
母音語幹動詞：n{e/u}-'寝'、ak{e/u}-'開'
カ変動詞：k{o/i/u}-'来'
サ変動詞：s{e/i/u/ɸ}-'為'

これらの動詞語幹に屈折接尾辞と派生接尾辞が接続する。母音語幹動詞、カ変動詞、サ変動詞は、あとに続く接尾辞によって、母音が交替する。

これら 4 種類の動詞に、可能の形式が接続する。可能形式のひとつである/-(j)aje-/（ヤユル）は、子音語幹を持つ、子音語幹動詞とサ変動詞には/-aje-/で接続し、母音語幹動詞は/e/の母音語幹に、カ変動詞は/i/の母音語幹に、/-jaje-/で接続する。もうひとつの可能形式の/-(r)are-/（ラルル）は、子音語幹を持つ動詞には/-are-/で接続し、母音語幹動詞は/e/の母音語幹に、カ変動詞は/o/の母音語幹に、/-rare-/で接続する。さらに別の可能形式である/-(i)kir-/（キル）は、子音語幹動詞には/-ikir-/で接続し、母音語幹動詞の/e/の母音語幹、カ変動詞とサ変動詞の/i/の母音語幹に、/-kir-/で接続する。

3 つの可能形式のうち、/-(j)aje-/と/-(r)are-/は派生してできた動詞語幹末が母音になるので、母音語幹動詞と同様の活用をする。/-(i)kir-/は語幹末が子音になるので、子音語幹動詞と同様の活用をする。

/ake-(j)aje-/（「開ける＋ヤユル」）を例に挙げると、「過去」の接尾辞/-ta/が接続する場合、/ake-jaje-ta/になる。「非過去」の接尾辞/-(r)u/が接続する場合、母音語幹動詞と同様、語幹が/ake-jaju-/になり、//ake-jaju-ru//になる。さらに、多くの場合、平方言は文末で最終音

節末の母音 u が脱落する。脱落した際は、その子音の音声的特徴にしたがって、特殊モーラで言い切り、/hjar-u/'入る'、/aku-ru/'開ける'、/ku-ru/'来る'、/su-ru/'する'などの r 音であれば、前の母音が長母音となる。したがって、//ake-jaju-ru//は/akejajuu/になる。「ラルル」の場合も同様で、//ake-raru-ru//は/kakaruu/になる。

8.2.2. 動詞派生接尾辞からの類推

平方言では「読むことができる」ことを「ヨマユル」と言い、「ヨミユル」と言うことはない。『方言文法全国地図』第 173 図「読むことができる〈能力可能〉」をみると、長崎県辺りの地域では「ヨマユル」と「ヨミユル」の両形式が挙げられている。九州方言学会編(1991)、愛宕(1978)、木部他(1988)でも、同地域の方言を調べたなかで、ア段音接続とイ段音接続の「ユル」に地域差があることを述べている。

この「ユル」は「得る」由来の形式であるため、「ヨミユル」（読み得る）などのイ段接続の「ユル」が元々の形式であったと考えられる。ア段音接続の「ユル」という形式について、愛宕(1978)、神部(1992)は、否定文での「読まエン」を取り上げ、「読みワエン」のような「は」助詞の挿入が観察されることを述べている[1]。九州方言学会編(1991:224)では、この「は」助詞の挿入が、肯定文ではみられず、否定文でみられる現象であると述べている。愛宕(1978 : 140)は、「は」助詞挿入の形式である「行きワエン」が「行きゃエン」になり、「行かエン」になったという変化を述べている。

平方言では、この「は」助詞挿入の形式はみられない。話者には、動詞語幹にア段音で接続する形式と考えられている[2]。

(355) a. 【子音語幹動詞】書かエン／*書きワエン（書くことができない）
b. 【母音語幹動詞】開けヤエン／*開けワエン（開けることができない）

このような変化が起こったとき、肯定文は「書きユル」で、否定文は「書かエン」となり、肯否によって接続が異なることになる。そこで平方言では、否定文の接続に合わせ、子音語幹動詞の語幹にア段音接続の「ユル」が接続した。これにより、子音語幹動詞にア段音まで含む/-aje-/という形式が接続すると捉えられたと考えられる。

この形式が母音語幹動詞に接続するときに、/ake-jaje-/'開'のように、/j/を挿入する形式で用いられるようになった。そうして、/-(j)aje-/という接尾辞ができたと考えられる。

(356) a. 【母音語幹動詞】力の　のして　ドアの　開けヤエン
（力が無くて、ドアを開けることができない）

b. 【カ変動詞】島に　きヤエン（（太郎はすぐには宇久）島に来ることができない）

このような変化があったのは、「可能」「受身」を表す/-(r)are-/や、「使役」を表す/-(s)ase-/といった、ヴォイスを表す他の動詞派生接尾辞からの類推もあったのではないだろうか。カ行変格活用動詞に属する「来る」以外の動詞は、/-(j)aje-/と/-(r)are-/が同じ語幹に接続している。以下に、それらの接尾辞を接続した動詞の活用表を示す。

(357) 平方言の動詞派生接尾辞の活用表

		可能	可能、受身等	可能	使役
	語幹	-(j)aje-	-(r)are-	-(i)kir-	-(s)ase-
子音	kak-'書'	kak-aje-	kak-are-	kak-ikr-	kak-ase-
母音	ake-'開'	ake-jaje-	ake-rare-	ake-kir-	ake-sase-
	aku-				
カ変	ko-'来'		ko-rare-		ko-sase-
	ki-	ki-jaje-		ki-kir-	
	ku-				
サ変	se-'為'				
	si-			si-kir-	
	su-				
	s-	s-aje-	s-are-		s-ase-

ア段音接続の「ユル」が//-(j)aje-//であるのに対し、イ段音接続の「ユル」は//-ije-//と考えられ、両形式は別の派生接尾辞であると考えられる。したがって、本章では/-(j)aje-/を「ヤユル」と呼び、「ユル」と区別して扱う。また、/-(r)are-/、/-(i)kir-/は先行研究に従い、「ラルル」、「キル」と呼ぶ。

なお、平方言では可能動詞を用いない。当該地域と同じ五島列島に位置する、福江市方言を調査した木部(2004：6)は、可能動詞は共通語的であるというインフォーマントの内省を述べている。平方言も同様であると考えられる。

8.3. 平方言の可能形式

8.3.1. 「可能」の条件スケール

渋谷(2006：65-66)では「可能であることの条件」を以下の 4 つに分類している。

(358) a. 心情可能
b. 能力可能[3]
c. 内的条件可能
d. 状況可能（外的条件可能）

上記の条件を、渋谷(1993：32-33)では「動作主体とそれぞれの条件との密着度（不可分性）」という観点で並べ、「可能の条件スケール」を設定している[4]。さらに、このスケール上で可能形式が用いられるときに、ひとつの形式が他の形式を飛び越えて用いられないことを指摘している。このスケールに、渋谷(2006)で示した条件をあてはめると、以下のようになる。

(359) 「可能の条件スケール」

←動作主体内部条件　　動作主体外部条件→

心情可能　—　能力可能　—　内的条件可能　—　状況可能（外的条件可能）

このスケールを用いて考察を進める。しかし、動作主体内部条件の極に置くものは、「心情可能」ではなく「能力可能」にする。その理由を説明するため、渋谷(2006：65)に示される「心情可能」の説明を以下に示す。

(360) 心情可能：動作主体の内部に永続的に存在する心情（性格）的な条件（性格や気持ち、勇気など）によって（可能／）不可能であることを主観的に述べるもの。否定文の場合、「～したくない」といった意味に近くなる。

渋谷(2006：68-70)では、大阪方言の「ヨー泳がん」（泳ぐことができない）などの、「ヨー」を取り上げ、この「心情可能」の説明をしている。この「ヨー」は、一人称現在否定文に限定される傾向があり、話し手の能力の有無を客観的に差し出すというよりも、話し手の気持ちを表す文としての側面が強くなることがあると述べている。渋谷(2006)では、「ヨー」のように、可能形式が話者の心情を含めて用いられることを「モーダル化」と呼

んでいる。渋谷(2006)では、可能形式が「能力可能」から「心情可能」へと変化し、その「心情可能」からモダリティ形式へと変化することを述べている。

しかし、渋谷(2006)の述べるような変化が起こることと、「心情可能」を可能の条件スケールに含めることは別問題であると思われる。話者の心情は、「能力可能」と「状況可能」にかかわらず、含めることができるものだからである。したがって、動作主体内部条件の極は「能力可能」と考える。

永澤(2004)は、渋谷(1993)を参考にしながら、「能力可能」から「状況可能」へのスケールを、その行為を可能にする要因別に 8 分類している。永澤(2004)は、渋谷(2006)よりも要因を細かく分けている。どのような要因が、平方言の可能形式の使い分けに関わるかを調べるために、永澤(2004)の分類を参考にする。

8.3.2. 「ヤユル」「ラルル」

それぞれの可能の意味で、平方言の「ヤユル」と「ラルル」が使用できるかを示していく。「キル」はインフォーマントにとって普段使用する形式ではないと判断されるため、この節では考察から除外し、後述する。永澤(2004)の分類を用いて、動作主体内部条件と考えられるものから、動作主体外部条件と考えられるものに向けて、順に挙げていく。

まず、動作主体の技能や獲得能力を表す「個々人の能力」について、用例を挙げる。これは渋谷(2006)では「能力可能」にあたる。

(361) 【個々人の能力】〔技能；獲得能力；知識；心情自制力など〕

a. あんま　はよなかてん　{走らエン／*走らレン}〔技能〕
（（足が）あんまり速くないから、（100 メートルを 11 秒で）走ることができない）

b. 太郎わ　あひが　はやかてん　{走らユイ／*走らルー}〔技能〕
（太郎は足が早いから、（100 メートルを 11 秒で）走ることができる）

c. とてもじゃなかばって　{弾かエン／*弾かレン}〔獲得能力〕
（（私はピアノを）とてもじゃないが弾くことができない）

d. おとろしゅして　{ひゃらエン／*ひゃらレン}〔心情自制力〕
（（私は独りではお化け屋敷に）恐ろしくて入ることができない。）

「個々人の能力」では「ヤユル」が用いられ、「ラルル」は用いられない。

次に、「生物学的能力」の用例を挙げる。これは上記の「個人」に対して、生物学的な「種」の能力を表す。

(362) 【生物学的能力】

a. 人わ　空わ　{飛ばエン／*飛ばレン}（人は空を飛ぶことができない）
b. カラスは　{飛ばユー／*飛ばルー}（カラスは（空を）飛ぶことができる）
c. ものば　{ゆわエン／*ゆわレン}（（カラスは）言葉を話すことができない）

「生物学的能力」でも「ヤユル」が用いられ、「ラルル」は用いられない。

「経済力」は、動作主体の金銭的な支払いの能力を表している。「経済力」は、個人が必ずしも継続して持つ能力とは限らないが、個人にある程度の期間に付与されている能力である。

(363) 【経済力】

a. 金もーじゃてん　なーんでん　{買わユー／*買わルー}
（（私は）金持ちだから、何でも買うことができる）
b. あの人わ　びんぶじゃてん　なんも　{買わエン／*買わレン}もんね
（あの人は貧乏だから、何も買うことができないものね）

「経済力」でも「ヤユル」が用いられ、「ラルル」は用いられない。

永澤(2004)では「身体の状況」を、動作主体の身体にどれくらいの期間継続して保たれているかによって、「中・長期的」と「短期的」に分けている。「中・長期的」は一定期間の状況を表すのに対し、「短期的」は一過性の状況を表している。ここからは、渋谷(2006)の「内的条件可能」にあたる。

(364) 【身体の状況（中・長期的）】

a. いっも　稽古しちょーてん　{さーユーだい／*さールーだい}〔体力〕
（いつも稽古をしているから、（何キロでも走ることが）できる）
b. 目の　わるなったてん　じーわ　{読まエン／*読まレン}〔視力〕
（（年を取って）目が悪くなったから、（新聞の）字は読むことができない）

c. あーしゃ　怪我しちょーばって　{走らユー／*走らルー}〔怪我〕
（足は怪我しているけれども、走ることができる）

「中・長期的な身体の状況」の場合、「ヤユル」が用いられ「ラルル」は用いられない。

(365) 【身体の状況（短期的）】

a. いっぎれして　{走らエン／走らレン}〔疲労〕
（息切れして（これ以上）走ることができない）

b. ハハ　ゆーおーばって　あんなら　まだ　{走らユー／走らルー}じゃろだい
（（太郎は息切れして）ハアハア言っているけれど、あの様子ならまだ走ることができるだろうよ）〔疲労〕

c. 腹ん　痛かばって　遊びわ　{行かユイ／行かルイ}よ〔体調〕
（（私は）腹が痛いけれども、遊びには行くことができるよ）

d. 太郎わ　痛かったろどしたろ　{行かユー／行かルー}だい〔体調〕
（太郎は（腹が）痛かろうが何だろうが、（遊びには）行くことができるよ）

e. すわっちょって　{たっあがらエン／たっあがらレン}〔足のしびれ〕
（（私は正座で）座っていて（足がしびれて）、立ちあがることができない）

疲労や体調、足のしびれなどの「短期的な身体の状況」の場合、「ヤユル」と「ラルル」のどちらも用いられる。「長距離を走ること」や「足の怪我が治ること」は、数日でなせることではなく、ある程度の期間が必要である。それに対して、「息切れをすること」や「正座で足がしびれること」は、数分で治まることであり、「腹が痛いこと」も数日続くことではない。このように動作主体の状況が短期間のものであるとき、「ラルル」が用いられている。

「外的条件」とは、自然現象や予定など、動作主体自身ではないところに可能となる条件があることを表している。ここからは、渋谷(2006)の「状況可能」にあたる。

(366) 【外的条件】〔自然現象；予定；その他の外的条件〕

a. 今日わ　凪じゃてん　{行かユー／行かルー}〔自然現象〕
（今日は凪だから（福岡に）行くことができる）

b. なんの　たこして　{おえがエン／おえがレン}〔自然現象〕
（（今日は）波が高くて泳ぐことができない）

c. 用のあって　わがいえ　おらなじゃてん　{行かエン／行かレン}よ〔予定〕
（（私は）用事があって、我が家にいなくてはならないから、（遊びに）行くことができないよ）

「外的条件」では、「ヤユル」も「ラルル」も用いられている。

「自発的心情」は、「外部条件」よりも動作主体内部条件に寄った意味とも考えられるが、その心情を引き起こすきっかけは、動作主体の意志とは離れたところにあるという点で、動作主体外部条件に寄った意味だと考える[5]。

また、次の「動作対象の属性」は、動作主体の意志とは無関係である点で、動作主体外部条件に位置すると考える。

(367) 【自発的心情】
派手か服わ　とてもじゃなかば　{着らエン／着らレン}よ
（派手な服はとてもじゃないが着ることができないよ）

(368) 【動作対象の属性】

a. こんみんわ　つくひかてん　{飲まユイ／飲まルー}よ
（この水はきれいだから飲むことができるよ）

b. 今　こっきたばっかーじゃけん　よー　{書かユー／書かルー}[6]
（（ペンを）今買ってきたばっかりだから、（すらすら）書くことができる）

c. こら　十年前んとじゃもん　なんの　{書かユッ／書かルー}かよ
（これ（ペン）は十年前のものだもの、どうして書くことができる（と思う）かよ）

「自発的心情」と「動作対象の属性」でも、「ヤユル」と「ラルル」が用いられている。

以上をみると、「ラルル」が動作主体外部条件で用いられるのに対し、「ヤユル」は動作主体の条件に関係なく、可能表現一般に広く用いられているようにみえる。

しかし、「ラルル」のみが用いられ、「ヤユル」が用いられない文もある。次節では、どちらかにしか用いられない文をみて、「ヤユル」と「ラルル」の意味を考察する。

8.3.3. 条件による形式の区別

平方言では、以下の文で「ヤユル」を用いない。

(369) a. 【外的条件】船の　出んてん　{*乗らエン／乗らレン}
（（今日は台風で）船が出ないので、（船に）乗ることができない）

b. 【動作対象の属性】よそわひかけん　{*飲まエン／飲まレン}
（この水は汚いから飲むことができない）

「船に乗ることができないこと」や「水が飲むことができないこと」という不可能の事態は、「船が出ないこと」や「水が汚いこと」に原因がある。これらの原因は動作主体内部の能力でどうすることもできないことである。

「ヤユル」と「ラルル」のどちらも用いられる文を改めてみると、不可能の事態の原因を、動作主体内部の能力次第で、可能にもできる事態であることがわかる。

(370) a. 【外的条件】なんの　たこして　{おえがエン／おえがレン}〔自然現象〕
（（今日は）波が高くて泳ぐことができない）（(366b)再掲）

b. 【自発的心情】派手か服わ　とてもじゃなかば　{着らエン／着らレン}よ
（派手な服はとてもじゃないが着ることができないよ）（(367)再掲）

「海の波が高いこと」は危険な状況ではあるが、必ずしも「泳げないこと」にはならず、「派手な服を着ること」も恥ずかしさがあるだけで、「着られないこと」にはならない。どちらの用例も、動作主体である話者自身が、その能力を自分が持っていないと考えているところから、不可能が用いられている。この不可能の原因が、話者自身の内部にあると述べるために「ヤユル」が用いられていると考えられる。

渋谷(2002 : 12)は、状況可能を主体の行動決定権の有無によって二分し、典型的な「状況可能」を動作主体の行動決定権がないものと述べている。

(371) a. 今日は忙しいから手紙が書けない
（書くか書かないかの最終的な選択は主体に任されている）

b. ペンがないから手紙が書けない（書くという選択肢は主体に与えられていない）

（渋谷(2002)用例(25)(26)）

(370)で示した事態は、動作主体が最終的に、その動作を行うか決定できる事態であるため、(371a)に当たる。渋谷(2002)は、(371b)を典型的な「状況可能」だと述べている。動作主体の行動決定権がないということは、動作主体内部の能力ではどうにもできないことであるため、「状況可能」の「ラルル」だけが用いられると考えられる。

しかし、(371)の用例を平方言では、どちらの文にも「能力可能」の「ヤユル」が用いられる。

(372) a.　忙ひかてん　書かエン
（（今日は）忙しいから（手紙を）書くことができない）
b.　かっもんの　なかけん　書かエン
（書くものがないから、書くことができない）

これは、「手紙を書くことができないこと」の原因を、自分の責任と捉え、その責任を果たす能力がなかったと考えているためだと思われる。動作主体の行動決定権がないと考えられる事態であっても、動作主体に落ち度があると捉えられる場合には、「ヤユル」が用いられる。

(373) a.　金庫の　鍵ば　のーならかしたけん　開けヤエン
（金庫の鍵をなくしたので、（明日は金庫を）開けることができない。）
b.　ぜんの　なかてん　買わエン
（（手元に）お金がないから、買うことができない）

それに対して、動作主体にまったく落ち度がないときには、「ラルル」しか用いられない。

(374) a.　*泳がエンじゃった／泳がレンじゃった
（（プールが改装中で）泳ぐことができなかった）
b.　あかんの　こまかてん　{*見らエン／見らレン}
（灯りが小さいから、字を見ることができない）

動作主体の落ち度ではないことが原因で、行動決定権がないということは、動作主体内

部がその事態に一切関わっていないことを表す。このことは、動作主体外部条件の極に位置していると考えられる。「ラルル」は、動作主体外部条件による事態であることを表している形式であるといえる。

ただ、動作主体がいる以上、文脈の中で動作主体内部の条件が一切関わらないというのは難しい。「ヤユル」が広い範囲で用いられていることは、その事態が動作主体内部条件による事態であることを表している。「個々人の能力」のような、動作主体内部の条件としか捉えられない事態では、「ラルル」は用いられない。

平方言では､動作主体がその事態をどのような条件による事態と捉えているかによって、「ヤユル」と「ラルル」を区別していると考えられる。「ヤユル」は事態が動作主体内部に属する可能の事態であることを表している。それに対して、「ラルル」は事態が動作主体外部に属する可能の事態であることを表している。

8.4. 平方言の「キル」

平方言の「キル」は、調査時にこちらから「キル」が使えるか聞き返さない限り、回答されなかった。インフォーマントにとって「良か言葉」という対外的な場面で用いる言葉であって、普段は使わないという回答を得た。話者は「キル」を、伝統的な平方言ではない、最近の形式であると考えている。

九州方言の「キル」が若い世代に多く使用されているため、新しい可能形式であるということは、九州方言学会編(1991)、愛宕(1978)、神部(1992)に述べられている。神部(1992：307-308)では、「キル」は、「（最後まで）投げきる」のような完遂・完行の意味から、意志や能力の完全な発揮を表して、「能力可能」の形式になったと述べている。

この「キル」は、調査時にあまり使用されなかったが、自然談話のコーパス資料の中では、少なからず用いられているのが確認できる。以下に示す自然談話コーパスは、2013 年 10 月に行った、生え抜きの平方言話者の 80 代の女性 3 名による談話の資料である[7]。用例後の括弧で、どの話者が発話したかを示している。

(375) a. ホームに　入るのわ　もー　なごって　一週間　もー　一週間　おれば　おりキラン
（ホームに入るのはもう長くて、一週間、もう、一週間いると（それ以上）いることができない）（A）

b. 自分の　あれば　わからんじ　用意も　しキランじゃったっちゃん
（（突然具合が悪くなって）自分のあれこれを分からなくなって、用意もできなかったんだよ））（A）
c. 覚えキランもんね（（ダンスを）覚えることができないものね）（B）

以下に示す用例は、調査時に別の形式を回答されたものを、「良か言葉」で使用できるかと聞き直したものである。

(376) a. おひかてん　はしーキラン
（（足が）遅いから（100 メートルを 11 秒では）走ることができない）
b. 弾きキー（（私はピアノを）弾くことができる）
c. じーば　書きキラン（（うちの孫はまだ）字を書くことができない）
d. びんぶーじゃけん　なんも　買いキラン
（（私は）貧乏だから何も買うことができない）
e. いっも　稽古しちょーけん　しーキーだい
（いつも稽古をしているから、（何キロでも走ることが）できる）

(376)に挙げた用例は、永澤(2004)の(361)「個々人の能力」から(364)「身体の状況（中・長期的）」までに分類されるものである。これらの意味は、動作主体内部条件に偏る意味である。(365)「短期的な身体の状況」以降の、動作主体外部条件に偏る意味では、「キル」は用いられない。

木部(2004：5-6)では、長崎市方言の「キル」について、動作の実現に動作主体の労力が必要かどうかで、「状況可能」で使用できるかどうかが変わると述べている。労力が必要な場合は「キル」が用いられ、不要な場合は用いられないと述べている。以下に、木部(2004)に挙げられている長崎市方言の例を示す。

(377) a. 【状況可能に「キル」が用いられるもの】
（今は時間がないので）読マレン／読メン／読ミキラン
b. 【状況可能に「キル」が用いられないもの】
（プールが休みで）泳ガレン／泳ゲン

労力が必要であるということは、動作主体の能力を用いることにつながるため、「状況

可能」であっても動作主体内部条件の側にそれだけ近寄るということである。長崎市方言の「キル」の使用は、平方言の「ヤユル」が、その可能の事態を動作主体内部に原因があると捉えると使用ができるということと類似している。

平方言の「キル」は、その事態が動作主体内部に原因があると捉えられるときでも、「状況可能」と思われる文では用いられない。

(378) a. いっぎれして　{走らエン／走らレン／*はしーキラン}
（息切れして（これ以上）走ることができない）（(365a)再掲）

b. いっぎれわ　しーよーばって　まだまだ　{走らユイ／走らルイ／*はしーキー}よ
（息切れはしているけれど、まだまだ走ることができる）

長崎市方言の「キル」と異なり、平方言の「キル」は、動作主体内部条件の極に位置する「能力可能」でなければ使用できない。動作主体の能力による動作の完遂という面を、平方言の「キル」は持っていると思われる。「状況可能」と思われる文でも用いられる「ヤユル」に対して、「キル」は明確に「能力可能」であることを明示している形式である。

8.5. まとめ

本章では、平方言の可能形式の「ヤユル」と「ラルル」と「キル」を考察した。「ヤユル」は動作主体内部条件を表す形式であり、「ラルル」は動作主体外部条件を表す形式である。「状況可能」と思われる文であっても、話者自身が、動作主体内部にその原因があると考える場合、「ヤユル」が用いられる。「キル」は、動作主体の能力による動作の完遂という面があり、「能力可能」でしか用いられない。

平方言の「ヤユル」は、「は」助詞を挿入した形式を元としながらも、もはや/-(j)aje-/という一形式で用いられている。この変化は、平方言におけるヴォイスに関わる他の動詞派生接尾辞からの類推ではないかと考えられる。

今回扱った「可能」は、その動作が潜在的に事態を実現できる可能性を持っていることを述べる表現であり、「潜在可能」と呼ばれる。それに対し、実際にその実現がなされたかを述べる表現を「実現可能」と呼ぶ。平方言での「実現可能」は、「ヤユル」を用いている。以下に、例を挙げる。

(379) a. 持たエンかち　思っちょったばって　{持たエタ／*持たレタ}
（（この荷物を）持ち上げられないかと思っていたけど、持ち上げることができた。）

b. 今日わ　よー　泳がエヨイよ（（太郎は）今日は上手に泳ぐことができているよ）

c. 今日わ　じょーとーに　作らエオイよ
（（太郎はケーキを）今日は上手に作ることができているよ）

平方言での可能表現を考察するためには、このような「実現可能」も含めて記述する必要がある。本章では今後の課題とし、改めて考察を行いたい。

---

[1] 天草方言を調べた神部(1992：304)では、「しエン」と「しワエン」の両形式の使用のうち、「は」助詞挿入の「ワエン」の形式の方が一般的であると述べている。

[2]平方言のインフォーマントからも、「書かエン」を最も使用するが、「書きゃエン」を使用することもできるという回答を得た。

[3] 渋谷(2006：65-66)では、「能力可能」に 4 つの下位分類をたてている。「生得能力と獲得能力」、「肉体的力と知識」、「（人間の能力と）人間以外の能力」、「種の能力（総称）（と個体の能力）」の 4 つである。

[4] 井島(1991：157)で述べる「内因可能」と「外因可能」も、渋谷(1993)で述べる「動作主体内部条件」と「動作主体外部条件」と似た観点であると考えられる。ただし、両氏でその含む意味分類が異なるため、本章では、渋谷(1993)を基に考察を行う。

[5] 渋谷(1993：28-29)では「外的強制条件」と分類され、これは「可能の条件スケール」の「外的条件」より動作主体外部条件に寄った位置にある。その外部条件が動作主体の意志の介入を許さないかたちで働くためであると述べている。

[6] この文を平方言で発話してもらった時、「カクー」（書くことができる）という可能動詞も回答された。調査中に可能動詞の使用を尋ねても、使用しないという回答であった。この文以外では調査が不十分であるため、本章では考察の対象から外し、今後の課題とする。

[7] 3 名の話者の生年月日、外住歴を示す。話者 A は 1928（昭和 3）年生まれの女性で、生まれてからずっと平郷に住んでいる。話者 B は 1930（昭和 5）年生まれの女性で、0 歳から 16 歳まで平郷、17 歳の時に佐世保市、18 歳から 19 歳まで長崎県北松浦郡鹿町（現、佐世保市鹿町）、19 歳から現在まで平郷で生活している。話者 C は本稿の主なインフォーマントとして注 2 に示した女性である。この談話コーパスの中でも、話者 C は「キル」を使用していない。

結語

9. まとめと今後の課題

本論文では、宇久町平方言を包括的に記述することを行った。そして、その平方言を含む五島列島方言の文法現象を通して、共通語とは異なる文法体系をもつ方言について考察を行った。その結果をまとめるとともに、今後の課題について述べる。

第 1 部で、宇久町平方言を包括的に記述した。「音韻論」「形態論」「格」「単文」「複文」という 5 つの章を立て、それぞれに記述を行った。

「2. 音韻論」では、狭母音の脱落、連母音の融合、主題の//=wa//の同化、与格助詞/=ni/の削除と代償延長などの音韻規則があることを述べた。また、有元(2007)の「テ形現象」も、改めて調査を行った。特殊モーラ/H/の解釈についても考察を行い、音韻表記レベルで/H/を設定する利点について述べた。

「3. 形態論」では、下地(2018)に示された言語形式の単位を参考に、品詞を定義した。動詞や形容詞の活用、それぞれの品詞の統語的特徴について述べた。「進行」の/-wor-/にいくつかの異形態があり、近隣の藪路木島方言と異なり、規則性が見出しにくいことも述べた。形容詞連用形に「ニ」が接続して、副詞的用法に用いられている形式があり、その形式についても考察を行った。

「4. 格」では、平方言の格助詞の一覧を示した。そして、実際の用例に基づきながら、それぞれの格助詞の使用を述べた。

「5. 単文」では、ヴォイス、アスペクト、モダリティについて述べた。ヴォイスでは、「カラ」が受動文の動作主を示す形式として、広く用いられていることを述べた。モダリティは、対事的モダリティと対人的モダリティに分類し、それに属する形式を細かくみていった。対人的モダリティは特に終助詞を扱い、共通語にはみられない「ネヨ」という承接について考察を行った。そして、当該方言で命令によく用いられている「ネ」による命令を、「ヨ」がやわらげているという考察を行った。

「6. 複文」では、小西(2016)に示された分類を参考に、従属節を記述していった。実際の用例に基づきながら、その使用の頻度も考慮に入れて記述を行った。

第 2 部で、平方言の文法現象について、考察を行った。共通語にはみられない文法現象を扱い、方言の文法体系を明らかにした。

「7. 宇久町平方言の「ゴト（如）」の用法」では、平方言で連体形に接続する「様態」

と仮想形に接続する「希望」とで、形態と意味の対応があることを示した。鹿児島県方言では、「様態」にも仮想形が用いられており、文脈による判断がされている。平方言の「希望」の「ゴト」は明確な「希望」であって、曖昧に言うことのできない事態にも用いられる。福岡市方言でも「希望」の「ゴト」はみられるが、そのような事態には用いられない。九州方言のなかでの「ゴト」の様相について考察を行った。

「8.　宇久町平方言の可能形式」では、「ヤユル」が動作主体内部条件に属する形式であり、「ラルル」が動作主体外部条件に属する形式であることを考察した。話者が事態をどのように捉えているかによって、同じ文であっても「能力可能」と「状況可能」のどちらの解釈もできてしまう。そのため、話者の行動決定権や落ち度などから、どちらかの形式しか使われないものを考察した。また、「キル」についても、「能力可能」の形式であることを述べた。

以上のことを、この論文では述べた。以下に、今後の課題を述べる。まず、他の五島列島方言も包括的記述を行っていくことが必要である。同じ五島列島方言であっても、文法体系が異なっていることがある。同じ宇久町であっても、野方方言を記述した中村(2019)との差異もみられる。このような方言間のちがいを明らかにしていくことで、包括的記述の網目を細かく、密にしていくことができると考える。

また、本論文では歴史的な考察までいたることができていない。包括的記述を積み重ねていくことで、日本語を通方言的な視野でみることが可能となる。その通方言的な視野をもって、重層的な日本語史を描くことがこれからの課題となる。

【付録】小値賀町藪路木島方言の/(-a)-Ns-/を用いた行為指示

1. はじめに

1.1. 藪路木島方言にみられる/(-a)-Ns-/

長崎県北松浦郡小値賀町（おぢかちょう）に位置する藪路木島（やぶろきしま）の方言（以下、藪路木島方言）では、親しい目上に命令をする際に、「ンセ[1]」を用いる。以下に用例を示す。用例は、まず藪路木島方言の文を示し、括弧内に共通語訳の文を示す。

(380) a. まだあっとて いっぺ くぁンセよ（まだあるからいっぱい食べなさいよ）
b. こるば 持っち戻らンセ（これ（お菓子）を持って帰りなさい）

また、親しい目上に禁止を述べる際に、以下のように「ンスナ」を用いる。

(381) a. 書かンスナよ（書かないでくださいよ）
b. あんまる 飲まンスナ（（これ以上お酒を）あまり飲まないでください）

これらの形式をみると、(380a)の「命令」は/kuw-a-Ns-e/（食べなさい）、(381a)の「禁止」は/kak-a-Ns-una/（書かないでください）と分析できる。このように、当該方言の親しい目上に対する「命令」と「禁止」には、/(-a)-Ns-/という共通の形式が用いられている。

この形式は、近隣地域である宇久島の方言ではみられないものである。このように同じ五島列島の方言でも、島によって文法現象にちがいがあることがわかる。そのため、宇久町方言ではないが、ここに記述する。

1.2. 大分県方言にみられる/(-a)-Ns-/

この/(-a)-Ns-/について、九州方言学会編(1991:260)は、大分県臼杵地方で、「言わンシ」「聞かンスナ」のように「命令」と「禁止」に用いられ、大分県佐伯地方で「命令」に用いられることを述べている。日高(2013:3)は、「佐賀関町から佐伯市あたりの海岸部には、行カンセ（命令）・行カンスナ（禁止）など、軽い敬意を持った表現がある。が、直接相手に働きかける用法しかない」と述べている。同様の記述は、飯豊他(1983)でもみられる。以下は、松田他(1993)所収の大分県方言談話の用例である。

(382) a. ホンナラ　マー　アブネーケーナー、キオツケテカラ（中略）ボトゥボトゥカエランシェーエ。
（じゃあまあ危ないからなあ、気を付けて（中略）ぼつぼつ帰りなさいよ）
（p.92、南海部郡鶴見町大島・67 歳女性から 84 歳男性への発話）

b. アー　オンナ　オマエモ　イテコンシェー（ああじゃああんたも行っておいで）
（p.216、北海部郡佐賀関町一尺屋・40 歳女性から 37 歳男性への発話）

(382a)には、「来ンセ、センセ（しなさい）のように言う。やわらかい命令」という注が付されている。『新日本言語地図』第 78 図「行くな」には、同地域の三重町で「イカンスナ」がみられる。

1.3. 問題の所在

大分県方言での多くの指摘によって、/(-a)-Ns-/という形式について、「軽い敬意」や「やわらかい命令」という大体の意味は記述できていることがわかる。藪路木島方言の/(-a)-Ns-/も、親しい目上に行為指示をするときに用いられる形式であり、大分県方言でみられる形式に類似している。

この形式は、「命令」や「禁止」という行為指示で用いられる形式である。行為指示は、コミュニケーション上、配慮が必要になる表現である。この形式を詳しく記述することが、当該方言の言語運用を明らかにするうえで重要であると考える。そこで、本章では、藪路木島方言にみられる/(-a)-Ns-/について、この形式の意味を記述する。

2. 藪路木島方言について

2.1 藪路木島の位置

藪路木島は、長崎県西部の五島列島の北松浦郡小値賀町に属している島である。小値賀町は、小値賀島や野崎島、大島などの有人島と、小黒島、宇々島などの無人島を合わせた行政区域である。小値賀町の北には佐世保市（旧北松浦郡）宇久町に属する宇久島があり、南には南松浦郡新上五島町に属する中通島がある。図 4 に地図を示す[2]。藪路木島は、小値賀島から約 4km 離れたところに位置する。藪路木島は、1972（昭和 47）年に集団離島をして以来、現在無人島になっている。

2.2. 調査資料

本章では、面接調査資料と自然談話資料を使用する。面接調査は、2018 年 12 月、2019 年 9 月に行った。インフォーマントは、1944（昭和 19）年生まれの男性である。居住歴は、生まれてから 23 歳まで藪路木島、23 歳から 24 歳まで愛知県西春日井郡、24 歳から現在は長崎市である。両親とも藪路木島出身であり、当該方言の生え抜き話者といえる。



図 4　藪路木島の位置

自然談話調査は、2018 年 6 月に行った。上記のインフォーマントと、もう 1 名のインフォーマントによる自然談話である。もう 1 名のインフォーマントは、1950（昭和 25）年生まれの男性である。居住歴は、生まれてから 15 歳まで藪路木島、16 歳から 18 歳まで平戸市（旧北松浦郡）生月町、18 歳から 38 歳まで神戸市、38 歳から現在は佐世保市である。2 人は幼少時からの友人関係である。

2.3. 藪路木島方言の動詞活用

藪路木島方言の動詞は、子音語幹活用動詞と母音語幹活用動詞と変格活用動詞がある。以下に、これらの動詞の一例を示す。

(383) 子音語幹活用動詞：kak-'書'、okir-'起'[3]
母音語幹活用動詞：sime-'閉'
カ行変格活用動詞：k{i/u/o}-'来'
サ行変格活用動詞：s{i/u/e/φ}-'為'

これらの動詞に派生接尾辞と屈折接尾辞が接続する。派生接尾辞には、「受身・状況可能」の/-(r)aru-/、「能力可能」の/-(j)aju-/、「進行」の/-wor-/、「結果継続」の/-tjor-/などがある。屈折接尾辞には、「非過去」の/-(r)u/、「否定」の/(-a)-N/、「過去」の/-ta/、「命令」の/-(r)e/、「禁止」の/-(r)una/などがある。藪路木島方言の動詞語幹に、屈折接尾辞が接続した活用表を以下に示す。

(384)　藪路木島方言の動詞屈折接尾辞の活用表

		非過去	否定	過去	命令	禁止
	語幹	-(r)u	(-a)-N	-ta	-(r)e	-(r)una
子	kak-'書'	kak-u	kak-a-N	kee-ta	kak-e	kak-una
母	sime-'閉'		sime-N	sime-ta	sime-re	
	simu-	simu-ru				simuNna
カ	ko-'来'		ko-N		kee[4]	
	ki-			ki-ta		
	ku-	ku-ru				kuNna
サ	se-'為'		se-N		se-re	
	si-			si-ta		
	su-	su-ru				suNna
	s-[5]					

/(-a)-Ns-/は、これらの動詞語幹に接続する派生接尾辞である。/(-a)-Ns-/の/-a/は、「否定」と同様、動詞語幹が母音であれば省略される。カ行変格活用動詞であれば/ko-Ns-/'来'、サ行変格活用動詞であれば/se-Ns-/'為'となる。

/(-a)-Ns-/は、「命令」の/-(r)e/、「禁止」の/-(r)una/にのみ接続し、その他の屈折接尾辞には接続しない。また、動詞の命令形に接続することもできない。用例の*は、非文法的であることを示している。

(385) a.　*書かンシた（お書きになった）

b.　*けーセ（来なさい）

3.　/(-a)-Ns-/を使用する環境

3.1. 使用する相手

『方言文法全国地図』（以下、GAJ）では、B 場面、A 場面、O 場面に分けて、使用する形式を調査している。GAJ は、それぞれの場面の聞き手を、B 場面は「この土地の目上の人」、A 場面は「近所の知り合い」、O 場面は「親しい友達」と設定している。今回の面

接調査では、この三場面に対応する人物を実在の人物名に置き換えて行った。なお、三場面の人物設定で調査した結果、藪路木島方言では、場面ごとに二人称の形式を使い分けていることがわかった。以下に、その人物設定と二人称を示す。

(386) 調査時の人物設定

	聞き手	二人称
B 場面	1. めったに会うことのない、 ものすごく目上の人 2. よく会う目上の人	先生などの敬称
A 場面	3. 仲のいい目上の人 4. 仲のいい同世代の人 5. 自分のお父さん、お母さん	オマエ
O 場面	6. 普段あまり話さない同世代の人 7. 仲のいい目下の人 8. 普段あまり話さない目下の人 9. 自分の配偶者	ンー

二人称は、B 場面では「先生」などの敬称を用い、A 場面では「オマエ」、O 場面では「ンー」が用いられる。

この三場面で、「書け」という命令文が、どのように発話されるかを調査した。以下に、その結果を示す。

(387) B 場面：　書いちくれんですか、書いちくれませんか
A 場面：　けーちくれンセ、書かンセ、けーちくれれ
O 場面：　書け

/(-a)-Ns-/を使用した文は、上記の A 場面の人物に用いることがわかる。B 場面では、「ですか」や「ませんか」という共通語に近い形式を用いて、O 場面では動詞命令形「書け」を用いている。

なお、A 場面と O 場面では、「命令」の屈折接辞/-e/に続く念押しの形式を使い分けている。

(388) a.　【A 場面】書かンセ{エー／*アンイ／ヨ}

b.　【O 場面】書け{*エー／アンイ／ヨ}

A 場面では「エー」が用いられ、O 場面では「アンイ」が用いられている。「ヨ」がどちらにも接続できるのに対し、これらの形式は場面によって使い分けがみられる。この「エー」と「アンイ」は、「禁止」にも使用される。このときも、使い分けがみられる。

(389) a.　【禁止】行かンスナ{エー／*アンイ}

b.　【禁止】行くな{*エー／アンイ}

インフォーマントの内省によると、「エー」と「アンイ」は、「ヨ」よりも穏やかに聞き手へ念押しをしているという。話し手が聞き手を急かすような文脈であれば、「エー」は使用されない。これは「アンイ」も同様である。以下に用例を示す。用例の#は、非文法的ではないが、当該方言の意味解釈上で使用できないことを表している。

(390)　【何度も促して】はよ　行かンセ{#エー／ヨ}

3.2. A 場面の人物への命令文でのみの使用

多数の人物に対して、命令文を使用する場合も、/(-a)-Ns-/を用いることができる。しかし、A 場面に属さない人物がいる場合は、/(-a)-Ns-/を用いることができない。以下は、お土産のお菓子を集会に持参する場面での例である。

(391) a.　【目上だけの集まりに対して】

みんなで　食わンセ（みんなで食べなさい）

b.　【目上も後輩もいる集まりに対して】

おんつぁん　取らンセよ　みんな　取れよ

（おじさん、取りなさいよ、みんな、取れよ）

(391a)では/(-a)-Ns-/が皆に対して使用されている。しかし、(391b)では目上の「おんつぁん」と後輩の「みんな」とで別の文を作り、形式を使い分けている。

また、/(-a)-Ns-/は、動作主に話し手を含む文で使用できない。以下は、話し手が聞き手に対して、一緒に帰るよう依頼する文である。

(392)　戻って　ちっとばっかる　気細かって　一緒に　{*戻らンセ／戻っちくれンセ}

（帰るから、ちょっと心細いから一緒に帰りなさい）

上記の文では、「戻らンセ」を使用せず、「戻っちくれンセ」を使用する。「戻らンセ」を使用すると、「話し手と聞き手が戻る」ことになり、「戻る」の動作主が話し手と聞き手の 2 人となるからである。動作主に話し手を含んでいるとき、/(-a)-Ns-/を使用することはできない。一方、「戻っちくれンセ」は、「戻ってくれる」という聞き手からの受益表現に/(-a)-Ns-/を使用している形式である。このとき、「聞き手が話し手のために戻ってくれる」ことになり、「戻ってくれる」の動作主は聞き手のみとなっている。そのため、/(-a)-Ns-/を使用することができる。

3.3. 引用文での使用制限

/(-a)-Ns-/を使用した「命令」は、話し手が目の前の聞き手に命令する際にしか使用できない。以下の文は、インフォーマントが、年上の A に向かって、同級生の B が発話した命令文を直接話法で引用した文である。このような文で、/(-a)-Ns-/を使用することはできない。

(393)　*行かンセちゅ　いおった[6]（（B が A に対して）「行きなさい」と言っていた）

日高(2013)の指摘するとおり、/(-a)-Ns-/は、直接相手に働きかける場合でのみ用いられている。そのため、/(-a)-Ns-/は、相手に聞こえていないような独り言に用いることができない。

(394)　【先輩が落とし穴の上を通るのを、隠れて見ながら】

落ちれ／*落ちンセ

ただし、(393)と同じ場面であっても、「禁止」の場合は、直接話法のなかで用いることができる。

(395)　行くンスナちゅ　いおった

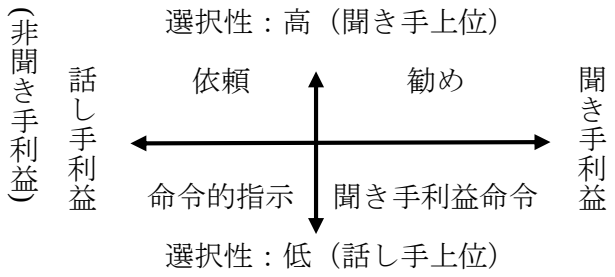
（（B が A に対して）「行かないでください」と言っていた）

4. /(-a)-Ns-/の用法

4.1. 行為指示表現の分類

3.で示したように、/(-a)-Ns-/は、行為指示で用いられる形式といえる。ここからは、森(2016)の分類を利用し、/(-a)-Ns-/の用法を整理する。森(2016:102-106)は、行為指示を「受益者」と「選択性」を基準にして、「命令的指示」、「聞き手利益命令」、「依頼」、「勧め」の 4 つに分類している。「受益者」とは、当該行為によって利益を得る人物のことである。「選択性」とは、当該行為をするか否かを、話し手が聞き手に選択させている度合いである。話し手の強制力が強ければ、聞き手は当該行為をしなければならない。その場合の聞き手の選択性は低いといえる。以下に、森(2016:103)に示されている図を引用する。

(396) 行為指示表現の枠組み



この分類を用いて、藪路木島方言の/(-a)-Ns-/の用法を記述する。

4.2. 「命令的指示」

「命令的指示」は、話し手に利益がある行為指示であり、聞き手の選択性が低い用法である。以下に、用例を示す。(397a,b)は「命令」の用例で、(397c,d)は「禁止」の用例である。

(397) a. 忘れんごつ　おり　電話せンセ（忘れずに俺に電話しなさい）
b. 開ければ　もとんごつ　閉めちょかンセえー
（（戸を）開けたら元のように閉めておきなさいね）
c. よそば　みンスナ（よそを見るな）
d. 痛かって　引っ張らンスナよ（痛いから引っ張るなよ）

/(-a)-Ns-/は、緊急事態でとっさに命令や禁止をする場合にも使用できる。

(398) a. 【先輩の運転する車に乗っていて、目の前に人が飛び出してきたのを見て】
止まらンセ（止まりなさい）
b. 【内緒話をばらされそうになって】
言わンスナ（言わないでください）

/(-a)-Ns-/は、話し手が聞き手を非難する文脈では、使用することができない。以下は、仕事をしない先輩に向かって、仕事をするように非難している文である。

(399) #そろそろ　仕事ば　してくれンセよ（そろそろ仕事をしてくださいよ）

4.3. 「依頼」

「依頼」は、話し手に利益があり、聞き手の選択性が高い用法である。以下に、用例を示す。「依頼」では、/(-a)-Ns-/が動詞語幹に接続するものと、受益表現の「てくれる」に接続するものがみられる。(400a,b)は動詞語幹に/(-a)-Ns-/が接続しており、(400c,d)は「てくれる」に/(-a)-Ns-/が接続している。

(400) a. ちょいと　かせせンセ（ちょっと手伝いなさい（加勢しなさい））
b. これ　余っちょっとて　おまえ　くぁンセよ
（これ余っているから、あなた、食べなさいよ）
c. よーじみちくれンセよ（（僕の書いた本を）読んでみてくださいよ）
d. おるが　はわくけん　あんちゃんな　雑巾で　ふぃーちくれンセよ
（俺が掃くから、兄さんは雑巾で拭いてくださいよ）

/(-a)-Ns-/は、聞き手の負担がかなり大きい行為と考えられる場合に使用できない。以下は、話し手が聞き手にお金を借りる文である。

(401) a. 【負担小】100 円　貸さンセ（100 円貸しなさい）
b. 【負担大】#10000 円　貸さンセ（1 万円貸しなさい）

(399)の「非難」や(401b)の「大金を貸すように言うこと」などは、話し手が上位者のように振る舞い、聞き手が話し手に対して不快に思う可能性がある。そのため、話し手が聞き手へより配慮をしなければならない場合である。このような場合に、/(-a)-Ns-/を使用するこ

とができないと考えられる。

4.4. 「勧め」と「聞き手利益命令」

「勧め」は、聞き手に利益があり、聞き手の選択性が高い用法である。以下に、「勧め」の用例を示す。

(402) a. 体んためね　朝めわ　はよかる　走らンセよ
（体のためには朝は早くから走りなさいよ）
b. 困ったろば　おり　電話せンセよ（困ったら俺に電話しなさいよ）
c. 心配じゃろばってか　あんまる　考え込まンスナよ
（心配だろうけどあまり考え込まないでくださいよ）

(402b)「困ったら電話すること」のように、話し手にとって必ずしも遂行されなくてもいいような行為指示にも、/(-a)-Ns-/が用いられている。

次に、「聞き手利益命令」の用例を示す。「聞き手利益命令」は、聞き手に利益があり、聞き手の選択性が低い用法である。

(403) a. 泣こごたるしこ　泣かンセ
（泣きたいだけ泣きなさい）
b. そき　座っち　書かンセ（そこに座って書きなさい）
c. そるば　落とさンスナよ
（それ（財布）を落とさないでくださいよ）

(403a)「泣きたいだけ泣くこと」や(403b)「座って書くこと」など、聞き手がその行為をしやすいように配慮をしている。

5. 接辞/(-a)-Ns-/の由来

5.1. 近世期にみられる「んす」

藪路木島方言の/(-a)-Ns-/と類似する形式を、文献に探してみると、近世期の上方にみられる敬語の「ンス」「サンス」が類似しているようである。この「ンス」「サンス」には、湯沢(1962)、山崎(1963)の詳細な記述がある。「ンス」は四段活用動詞とナ行変格活用動詞、

「サンス」はそれ以外の活用に接続する。また、カ行変格活用動詞「来る」は、連用形「き」が「サンス」に接続する。以下に、用例を示す。

(404) a. まづゆるさんせ、汗を入て座敷へ〈暗女→客〉　（好色一代女(1686 年刊)・巻六）

b. 万事人にさからはず、身の慎みと申したこと、かならず忘れさんすな。〈おまん→源五兵衛〉　（薩摩歌(1704 年初演)・下之巻）

c. 谷の戸出る鶯の初音朧の聲を出し、「又来（き）さんしたか。早う往（い）なんし」など言へば〈傾城→瓢太郎〉　（浮世物語(1665 年刊か)・巻第一・六）

山崎(1963:597-602)は、この「ンス」「サンス」について、近世前期に「遊女ことば」から女性語へと展開し、化政期ごろから男性語へと展開して、庶民のことばになったと述べている。また、この形式は、時代が下るにつれ、待遇価値が下がり、化政期には「対等又はそれに近い上位者」に対する形式であったと述べている。以下は、男性や子どもが「ンス」を使用している例である。

(405) a. コレ親かた、こなんどこまでいかんすのじゃ、（中略）此間ハうし滝牛滝といふてたんといかしやるが、（中略）そんならおまへも哥よまんすか、（中略）親かたどふじや、よまんせんか〈馬方→客〉
（粋のみちづれ(1798 年刊)・巻之三・馬上吟二古歌一）

b. コレノおまいがた。須磨寺までの案内たのまんせ。是から近道じゃ。荷もつて五十くだんせ〈こども→弥次〉　（播州めぐり続膝栗毛二編追加(1813 年刊)・下 16 ウ）

この形式が、藪路木島方言の/(-a)-Ns-/につながる形式であると考えられる。ただし、母音語幹動詞には「サンス」が接続する点、カ行変格活用動詞の「来る」が「き」で接続する点が異なる。

5.2. 子音語幹活用動詞否定形からの類推

藪路木島方言の各活用の動詞に/(-a)-Ns-/が接続している例を以下に示す。

(406) a. 【子音語幹活用】起きらンセよ（起きなさいよ）

b. 【母音語幹活用】勘弁しちくれンセ（勘弁してください）

c. 【カ行変格活用】明後日　こンセ[7]（明後日来なさい）

d. 【サ行変格活用】お前どんが　よかごつ　せンセ（お前が好きなようにしなさい）

これらの形式は、動詞否定形に「セ」が接続しているとも捉えられる。前節に示した近世期の「ンス」が、子音語幹活用動詞に接続した場合、「行かンセ」という形式になり、動詞否定形「行かん」に「セ」が接続していると捉えることもできる。

藪路木島方言では、「命令」などの行為指示のとき、動詞命令形のほかに、以下の形式を用いる。

(407) a. こん本ば　おり　くれんカイ（この本を俺にくれ）

b. 書かんカ（書け）

c. 書かんネ[8]（書け）

上記の形式は、(407a)「くれん」や(407b,c)「書かん」という動詞否定形に助詞「カイ」「カ」「ネ」が接続している[9]。「行かンセ」も、このような「動詞否定形＋助詞」という行為指示の一種と捉えられたのではないか。子音語幹活用動詞から、動詞否定形に「セ」が接続しているという認識が起こり、他の活用に広がっていったと考えられる。

6. まとめ

本章では、藪路木島方言で行為指示に用いられる/(-a)-Ns-/の意味を記述した。/(-a)-Ns-/の記述は、これまで「軽い敬意」や「やわらかい命令」といった記述にとどまっていた。そこで、本章では、森(2016)の行為指示表現の分類を利用し、/(-a)-Ns-/の用法を詳しく記述した。この形式は、直接聞き手に働きかける文でのみ用いられる。「命令的指示」「依頼」「勧め」「聞き手利益命令」のいずれにも用いられるが、聞き手の負担が大きい場合など、配慮が必要な場合には使用することができない。

本章によって、大分県方言での先行研究をさらに発展させることができたと考える。また、これまで報告のなかった五島列島方言に、/(-a)-Ns-/がみられることを述べ、この形式が近世期の上方にみられた「ンス」に由来することを考察した。

当該方言の方言集である古川(2017)をみると、「コッチキマッセ」（こちらに来たらどうです）や「キヤッセンナ」（来ませんか）などが「よそ行き方言」と注記されたうえで挙げられている[10]。このように、当該方言には/(-a)-Ns-/のほかにも、行為指示で用いられる形式があることがうかがえる。これらの形式のなかで、当該方言の体系における/(-a)-Ns-/の位置は、本章で明らかにできていない。これを今後の課題とする。

---

[1] 当該方言では、/se/（セ）は[ɕe]と発音される。

[2] 地図は KenMap Ver.9.2（http://www5b.biglobe.ne.jp/~t-kamada/CBuilder/kenmap.htm）を用いて作成したものである。さらに、筆者が作成した地図の藪路木島の位置に、黒色を付した。

[3] 「起きる」は、共通語で母音語幹活用の動詞である。当該方言の/okir/'起'は、否定/okiraN/、過去/okiQta/と活用するため、子音語幹動詞に分類している。ただし、/mi-/'見'は、否定/miraN/、過去/mita/と活用する。

[4] /kee/'来い'は、/ko-/'来'に「命令」の/-(r)e/が接続したのではなく、/ko-i/の語形変化したものと考えられる。

[5] サ行変格活用動詞動詞/s-/には、「可能」/-(j)aje-/や「結果継続」/-tjor-/などの派生接尾辞が接続する。

[6] インフォーマントの内省によると、「進行」を表す「オル」は、[iotta]ではなく[iwotta]と発音しており、「オ」と「ヲ」は違う音であるという。このことは、藪路木島方言の音韻に関わる重要なことであるが、本章では、聴覚的にどちらの音でも発音されていることを踏まえ、「オ」に統一して記述している。

[7] 「明後日こンセ」は、当該方言でお金の無心を断る文に用いられている。

[8] 「動詞否定形+ネ」は、当該方言において女性が使うことばという印象があり、インフォーマント自身は、あまり使わないという回答であった。

[9] これらの助詞は、行為指示でなければ、動詞否定形以外にも接続する。以下に古川(2017)所収の用例を挙げる。該当箇所の下線は筆者によるものである。「ドゲンナロカイ」（どうなる事だろうか）、「ナーンスルカヨ」（全く要らぬことだ）「イコカネー」（行こうかなー）などである。

[10] 古川(2017)では、/(-a)-Ns-/を使用した形式である「オラバンセ」（大声で呼びなさい）や「マタンセ」（待っていて）などに、そのような注記はない。相手が地元の人か否かによって、待遇を分けていることを反映していると考えられる。

参考文献

愛宕八郎康隆(1978)「肥前長崎地方の「～キル」「～ユル」について」『長崎大学教育学部人文科学研究報告』27

愛宕八郎康隆(1983)「長崎県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 9 九州地方の方言』国書刊行会

有田節子編(2017)『日本語条件文の諸相―地理的変異と歴史的変遷―』くろしお出版

有元光彦(2007)『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』ひつじ書房

井島正博(1991)「可能文の多層的分析」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版

宇久町郷土誌編纂委員会編(1967)『宇久町郷土誌』宇久町役場、宇久町教育委員会

宇久町郷土誌編纂委員会編(2003)『宇久町郷土誌』宇久町役場、宇久町教育委員会

大西拓一郎編(2016)『新日本言語地図―分布図で見渡す方言の世界―』朝倉書店

片山秀賢(1960)「五島列島方言音調についてⅠ」『長崎県立短期大学長崎女子部　研究紀要』7

門屋飛央(2009)「長崎県佐世保市宇久方言におけるゴト表現」『論究日本文学』91

門屋飛央(2015)「宇久町平方言の「ゴト（如）」の用法」『西日本国語国文学』2

門屋飛央(2017)「佐世保市宇久町平方言の可能形式について」『文献探究』55

門屋飛央(2018)「長崎県佐世保市宇久町方言」方言文法研究会編（編者代表：小西いずみ・日高水穂）『全国方言文法辞典資料集(4)活用体系(3)』2014－2018 年度科学研究費補助金　基盤研究(A)「日本語の時空間変異対照研究のための『全国方言文法辞典』の作成と方法論の構築」（課題番号：26244024・研究代表者：日高水穂）研究成果報告書

門屋飛央(印刷中)「長崎県小値賀町藪路木島方言の/(-a)-Ns-/を用いた行為指示について」『坂口至教授退職記念日本語論集』私家版

上村孝二(1969)「薩摩人の観た五島列島方言の音韻」『鹿児島大学法文学部紀要　文学科論集』5

上村孝二(1970)「五島列島方言の表現文法」『鹿児島大学法文学部紀要　文学科論集』6

神部宏泰(1992)「第六章　表現形式交替の史的法則　第一節　九州方言における可能表現法―形式の隆替と表現特性―」『九州方言の表現論的研究』和泉書院（初出は「九州方言の可能表現法―その存立と特性―」『兵庫教育大学研究紀要』7-2、1987 年）

木部暢子・石田直子・市橋潤子・井上優子・川島由美・宮崎朋子・村嶋奈保子・室谷愛子(1988)「九州北部の可能表現」『文献探究』21

木部暢子(2001)「鹿児島方言に見られる音変化について」『音声研究』5-3

木部暢子(2004)「九州の可能表現の諸相―体系と歴史―」『国語国文薩摩路』48

九州方言学会編 (1991)『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房（初版は 1969 年）

黒木邦彦(2013)「上甑島里方言の形態音韻論―九州西岸部・西島嶼部方言文法記述のために―」『筑紫日本語研究 2012』
郡家真一(1976)『五島方言集』国書刊行会
国立国語研究所編(1966)『日本言語地図　第 1 集』大蔵省印刷局
国立国語研究所編(1989)『方言文法全国地図　第 1 集』財務省印刷局
国立国語研究所編(1993)『方言文法全国地図　第 3 集』財務省印刷局
国立国語研究所編(1999)『方言文法全国地図　第 4 集』財務省印刷局
国立国語研究所編(2002)『方言文法全国地図　第 5 集』財務省印刷局
小西いずみ(2016)『富山県方言の文法』ひつじ書房
斎藤純男(2009)『日本語音声学入門　改訂版』三省堂（初版は 1997 年）
柴田武(1959)「鹿児島県揖宿郡頴娃町」国立国語研究所『日本方言の記述的研究』明治書院
渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1
渋谷勝己(2002)「可能」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』(1998-2001 年度科学研究費研究成果報告書、研究代表者：大西拓一郎)
渋谷勝己(2006)「第 2 章　自発・可能」小林隆・佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂著『シリーズ方言学 2　方言の文法』岩波書店
下地理則(2018)『シリーズ記述文法 1　南琉球宮古語伊良部島方言』くろしお出版
下村泰子(1968)「五島列島の音韻とアクセント」『都大論究』7
住田幾子 (1983)「「ゴト・ゴタル」に見る九州方言の基質」『国文学攷』98
高木千恵(2009)「命令表現」国立国語研究所全国方言調査委員会編『方言文法調査ガイドブック 3』国立国語研究所
月川雄次郎(1997)『宇久方言で「魏志倭人伝」を読む』私家版
坪内佐智世 (2005)「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」4　標準語の「ヨウダ」「ラシイ」「ソウダ」と福岡市博多方言の「ゴター」―九州方言からモダリティを考える―」『日本語学』24-9
永澤済(2004)「式根島方言の可能形式 2 種の意味領域―「能力可能」と「一般可能」―」『日本語文法』4-2
中村京介(2017)「宇久方言の主語標示–ガとノの交替 Differential Subject Marking に着目して–」卒業論文、九州大学
中村京介(2018)「長崎県五島宇久島野方方言における無製麻擦音の解釈 : 音節末に/s/をみとめる音素配列規則の提案」『思言　東京外国語大学記述言語学論集』14
中村京介(2019)「長崎県五島列島宇久島野方方言の文法概説」修士論文、東京外国語大学.
日本語記述文法研究会編(2008)『現代日本語文法 6　第 11 部　複文』くろしお出版
原田章之進(1982)「長崎県北部方言間の親疎関係」『活水日文』7

原田章之進(1983a)「語彙の面より見た長崎県の方言区画」『活水論文集　日本文学科編』26
原田章之進(1983b)「宇久・小値賀両島方言の所属」『活水日文』9
原田走一郎 (2014)「福岡市若年層方言における 2 つのゴトの形態統語的違い」『阪大社会言語学研究ノート』12
原田由衣(2005)「対馬方言の「否定形+ネヨ」について」『福岡大学日本語日本文学』15
原田由衣(2006)「対馬方言の終助詞「ネ」の用法について」第 82 回日本方言研究会（2006 年 5 月 12 日、於東京学芸大学）発表資料
日高貢一郎(2013)「「豊日方言」の研究課題」『国語の研究』38
日高水穂(2002)「ヴォイス（受動文を中心に）」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』(1998-2001 年度、科学研究費研究成果報告書、研究代表者：大西拓一郎)
姫野伴子(1997)「行為指示型発話行為の機能と形式」『埼玉大学紀要』33-1
平山輝男(1938)「五島列島のアクセント」『音聲學協會會報』51
平山輝男(1951)『九州方言音調の研究』学界之指針社
平山輝男・大島一郎(1969)「五島列島の方言」『都市研究調査報告　都市の言語と周辺の言語（その 1）』1
舩木礼子 (2006)「天草方言のゴタル形式」大西拓一郎編『方言における文法形成の成立と変化の過程に関する研究』平成 14(2002)～平成 17(2005)年度　科学研究費補助金基盤研究 B(課題番号 14310196)研究成果報告書
古川初義(2017)『長崎県小値賀町藪路木島方言集～無人になった島のことばの記録～』私家版
古瀬順一(1969)「「五島列島方言」のアクセント」『国語国文学報』23
古瀬順一(1983)「五島の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 9 九州地方の方言』国書刊行会
牧野由紀子(2008)「大阪方言における命令形の使用範囲―セエ・シ・シテをめぐって―」『阪大社会言語学研究ノート』8
松田正義・日高貢一郎(1993)『方言生活 30 年の変容　下巻』桜楓社
森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦編(2015)『甑島里方言記述文法書』大学共同利用機関法人人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」サブプロジェクト（研究代表者・窪薗晴夫）「鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」研究成果報告書
森勇太(2016)『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』ひつじ書房
森山卓郎（1995）「推量・比喩比況・例示―「よう／みたい」の多義性をめぐって―」宮地裕・敦子先生古稀記念論集編集委員会編『宮地裕・敦子先生古稀記念論集　日本語の研究』明治書院
森脇茂秀(2007)「九州方言（長崎五島）」『国文学解釈と鑑賞』 72-7

森脇茂秀(2011)「長崎県五島福江方言の表現文法調査(1)」『別府大学国語国文学』53
森脇茂秀(2012)「長崎県五島福江方言の表現文法調査(2)」『別府大学国語国文学』54
山崎久之(1963)『国語待遇表現体系の研究　近世編』武蔵野書院
湯沢幸吉郎(1962)『徳川時代言語の研究』風間書房

引用文献

「西鶴集　上」「仮名草子集」『日本古典文学大系』（岩波書店）、「近松門左衛門集(1)」『日本古典文学全集』（小学館）、「上方咄本集」『上方藝文叢刊 9』（八木書店）、「滑利論言大師めくり」『古典文庫第 670 冊』（古典文庫）

あとがき

本文と既発表論文との関係は、次のようになっている。

7. 宇久町平方言の「ゴト（如）」の用法

「宇久町平方言の「ゴト（如）」の用法」

（『西日本国語国文学』第 2 号、pp.46-59（左開き）、2015 年 7 月、西日本国語国文学会）

8. 宇久町平方言の可能形式

「佐世保市宇久町平方言の可能形式について」

（『文献探究』第 55 号、pp.66-78（左開き）、2017 年 3 月、文献探究の会）

付録　小値賀町藪路木島方言の/(-a)-Ns-/を用いた行為指示

「長崎県小値賀町藪路木島方言の/(-a)-Ns-/を用いた行為指示について」

（『坂口至教授退職記念　日本語論集』近刊）

「1. はじめに」から「6. 複文」までは、書き下ろしである。書き下ろすにあたって、以下の口頭発表に基づいて行った。

① 「宇久方言の接続助詞について」第 254 回筑紫日本語研究会、2014 年 3 月、於熊本大学（『筑紫日本語研究 2013』に収録）

② 「宇久町平方言の動詞派生接尾辞「ラルル」について」第 265 回筑紫日本語研究会、2016 年 5 月、於九州大学（『筑紫日本語研究 2016』に収録）

③ 「佐世保市宇久町平方言の「動詞否定形＋ネヨ」について」第 267 回筑紫日本語研究会、2016 年 8 月、於九州地区国立大学九重共同研修所（『筑紫日本語研究 2016』に収録）

④ 「佐世保市宇久町平方言の「形容詞連用形＋ニ」について」第 269 回筑紫日本語研究会、2017 年 3 月、於熊本大学（『筑紫日本語研究 2016』に収録）

⑤ 「方言集にみられる小値賀町藪路木島方言の特徴について」第 270 回筑紫日本語研究会、2017 年 7 月、於九州大学（『筑紫日本語研究 2017』に収録）

⑥　「佐世保市宇久町平方言の「形容詞連用形＋ニ」による副詞的用法」平成 30 年度九州大学国語国文学会、2018 年 6 月、於九州大学

⑦　「日本各地の方言と佐世保市宇久町平方言の「形容詞連用形＋ニ」に対する考察」第 275 回筑紫日本語研究会、2018 年 8 月、於九州地区国立大学九重共同研修所（『筑紫日本語研究 2018』に収録）

本論文を執筆するにあたり、これまで多くの方々にご恩をいただいた。そのご恩は、わずかな紙幅で書き尽くせるものではないが、少しでも記しておき、感謝を申し上げたい。

まず、青木博史先生には、博士後期課程から指導教員になっていただき、温かいご指導をいただいた。他事を理由にして、研究の進まない私に対して、常に励ましてくださった。修士課程のときの指導教員であった髙山倫明先生にも、温かいご指導をいただいた。他大学から九州大学国語学国文学研究室に入学し、先生方にご指導をいただくことができて、本当に恵まれていた。

大学院生になって、研究者という道を選ぶにあたって、この研究室で学ぶことができたことは誇りであり幸福である。辛島正雄先生、川平敏文先生、言語学研究室の久保智之先生、上山あゆみ先生、下地理則先生、他にも多くの先生方からも、本当にたくさんのことを学ばせていただいた。筑紫日本語研究会、九州方言研究会などでお会いする先生方や先輩方、後輩たちにも、様々な場所でたくさんのご助力やご助言をいただいた。

学部 4 年生のときから、祖母にはインフォーマントになってもらっていた。祖母なくしては、この論文は書きあがらなかった。その祖母に、完成した論文を見せてあげられないのが、本当に申し訳ない。また、父母や伯父、妻の瞳には、本当に心配をかけた。家族の助けが私の研究にとって、大変励みになった。ここに記して、感謝を申し上げる。

なお、本論文は科学研究費補助金・スタート支援「宇久町方言の包括的記述による重層的日本語史研究（課題番号 17H06924）」、若手研究「宇久町の方言と文献による日本語史研究（課題番号 19K13209）」による研究成果の一部を含む。ここに記して謝意を表す。